

学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学 2021 秋

株式会社ディーシーアイ

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度との比較から推定できることにも言及しています。

目次

1. 全体概況	3
春学期との比較	4
(考察) コロナ禍にあった2年間を集計結果で振り返る	5
・回答率の変化等	5
・目的変数への寄与度	6
主要項目の科目区分別集計値分布	7
2. 領域ごとのサマリー	8
3. 項目別集計結果	9
参考資料1 実施率/回収率	19
1-1 アンケート実施率(回収率)科目区分別	20
1-2 アンケート実施率(学部) 2005年度春学期~2021年度秋学期	21
参考資料2 自由記述回答 頻出キーワード分析	23
自由記述回答 頻出キーワード分析について	24
<集計グラフ>	
【効果点】「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点	29
全学	30
学部別	31
回答人数帯別	32
学年別	33
出現率前回比較 全学	34
出現率前回比較 学部別	35
出現率前回比較 回答人数帯別	39
出現率前回比較 学年別	42
【改善点】改善できる点	45
全学	46
学部別	47
回答人数帯別	48
学年別	49
出現率前回比較 全学	50
出現率前回比較 学部別	51
出現率前回比較 回答人数帯別	55
出現率前回比較 学年別	58

■全体概況

授業評価に際して採用した質問文と、それぞれの平均および標準偏差¹は下表に示す通りです。無回答を除いた回答分布をもとに以下の方法で点数に換算してあります。

「5 そう思う」…5点、 「4 どちらかと言えばそう思う」…4点 「3 どちらともいえない」…3点
 「2 どちらかと言えばそう思わない」…2点 「1 そう思わない」…1点

質問	質問内容	平均				標準偏差				
		年	21	20	19	18	21	20	19	18
Q1	教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した	春	4.63	4.58	4.54	4.51	0.35	0.39	0.31	0.33
		秋	4.68	4.63	4.58	4.54	0.31	0.39	0.29	0.31
Q2	教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ	春	4.64	4.56	4.55	4.51	0.34	0.43	0.31	0.32
		秋	4.68	4.62	4.57	4.53	0.33	0.42	0.29	0.32
Q3	教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った	春	4.62	4.58	4.53	4.48	0.36	0.37	0.30	0.31
		秋	4.65	4.61	4.56	4.50	0.35	0.41	0.28	0.30
Q4	教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した	春	4.55	4.54	4.44	4.38	0.41	0.42	0.36	0.38
		秋	4.60	4.57	4.50	4.42	0.38	0.43	0.34	0.36
Q5	教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた	春	4.65	4.57	4.57	4.54	0.38	0.46	0.31	0.32
		秋	4.69	4.64	4.60	4.56	0.33	0.41	0.30	0.32
Q6	教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった	春	4.49	4.44	4.49	4.44	0.50	0.50	0.33	0.35
		秋	4.55	4.54	4.52	4.46	0.49	0.46	0.31	0.35
Q7	私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ	春	4.57	4.53	4.42	4.36	0.34	0.34	0.31	0.31
		秋	4.61	4.56	4.45	4.38	0.32	0.35	0.30	0.32
Q8	私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた	春	4.40	4.31	4.23	4.14	0.39	0.41	0.36	0.37
		秋	4.45	4.39	4.26	4.18	0.38	0.43	0.37	0.38
Q9	私は、この授業の到達目標を達成できた(できる)	春	4.26	4.17	4.18	4.11	0.40	0.45	0.36	0.35
		秋	4.33	4.28	4.21	4.14	0.40	0.43	0.34	0.35
Q10	私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた	春	4.49	4.40	4.35		0.39	0.45	0.36	
		秋	4.56	4.50	4.39		0.35	0.41	0.35	
Q11	私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった	春	4.23	4.12	4.20	4.16	0.54	0.62	0.45	0.44
		秋	4.32	4.25	4.25	4.19	0.49	0.56	0.43	0.44
Q12	私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に生きる	春	4.52	4.47	4.42	4.39	0.39	0.42	0.36	0.35
		秋	4.58	4.55	4.45	4.40	0.35	0.40	0.34	0.36
Q13	あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか	春	4.88	4.89	4.55	4.54	0.24	0.20	0.29	0.26
		秋	4.84	4.85	4.49	4.45	0.29	0.26	0.29	0.30
Q14	この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか	春	3.31	3.35	3.06	2.90	0.66	0.65	0.57	0.59
		秋	3.36	3.38	3.14	3.00	0.71	0.71	0.63	0.64
全質問合計(Q13、Q14を除く)		春	4.50	4.44	4.41		0.31	0.34	0.30	
		秋	4.56	4.51	4.45		0.28	0.33	0.29	

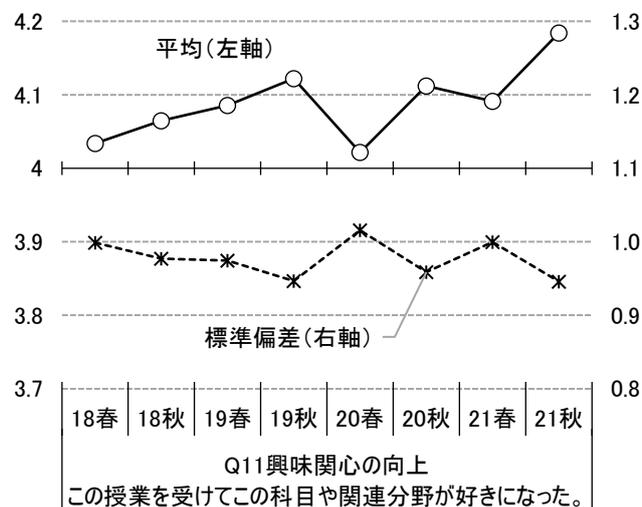
※Q10 学生の成長実感は2019年度に新設です。これに伴い、全質問合計も同年度からの表示としてあります。

¹ 表中の数値「平均」及び「標準偏差」は、授業ごとの評価集計値を元に算出したものです。別紙集計報告書では区分毎の回答から直接計算を行っているため計算結果は一致しません。

前回との比較の結果（学生の回答から直接算出したもの）は下表に示す通りです。多くの項目が前回は有意に上回っています。低下したのはQ13 出席率だけですが、平均値は4.9前後と極めて高く、特段の問題はないと思われます。Q14 平均学修時間、Q7 授業に臨む姿勢、Q3 教員シラバス対応の3項目は「前回以上」ではありますが、母平均の差に有意差はありません。

項目	実施	n	平均	標準偏差	前年同期比	
					実測値	t検定P値
Q11興味関心の向上	21春	22,779	4.09	1.00		
	21秋	15,098	4.18	0.95	△.093	0.0000 **
Q10学生の成長実感	21春	22,779	4.41	0.78		
	21秋	15,098	4.47	0.72	△.061	0.0000 **
Q9目標達成	21春	22,779	4.20	0.79		
	21秋	15,098	4.24	0.77	△.045	0.0000 **
Q12有用性	21春	22,779	4.44	0.78		
	21秋	15,098	4.48	0.75	△.041	0.0000 **
Q6教材・教具効果	21春	22,499	4.49	0.77		
	21秋	14,926	4.52	0.75	△.031	0.0000 **
Q1-12平均	21春	22,779	4.48	0.50		
	21秋	15,098	4.50	0.50	△.027	0.0000 **
Q5教員質問相談対応	21春	22,779	4.58	0.72		
	21秋	15,098	4.61	0.69	△.026	0.0002 **
Q2教員努力	21春	22,779	4.58	0.67		
	21秋	15,098	4.60	0.66	△.023	0.0006 **
Q1教員目標明示	21春	22,779	4.58	0.66		
	21秋	15,098	4.61	0.64	△.022	0.0005 **
Q4事前・事後学修指示	21春	22,779	4.51	0.76		
	21秋	15,098	4.53	0.74	△.019	0.0076 **
Q14平均学修時間	21春	22,779	3.13	1.02		
	21秋	15,098	3.15	1.06	△.013	0.1108
Q8質問・調査努力	21春	22,779	4.30	0.81		
	21秋	15,098	4.31	0.81	△.012	0.0768 !
Q7授業に臨む姿勢	21春	22,779	4.52	0.67		
	21秋	15,098	4.53	0.67	△.004	0.2623
Q3教員シラバス対応	21春	22,779	4.61	0.64		
	21秋	15,098	4.61	0.64	△.001	0.4436
Q13出席率	21春	22,779	4.91	0.36		
	21秋	15,098	4.87	0.42	▼.034	0.0000 **

以前から継続的に授業改善が重ねられてきたところに、2020年の春学期にコロナ禍での一斉休校／遠隔授業の影響を受けて、多くの項目で平均値の低下と標準偏差（授業間の差の拡大）が観測されましたが、同年秋学期にはほぼ回復し、再び改善が重ねられてきました。この変化を最も顕著に示しているのはQ11 興味関心の向上です。コロナ前の2018年度から平均値と標準偏差を辿ってみたところ、右図のような結果が得られました。



(考察) コロナ禍にあった2年間を集計結果で振り返る

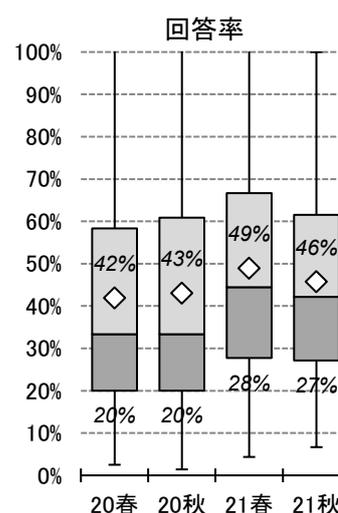
コロナ禍を機に学生の回答から算出した平均値(右表)が最も大きく変化したのはQ13出席率とQ14平均学修時間です。全授業が対面で行われていたときと「出席」の概念も異なり、授業を受ける代わりに自宅で取り組むタスク(提出課題など)も増えたことも踏まえると直接的な比較はできません。実際、両項目ともにこの4回の平均値は後掲(p.17)の通り、「ほぼ同水準を維持」です。Q4事前・事後学修指示も一斉休校を境に大きく充実が図られた様子です。

2カ年平均	'18-19	'20-21	変動量
Q1教員目標明示	4.44	4.58	+.13
Q2教員努力	4.44	4.56	+.12
Q3教員シラバス対応	4.45	4.60	+.15
Q4事前・事後学修指示	4.29	4.50	+.21
Q5教員質問相談対応	4.46	4.57	+.11
Q6教材・教具効果	4.38	4.46	+.08
Q7授業に臨む姿勢	4.30	4.51	+.21
Q8質問・調査努力	4.06	4.26	+.21
Q9目標達成	4.06	4.18	+.12
Q10学生の成長実感	4.27	4.41	+.14
Q11興味関心の向上	4.07	4.10	+0.02
Q12有用性	4.30	4.44	+.14
Q13出席率	4.52	4.89	+.36
Q14平均学修時間	2.84	3.16	+.32

Q7 授業に臨む姿勢や Q8 質問・調査努力にも比較的大きな変化が見られます。不明の解消や疑問の掘り下げに自ら進んで取り組む姿勢が涵養され、それを実施する方策の獲得も進んだと解釈したいところです。令和4年度は「原則として対面授業」との方針が打ち出されていますので、この2年間で積み上げられた「改善」が、今後どのように活かされるか注視したいと思います。

逆に変化量が小さかったのは、Q6教材・教具効果とQ11興味関心の向上です。両項目ともに、授業間の差異を示す「授業別換算得点の標準偏差」は0.5前後と他の項目群(概ね0.4以下)に比べて大きな値になっています。改善が遅れた授業のキャッチアップを進めるべく、好適実践を共有する仕組みを確立して、効果的に活用してもらうことを促す必要があるかと思えます。

コロナ禍で大きく低下した「回答率」は、今期も十分には回復していません。今期は、昨年同時期よりは改善しているものの、5割以上に達した授業は40%に止まります。前回も申し上げたことですが、回答率5割に満たない状況では、データの偏りで「より良い授業の実現に向けた改善課題の特定」を誤るリスクが懸念されます。原則として対面授業に戻る来年度は、従来と同程度(授業別の回答率の中央値が85%前後)に戻るかと思えますが、回答率の向上にはこれまで以上の注力が必要です。箱の上端を超えた授業で学生にどう働きかけたかを調べ、学内の知見としたいところです。直近4回分のデータを解析してみると、Q5教員質問相談対応と回答率の間には、



弱いながらも正の相関が確認できます。「先生に声を伝えれば答えてくれる」との認識を持てば、アンケートへの回答意欲も高まるということではないでしょうか。また、Q3教員シラバス対応との相関も小さくありません。先生方がシラバスに記載されたことを守らないことが度々であれば、学生もアンケートに回答するという「決まり事」をないがしろにしてしまうのかもしれない。

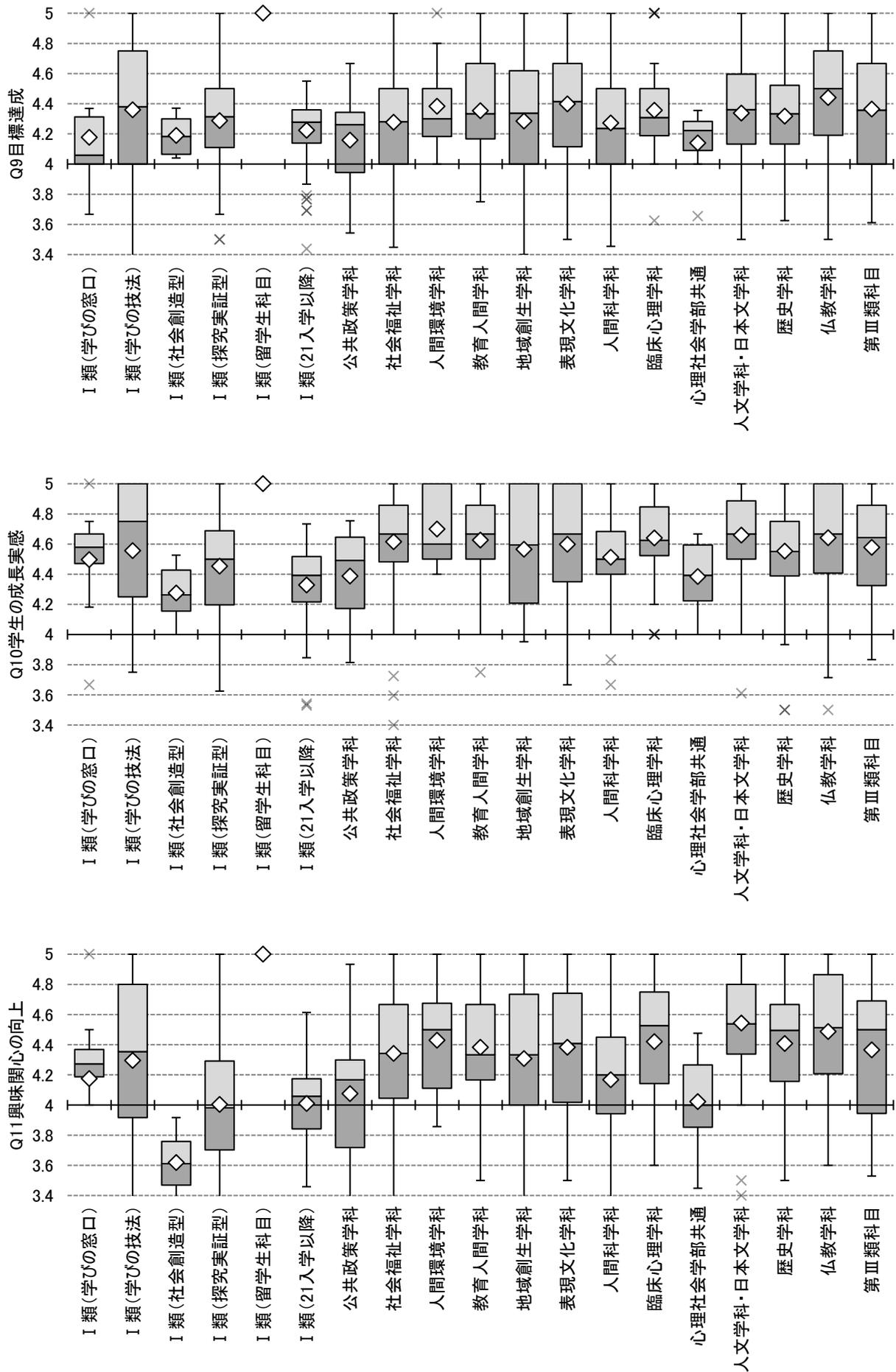
Q9 目標達成、Q10 学生の成長実感、Q11 興味関心の向上の各項目を目的変数に、先生方の直接的なコントロールが比較的容易と考えられる Q1～Q6 の各項目を説明変数にした重回帰分析（データは学生の回答をそのまま使用）で得られた偏回帰係数と有意性は下表の通りです。コロナ前後の秋学期で比較しました。各区分の上位 2 項目のセルに網掛けを施してあります。

偏回帰係数	Q9 目標達成		Q10 学生の成長実感		Q11 興味関心の向上	
	'18-19 秋	'20-21 秋	'19 秋	'20-21 秋	'18-19 秋	'20-21 秋
Q1 教員目標明示	0.144 **	0.147 **	0.171 **	0.143 **	0.126 **	0.124 **
Q2 教員努力	0.121 **	0.077 **	0.190 **	0.126 **	0.214 **	0.186 **
Q3 教員シラバス対応	0.079 **	0.069 **	0.043 **	0.054 **	0.037 **	-0.003
Q4 事前・事後学修指示	0.154 **	0.098 **	0.056 **	0.050 **	0.072 **	0.043 **
Q5 教員質問相談対応	0.069 **	0.041 **	0.138 **	0.101 **	0.143 **	0.110 **
Q6 教材・教具効果	0.184 **	0.223 **	0.208 **	0.250 **	0.276 **	0.395 **
定数項	0.769 **	1.242 **	0.694 **	1.161 **	0.261 **	0.277 **
決定係数(修正 R2 乗)	0.355	0.244	0.427	0.336	0.395	0.309

どの目的変数に対しても、Q6 教材・教具効果の偏回帰係数が以前と比べて大きくなっています。好適な教材と教具の用法が確立できた授業では、学生側での「学びの成果」が従来以上に確実なものになったことを意味します。他項目（評価項目に含まれていないことがらも含む）での改善が進んできたことで、各目的変数の向上を妨げていたボトルネックが解消されたことがこの変化の背景にあると考えられそうです。学生側の取り組みである Q8 質問・調査努力が改善したことの影響も小さくないと思われます。試しに、説明変数を Q1～Q8 にまで拡張してみると、コロナ後の秋学期 2 回分のデータをもとに算出した Q9 目標達成への寄与度のトップは、Q7 授業に臨む姿勢（偏回帰係数 0.402）と Q8 質問・調査努力（同 0.281）であり、この 2 項目だけを説明変数とする決定係数も 0.459 と比較的大きな値を示しています。Q7 は「真剣に授業に臨んだ」との主観的な自己評価であり、授業目標を達成できそうなことを以て自分の頑張りを十分だと評価してしまう「逆方向の因果」も想定されますので、今後さらなる授業改善を進めるには、学生に自力で不明を解消する姿勢と方策を獲得させること（＝Q8 の改善）がカギになりそうです。

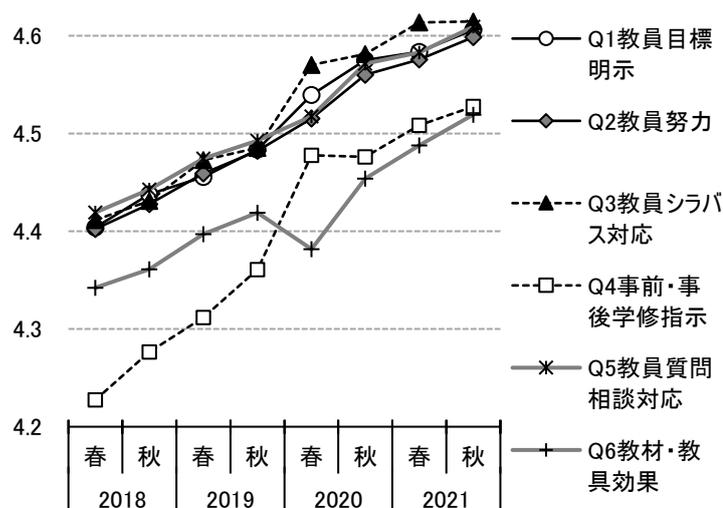
但し、上表の最下段に表示した重回帰分析の決定係数を見ると、どの目的変数に対しても以前より小さな値（Q9 目標達成を例にとると、2019 年度以前の 0.355 から 0.244 に低下）になっています。これは、Q1～Q6 の各項目で尋ねたこと以外から受けている影響が大きくなったということにほかなりません。如上の「目標達成に向けて学生自身がより頑張るようになったこと」の影響に加えて、学生間の気づきの交換／思考を深化する場である「対話的な学び」の充実が図られてきた授業では、Q1～Q6 の重回帰式が予測するよりも大きな学びの成果を得ていると思われます。アンケートの結果からは窺い知れないところにも、何らかの要因が隠れているかもしれません。

Q9～Q11 における科目区分ごとの授業別集計値の分布（n<5 の区分は非表示といたしました）は、次ページの箱ひげ図に示す通りです。担当授業の相対的な位置のご確認にお役立て下さい。



「教員による授業への取り組み」(Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6)

各項目ともに、前回と同等以上の評価です。Q3 教員シラバス対応以外の項目は前回との間に有意差(向上)が見られます。Q3 も過年度を超える評価です。他の4項目との比較で相対的に低い値で推移してきているQ4 事前・事後学修指示とQ6 教材・教具効果でも折れ線は右上がりが続いており、さらなる改善が今後も期待できそうです。



「学生による取り組みと成果」(Q7、Q8、Q9)

Q7～Q9の各項目ともこれまでで最も高い評価を得ています。昨年同時期との比較でも有意にプラスになっています。とりわけ、Q7 授業に臨む姿勢は、中央値が4.6ポイントを超えるなど、高い評価になっています。アンケートに回答していない学生がどのように評価しているか気になるところですが、集まったデータを見る限り、全学で概ね良好な状態と言えます。4.0ポイントに届かない授業は、Q7で18件(1.8%)、Q8で70件(6.9%)、Q9で119件(11.7%)まで減少しています。改善が立ち遅れた場合のキャッチアップは急務です。

「授業に対する満足度(学びの成果)」(Q10、Q11、Q12)

この領域も、全項目でこれまでの実績値を超える評価を得ました。Q10(中央値4.59)、Q12(同4.63)と比べ、Q11 興味関心の向上はやや低めですが、それでも授業別集計値の第1四分位数は4.0ポイントに達しました。ただし、Q11は授業間で差異がまだ大きく残っています。四分位範囲IQRは、Q10とQ12が0.5前後であるのに対し、Q11は0.67です。科目区分による違いも小さくありません。前掲の箱ひげ図で、遅れが見られる区分では「どのように学生の興味や関心を刺激していくか」を、同じ科目区分の授業を担当される先生方でアイデアを出し合って、工夫を重ねていく必要もあろうかと思えます。

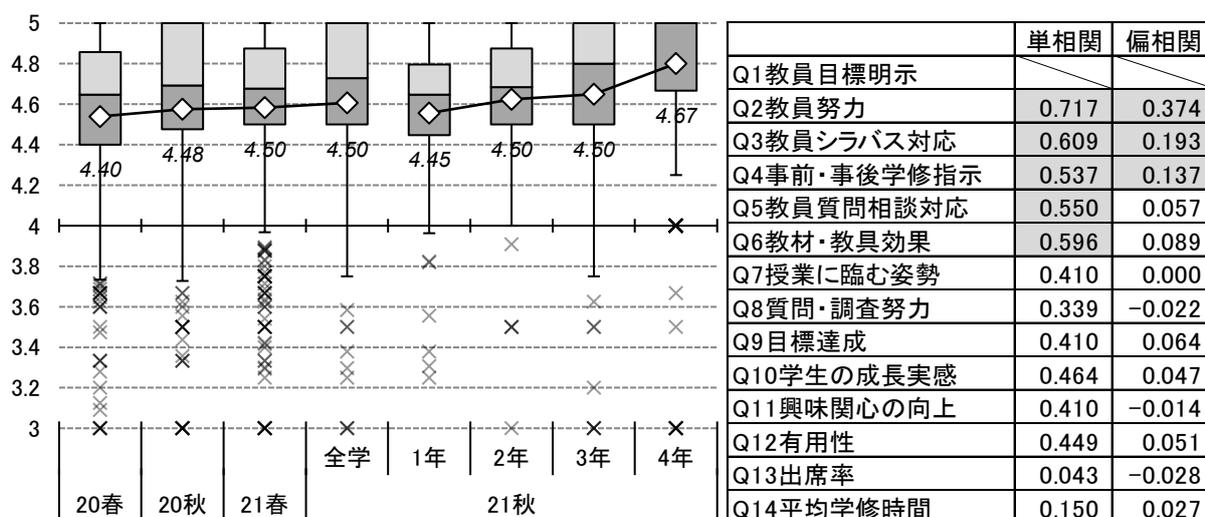
「出席率、平均学修時間」(Q13、Q14)

前掲(p.4)の表にも見る通り、Q13出席率は全学で見るとすでに高止まりと言える水準にあります。一方で、Q14平均学修時間は昨年の秋学期を平均値でわずかながら下回りました。コロナ前からの上昇はとて大きいものですが、ここ2年間は一進一退の様相であり、顕著な上積みは見られません。

■項目別集計結果分析

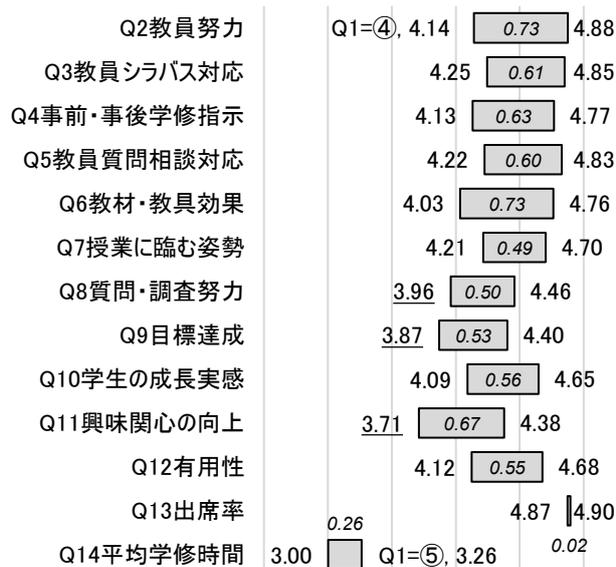
各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を、直近4回分の追跡結果と当期の学年別で表示した四分位図²と、他項目との単相関・偏相関の一覧です。四分位図において「箱」の直下に表示した数字は第1四分位数です。これを下回っている場合、キャッチアップが急務とお考え下さい。箱ひげ図の右側に配した相関係数の一覧では、単相関と偏相関の双方について各々の相関行列で上位25%に含まれるケースに網掛けを施してあります。高い偏相関で結ばれる項目は、それぞれ別個に改善策を講じるよりも、セットで改善を考えた方がうまく運ぶケースが多いはずです。

Q1 教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した



昨年同時期を有意に上回る評価です。箱の下端は4.5ポイントに達し、大半の授業が高い評価を得ています。4.0ポイント未満の授業は1.5%に過ぎません。相関の出方は前回までとほぼ同じです。Q2 教員努力との相関はかなり強固であり、「目標が共有できてこそ、学生はその達成に向けた先生方の意欲を正しく評価できる」と考えられそうです。右図は、Q1で「⑤そう思う」と答えた場合と「④どちらかと言えばそう思う」と答えた場合の他項目の評価（平均値：データは直近4回分）の違いです。箱の右に添えたのが前者の値、左が後者の値で、箱内に表示した数字は両者の差です。{Q1=④}の場合、Q8 質問・調査努力、Q9 目標達成、Q11 興味関心の向上の3項目で平均値が4.0を下回っており、目標の明示は疎かにできません。

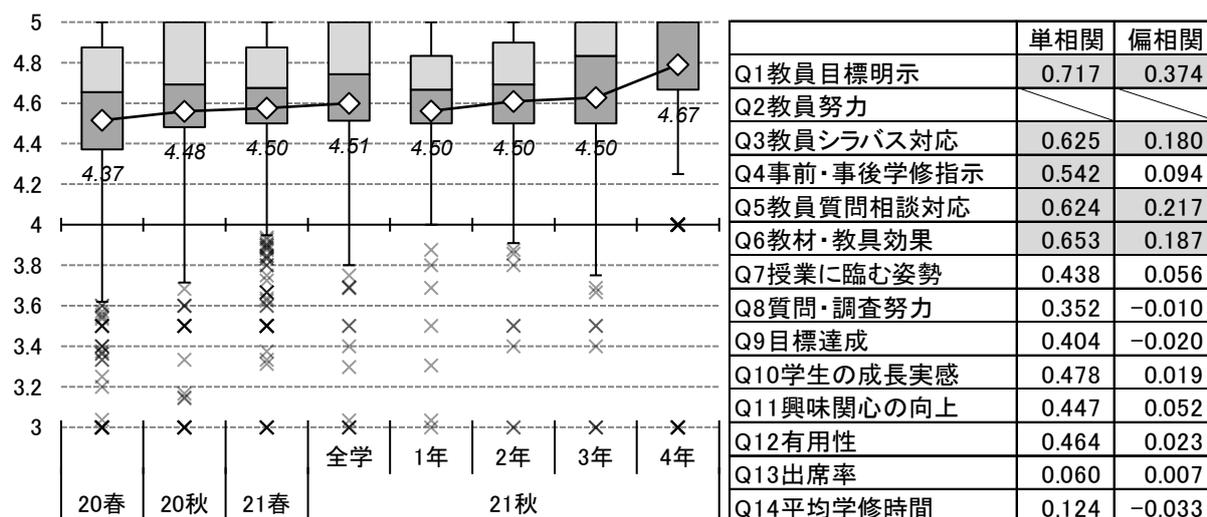
Q1教員目標提示の影響



² 平均値◇は、前回までの「授業別集計値の平均」から「学生の回答から直接算出した値」に変更しました。

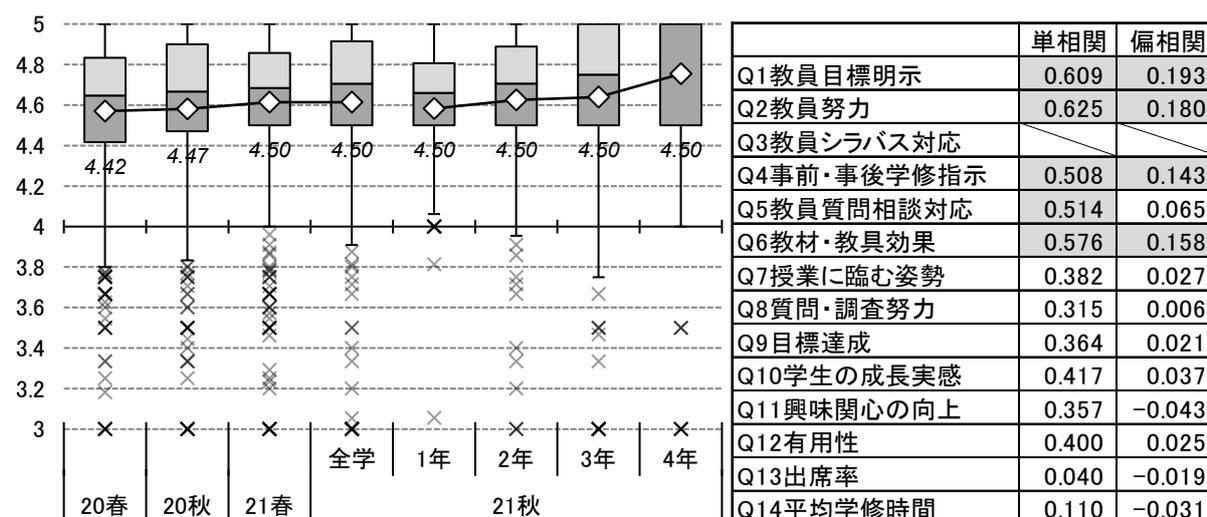
Q1 教員目標明示の改善を図るには、その日の授業／単元／学期／講座全体の学びを終えたときに答えを導くべき問いの形で目標を示すのが好適です。履修開始時点などでは、学習内容やそこで獲得する概念などを表す言葉を提示しても、学生は「何を学ぶのか」でさえ明確にイメージできないことがあります。具体的な問いがあれば、それに答えるために必要な情報を集め、知識や理解、発想を得ようとして、学びへの積極的な行動も見られるようになるのではないのでしょうか。

Q2 教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ



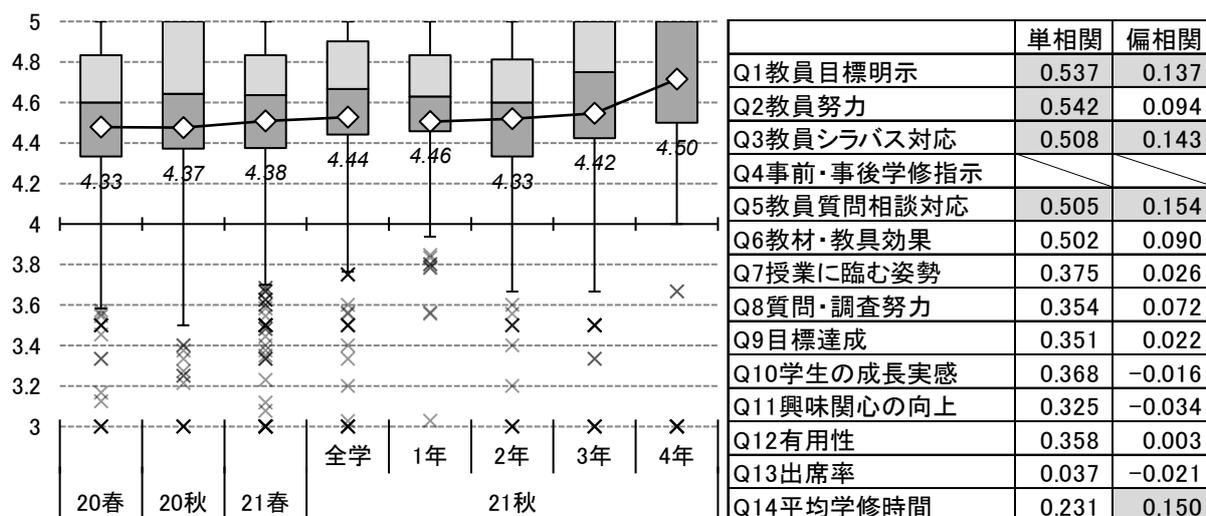
着実に改善が積み重なり、昨年同時期から有意に改善しています。4.0 ポイント未満の授業は2.4%まで減りました。相関行列からは、「授業の到達目標を明確に示した上で、Q3、Q5、Q6に改善課題を抱えない」ことが、この項目（Q2）の評価を高く保つための要件と言えそうです。

Q3 教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った

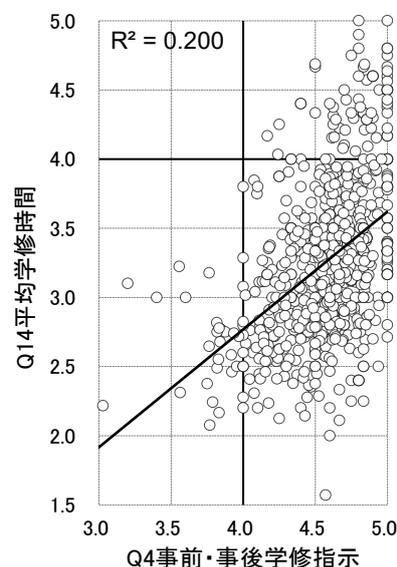


改善が着実に積み上げられてきています。他項目との相関の出方は前回までとほぼ同じです。4.0 ポイントに届かない授業は全学で2.7%（昨年秋学期は3.9%）でした。改善が遅れた授業では、シラバスを起こすときの計画に見込みの甘いところがなかったか、変更を余儀なくされたときの学生への予告と説明に不足がなかったかを点検する必要があるかもしれません。

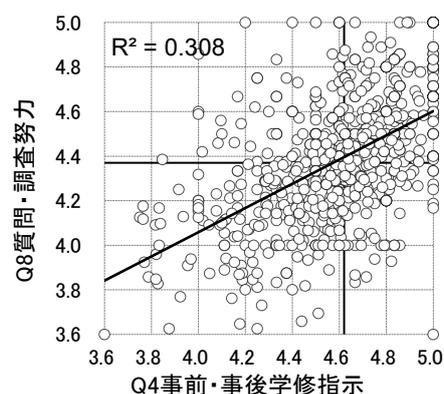
Q4 教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した



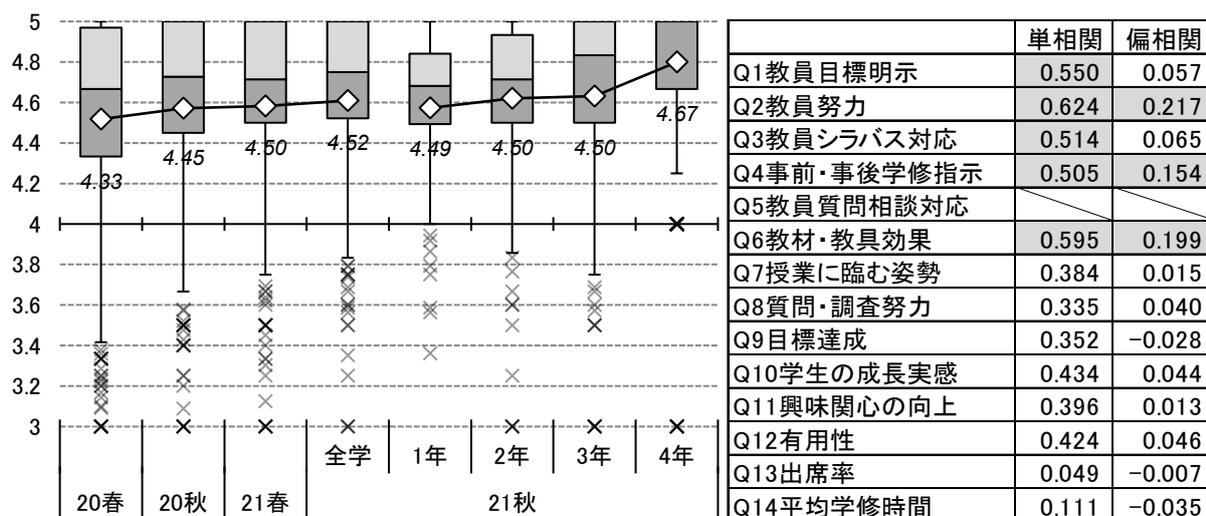
改善が積み上げられ、4.0ポイントに届かない授業は4.5%まで減りました。事前・事後学修を具体的に指示していれば、Q14 平均学修時間は自ずと伸びるはずですが、両項目の相関は右図（回答数5未満の授業は非表示にしました）に見る通り、決して強固とは言えません。残差（=近似線から上下に離れた距離）を目的変数、他の12項目を説明変数とする重回帰分析を行ってみると、最も大きな偏回帰係数が算出されたのはQ8 質問・調査努力（偏回帰係数0.24、単相関0.20）でした。「先生方が指示したタスクをこなす時間」と「学生自身が見出した不明や興味を解消する時間」を足し合わせたものが総学修時間ですので、この結果はある意味で当たり前かと思えます。念のため、Q4 事前・事後学修指示とQ8 質問・調査努力のクロス集計表にQ14 平均学修時間の換算得点を当てはめてみると、下表の結果が得られました。3.0（授業1回あたり31分～60分に相当）以上のセルに網掛けを施してあります。Q4、Q8いずれか一方だけの改善では学修時間の延伸効果は限定的であることがわかります。具体的なタスクを指示するとともに、学生が不明や疑問を見つけてその解消に取り組む「きっかけ」を与えていくことが重要と思われます。相関行列や下図でご確認いただける通り、Q4とQ8の相関は決して強固とは言えず、どちらかに大きく偏る授業も少なくありません。



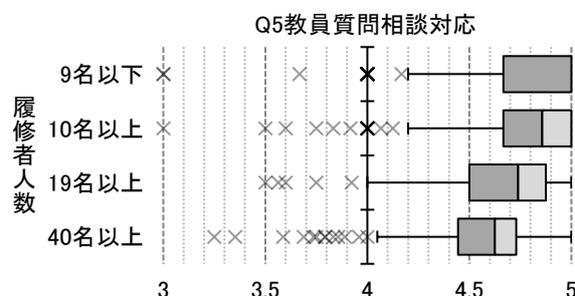
Q14平均学修時間(換算得点)	Q8質問・調査努力					小計
	⑤	④	③	②	①	
Q4事前・事後学修指示						
⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤	3.47	3.18	2.92	2.65	2.36	3.32
④ ④ ④ ④ ④	3.25	3.00	2.70	2.45	2.28	2.98
③ ③ ③ ③ ③	2.90	2.70	2.44	2.24	2.05	2.62
② ② ② ② ②	2.97	2.53	2.24	2.04	1.95	2.47
① ① ① ① ①	3.04	2.58	2.26	1.88	1.93	2.48
小計	3.42	3.05	2.72	2.45	2.20	3.16



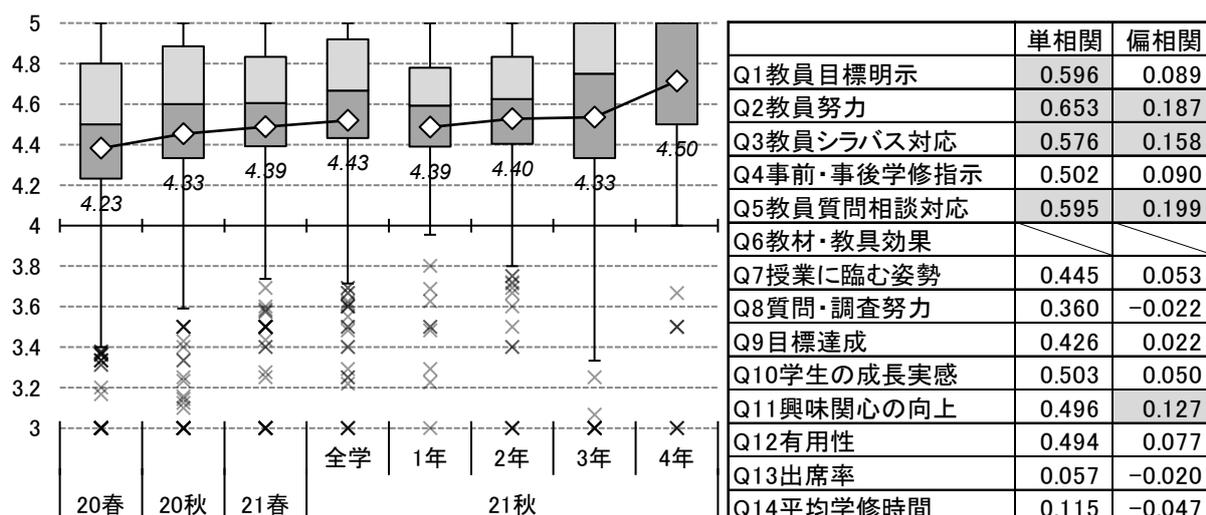
Q5 教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた



この項目も改善が積み上げられ、これまでで最も高い評価を得ました。4.0 ポイント未満の授業は全体の 2.7%まで減少しています。箱の上端は前々回から 5.0 に張り付き、4 分の 1 の授業が「満点評価」です。右図の通り、比較的大人数の授業でも高い評価を得ています。学年が上がるごとに評価が高まるのは、時間の経過とともに先生方との関係が密に築かれていることに加え、質問や相談を具体化して伝える力を学生が身につけていることも示しています。



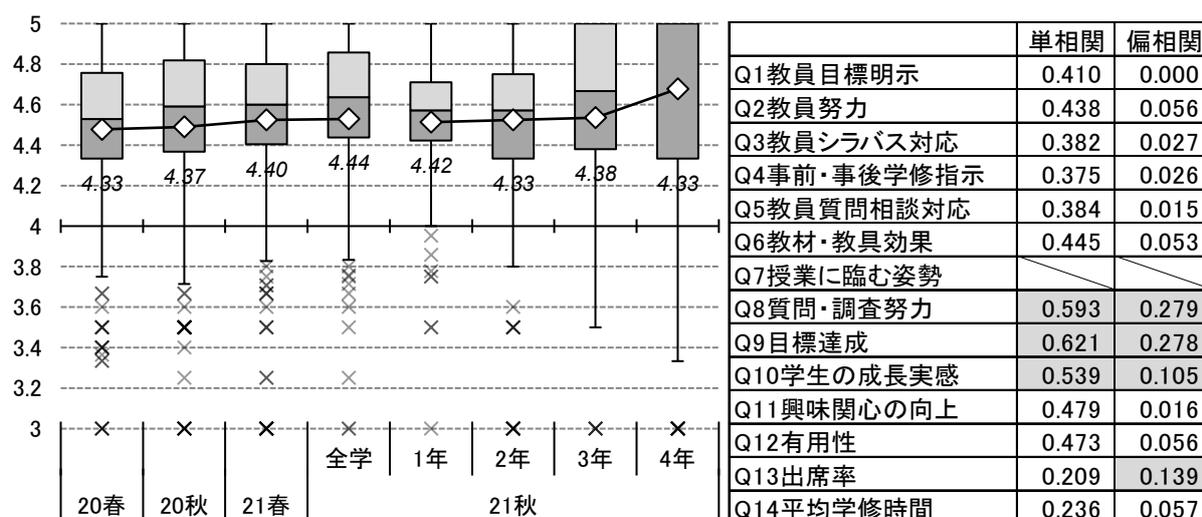
Q6 教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった



改善が重ねられており、これまでで最も高い評価となりました。特に強い相関で結ばれている Q2 教員努力、Q3 教員シラバス対応、Q5 教員質問相談対応のうち、Q2 教員努力は、理解を深める適切な教材や教具が実現していることを以て得られる評価だと思います。シラバスを起草する段階での教材・教具、授業デザインの熟慮は、Q3 を改善すると同時に、Q2 と Q6 の強固な相関の背

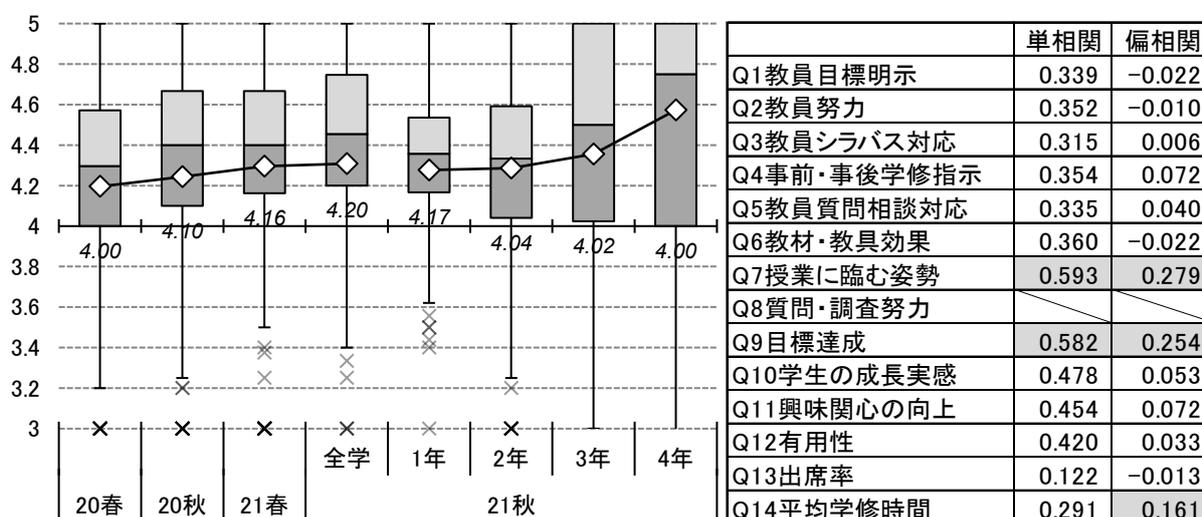
景因子として働くと考えるのが妥当なところかと存じます。また、Q5 教員質問相談対応で高評価を得ている授業では、学生の躓きがどこで生じるのかを十分に把握できるため、それを先読みした教材の選択や教具の工夫ができることを、相関行列の数値は示しています。前回は申し上げたことですが、大人数になればなるほど「観察や対話」で学生の理解を個々に把握するのが難しくなる分、伝え方に改善課題があってもそれを検知するのが遅れがちになります。履修者の多い授業ほど、意識的な理解の把握／学生の観察が必要ということです。提出物の精査などの「間接的な観察」や ICT を使った授業内のミニテストなども積極的に活用したいところです。

Q7 私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ

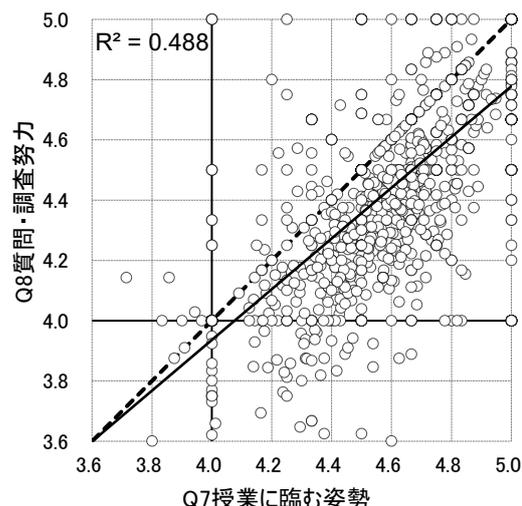


着実に改善が進んでいます。前述の通り、コロナ前と比べた時の伸びは顕著です。Q14 平均学修時間との相関は春学期よりわずかながら強くなりました（単相関 0.209→0.236、偏相関 0.039→0.057）が、依然としてかなり曖昧です。繰り返して恐縮ですが、適正な負荷とハードルを与えないことには、「このくらいで十分／真剣に取り組んだことになる」との認識を持たせてしまいます。前回の分析で触れた Q10 学生の成長実感との相関には、はっきりしたものが見え始めました。

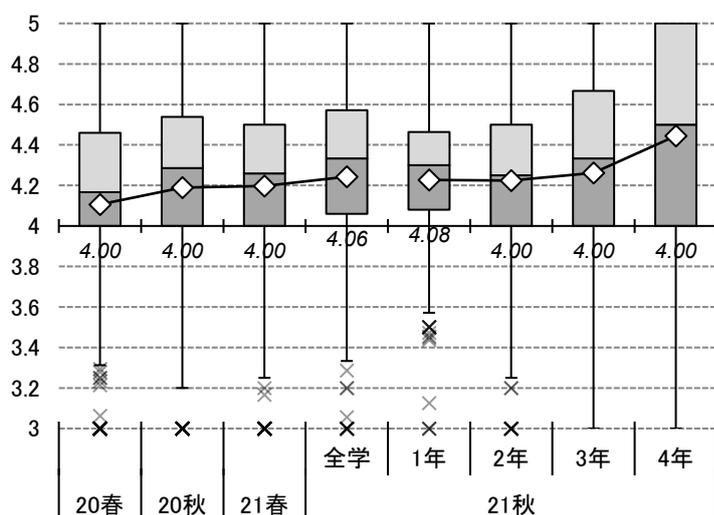
Q8 私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた



昨年同時期を有意に上回っており、箱の下端も連続して上昇しています。Q7 授業に臨む姿勢との相関は、前回より少し強くなりましたが、Q8 質問・調査努力が Q7 よりも大きな値に達した（グラフ中の破線の上側に位置）授業は依然として少数です。近似線を下方に大きく離れた授業では、自ら不明解消に努めることがないまま「授業に真剣に臨んだ」と認識している学生が多くを占めていることとなりますので、その認識を改めさせる働きかけが必要かと思えます。課題を与えて、個々に／協働で答えを作ることとを求めることで、不明の所在に気づかせ、解消に向けた行動を取らせましょう。



Q9 私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）

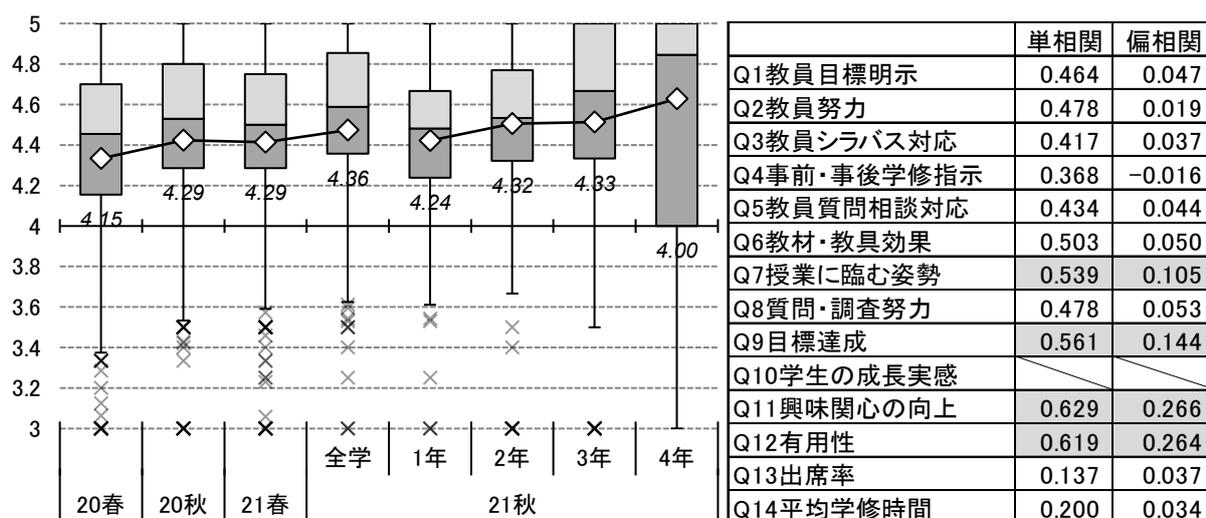


	単相関	偏相関
Q1 教員目標明示	0.410	0.064
Q2 教員努力	0.404	-0.020
Q3 教員シラバス対応	0.364	0.021
Q4 事前・事後学修指示	0.351	0.022
Q5 教員質問相談対応	0.352	-0.028
Q6 教材・教具効果	0.426	0.022
Q7 授業に臨む姿勢	0.621	0.278
Q8 質問・調査努力	0.582	0.254
Q9 目標達成		
Q10 学生の成長実感	0.561	0.144
Q11 興味関心の向上	0.539	0.167
Q12 有用性	0.468	0.009
Q13 出席率	0.160	0.048
Q14 平均学修時間	0.193	-0.024

これまでの実績値を上回る評価を得ています。4.0 ポイント未満の授業は 11.7%（昨年同時期は 15.1%）に減っています。さらなる改善には、強い相関で結ばれている Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力を引き上げていく必要があります。

学生が「自分事」として認識できる課題をしっかりと設定した上で、手持ちの知識・情報・発想で導ける「仮の答え」を作らせることでも、不明や深めるべき疑問の所在が個々の学生のうちに明らかになりますので、学びに向かう姿勢はより強固なものになるはずですが、実際に調べたり、話し合ったりする中で、学びの方策の獲得も進みますし、振り返りをしっかり行えばメタ認知・適応的学習力も向上します。Q12 有用性との相関は、現状においてあまり強固なものではありませんが、如上の問いに取り組むことで、これから学ぶこと／学んでいることがどこに繋がっているかより明確に認識することができるはずですが、また、学び（先生の講義を聞いたり、自分で調べたり、周囲と話し合ったり）を終えて、仮の答えを作り直し、納得のいく答えを仕上げることであれば、授業で学んだことの「有用性」はより強く実感できるのではないのでしょうか。

Q10 私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた

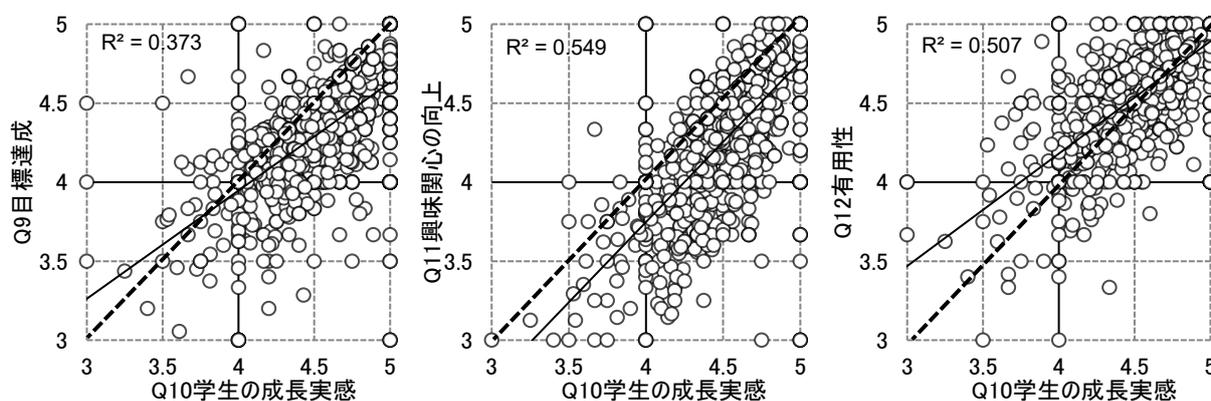


例年のことながら、秋学期は春学期を大きく超える評価を得ています。4.0ポイント以下の授業は3.8%まで減少しました。Q8 目標達成、Q11 興味関心の向上、Q12 有用性の「学びの成果」に関わる項目との間の相関はかなりはっきりしたものが読み取れますが、それぞれとの相関を散布図に描いて探してみると、特徴的な形（下図参照）が見て取れます。

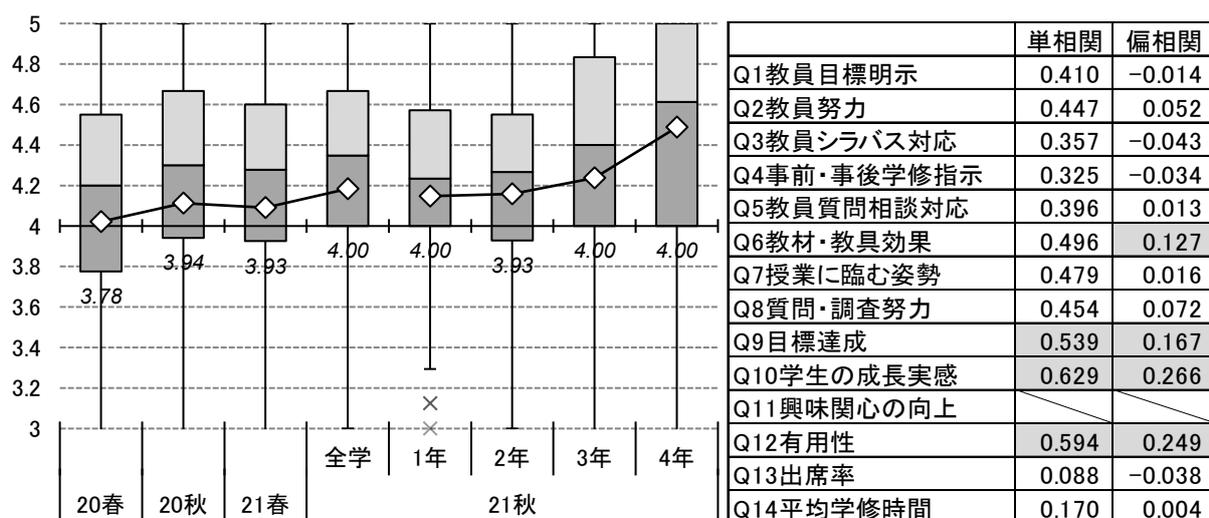
Q9 目標達成との相関はやや曖昧ですが、ほとんどの授業が $\{Q9 \leq Q10\}$ （破線の下側）に分布しており、授業の到達目標を達成できれば、成長実感も一定程度は担保できそうです。

Q11 興味関心の向上との関係では、 $\{Q10 \geq 4.0\}$ でも $\{Q11 < 4.0\}$ の授業がかなりの割合になっており、授業を通して得た「気づきや新しいものの見方」がより広い範囲の興味には直結しない様子が見て取れます。興味・関心を刺激するためには何らかの策／手立て（次項 Q11 のコメントもご参照下さい）が必要と思われます。 $\{Q11 \text{ 興味関心の向上} \geq Q10 \text{ 学生の成長実感}\}$ （破線の上側に位置する）授業での実践にその手法を学ぶ機会も学内に整えていきたいところです。

Q12 有用性との散布図では、ほとんどの授業が $\{Q10 \geq 4.0, Q12 \geq 4.0\}$ に分布しています。両項目ともに、高い評価を得ており、現状に特段の問題はないということだと思います。

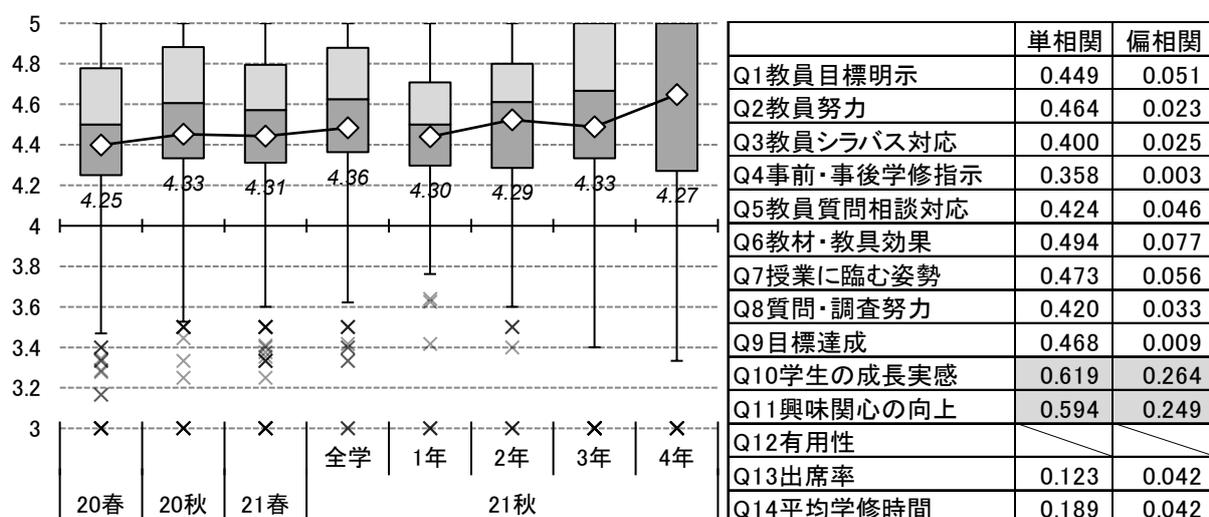


Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった



箱の下端が初めて 4.0 ポイントに達しました。授業間の差はまだ大きいです。外からの働きかけで直接「好きにさせる」のは容易ではありません。学んだことが役立つ場面を経験させること (Q12) や、新たな気づきを得られるような課題に取り組みさせること (Q11) に加えて、「関連分野」について知る機会を与えること、それらがコントロールできるものだと思わせることも要件です。

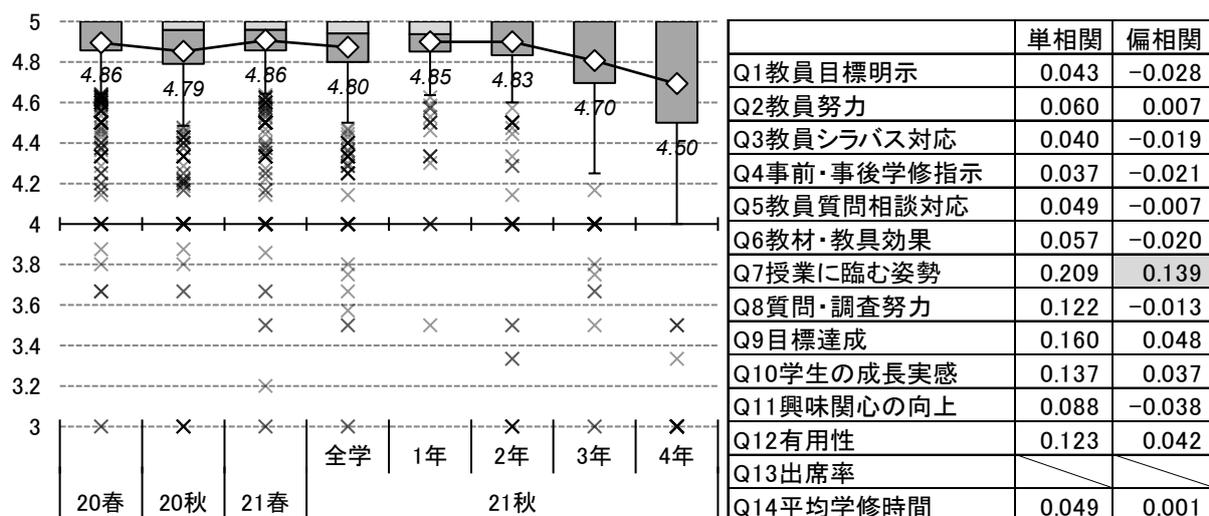
Q12 私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に生きる



昨年同時期との差はわずかですが、有意に上回っています。前回の分析では、Q11 興味関心との不一致が一部の科目区分に見られるとお伝えしましたが、改めて相関係数を科目区分ごとに算出してみると下表の結果になりました。相関係数の小さいところほど不一致が多く発生しています。

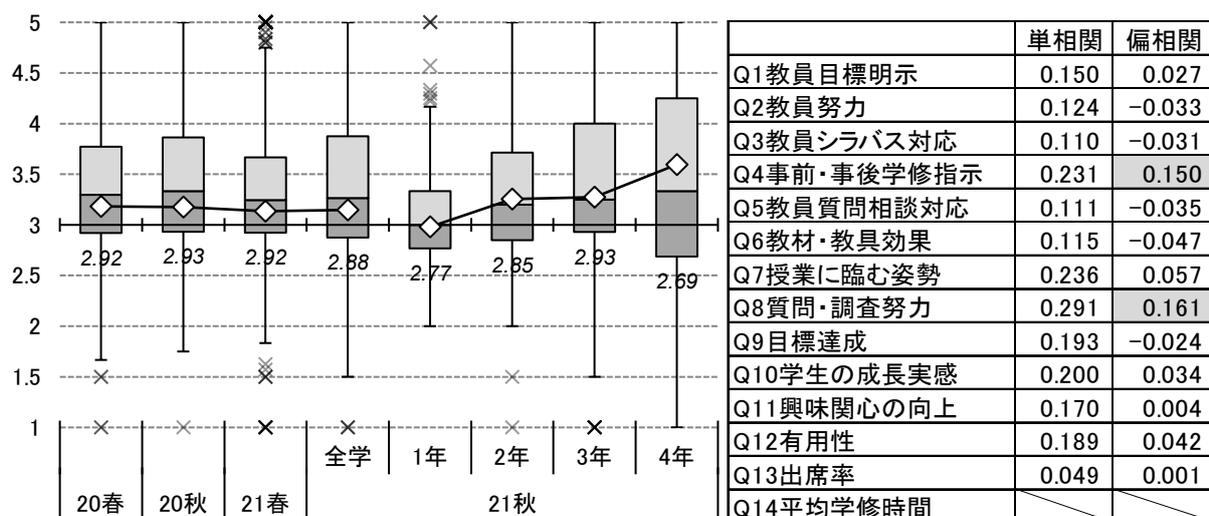
相関係数(Q11興味関心の向上×Q12有用性) ※授業別集計値から算出。					
人間環境学科	0.835	地域創生学科	0.726	I 類(2021年度入学以降)	0.678
第Ⅲ類科目	0.785	仏教学科	0.712	I 類(学びの技法)	0.669
教育人間学科	0.768	臨床心理学科	0.712	表現文化学科	0.663
公共政策学科	0.751	I 類(社会創造型)	0.695	I 類(学びの窓口)	0.632
社会福祉学科	0.740	心理社会学部共通	0.693	人文学科・日本文学科	0.617
歴史学科	0.736	人間科学科	0.679	I 類(探究実証型)	0.476

Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



昨年の春学期から「高止まり」です。現状に特段の問題はありません。Q7 授業に臨む姿勢との間には一定の偏相関が見られますが、他項目との相関は総じて曖昧です。「欠席せずに授業に参加していること」が、他項目との明確な関連を持たずにあたかも「独立」しているかのようです。

Q14 この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか



前述の通り、コロナ前とは大きく異なりますが、直近4回ではほとんど変化が見られません。昨年春学期の実績をわずかに下回りました。「31～60分」に相当する3.0はキープしたいところかと思いますが、現状では29.4%の授業がこの値を下回ります。なお、「61～120分」に相当する4.0に達している授業は前回の18.8%から23.0%に増えています。事前・事後学修に適切な（＝達成可能性が担保された、且つチャレンジングな）課題を、量的なところまできちんと考慮して課すことで、学修時間の延伸／コントロールができるはずですし、それらにしっかりと取り組ませれば、授業では「教室でしかできない学び」（対話的な学びなど）により多くの時間を割り当てることができます。また、前述（p.14）で書いた「仮の答えを仕上げ直すこと」を、日々の授業で求めれば、当然のこととして、事後学修にも一定の時間が投じられるようになるはずで

参考資料 1

実施率

参考資料1-1. アンケート実施率科目区分別

■学部1174科目

科目区分	授業数	実施数	実施率	0%	20%	40%	60%	80%	100%
01 I類(学びの窓口)	302	9	9	100.0%					
04 I類(留学生科目)	304	9	9	100.0%					
10 I類(社会創造型)	305	6	6	100.0%					
13 I類(2021年度入学以降)	307	78	78	100.0%					
15 人間学部共通	313	1	1	100.0%					
19 公共政策学科	320	12	12	100.0%					
20 社会共生学部共通	321	1	1	100.0%					
05 臨床心理学科	315	46	45	97.8%					
11 歴史学科	318	101	98	97.0%					
15 教育人間学科	312	39	37	94.9%					
08 人間科学科	314	58	55	94.8%					
12 I類(探究実証型)	306	100	92	92.0%					
14 社会福祉学科	310	87	80	92.0%					
21 I類(学びの技法)	303	55	50	90.9%					
06 地域創生学科	322	78	70	89.7%					
18 人文学科・日本文学科	317	106	94	88.7%					
09 第三類科目	325	44	39	88.6%					
16 仏教学科	309	144	126	87.5%					
07 心理社会学部共通	316	8	7	87.5%					
02 人間環境学科	311	18	15	83.3%					
03 表現文化学科	319	122	94	77.0%					
計	1122	1018	90.7%						

■大学院69科目

科目区分	授業数	実施数	実施率	0%	20%	40%	60%	80%	100%
05 院史学専攻(修士・博士)	302	12	12	100.0%					
07 院国文学専攻(修士・博士)	303	5	5	100.0%					
02 院比較文化専攻(修士・博士)	307	4	4	100.0%					
01 院宗教学専攻(修士・博士)	308	9	9	100.0%					
08 院臨床心理学専攻(修士)	304	21	18	85.7%					
04 院仏教学専攻(修士・博士)	301	27	20	74.1%					
03 院社会福祉学専攻(修士)	305	9	4	44.4%					
計	87	72	82.8%						

参考資料1-2. アンケート実施率(学部) 2005年度春学期～2021年度秋学期

年度	学期	実施率	実施数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217
2017年度	秋学期	92.6%	1096	1183
2018年度	春学期	97.8%	1183	1209
2018年度	秋学期	95.1%	1098	1154
2019年度	春学期	95.7%	1219	1274
2019年度	秋学期	96.2%	1127	1172
2020年度	春学期	92.2%	1174	1274
2020年度	秋学期	92.1%	1113	1208
2021年度	春学期	92.2%	1174	1274

2021年度	秋学期	90.7%	1018	1122
---------------	------------	--------------	-------------	-------------

※2020年度からweb方式での実施へ変更。

参考資料 2

自由記述回答
頻出キーワード分析

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に

「この授業において、あなた自身の『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じたのはどのような点でしたか。また、この授業において改善できる点があればお書きください。」

として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出するキーワードを調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1として出現頻度の上位10ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2による前回と前々回(=前年同期)データに加え、今回の全学平均を表示することとしています。

分析上の主なポイント

質問文は前半の「『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点」(効果点)と後半の「改善できる点」(改善点)に分かれます。そこで記述内容により効果点と改善点に分けて集計を行いました。分析上の主なポイントは下記の通りです。

- (1) 質問の前半に対する回答(効果点)と後半に対する回答(改善点)を分けて集計・分析を行っています。
- (2) できるだけ具体的なキーワードに分解・集計しています。例えば「分かりやすい」は「○○で分かりやすかった」「△△△をしてくれたので分かりやすかった」など、分かりやすい理由となった「○○○」「△△△」を独立したキーワードとして集計。理由が明確でないものを「分かりやすい」として残しました。
- (3) 当該授業そのものがテーマとしている項目は、キーワードとして出現数が高い場合でも全学共通の課題や効果点とはなりえないため、対象キーワードから除外しました。

※例:「レポートの書き方がよく分かった」はキーワード「レポート・課題」からは除外。
キーワード「レポート・課題」には「レポート・課題の出し方や評価方法がよかった/レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった」などに限定して仕分け、集計。

今回の特徴

回答の内訳は1年生:54.8%、2年生34.0%と、1,2年生で全自由記述回答の9割近くを占めています。

対面授業を基本としながら、オンライン授業も同時に行うハイブリッド授業があることから、キーワードとしては、オンライン授業そのものに対する全般的な意見を「オンライン授業」としてまとめ、その他の具体的な内容についてはできる限り個別のキーワードとして分類集計する方法を維持しました。

効果点と改善点

1. 効果点 (『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点) 効果点に関する回答の出現率は前回の 1270 ポイントから 1990 ポイントへ 57%増加し、改善点の出現率の増加 (315 ポイント⇒395 ポイント、26%増) を大きく上回ります。

キーワード別に見ると、「**グループワーク**」(グループワークでの共同作業により学びが深まった/学習意欲につながった) が昨年度秋学期、前回春学期同様 1 位 (406 件) となり、昨年来不動の 1 位をキープしています。2 位の 294 件を大きく引き離し、突出した数字となっていることも前回同様です。

2 位は 294 件の「**丁寧**」(丁寧な授業、解説、プリント・・・) で、前回春学期、前々回秋学期の 2 位から変わりません。

3 位は前回の 7 位から順位を上げた「**動画・画像**」(動画・画像で分かりやすい: 275 件) で、常連の項目が再び順位を上げてきました。

4 位は前回同様「**実例・具体的**」(実例・具体例を挙げた説明で分かりやすい、具体的に理解できた) でした。前回同様 9 位の「**体験談・現場の話**」(現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった: 174 件)、新たにランクインした 12 位「**経験・体験**」(〇〇を経験・体験できてよかった: 128 件)、15 位「**身近**」(身近なテーマで分かりやすい/身近に感じられた: 114 件) などと通じるものがあり、授業に様々な工夫を取り入れておられる様子が拝察されます。掲載はされていませんが、今回 17 位に新しいキーワード「**実践**」(実践的な学びで理解が深まった: 96 件) が出現しており、これも含めて注目されるキーワード群です。

5 位「**レポート・課題**」(レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった/レポート・課題の出し方や評価方法がよかった: 225 件: 前回 3 位)、6 位「**説明・解説**」(説明・解説が分かりやすい: 201 件: 前回 5 位) は大きな変動はありません。

7 位の「**発表**」(200 件) は、昨年度秋学期に 13 位にランクインしましたが、今回は 7 位に躍進しました。自分で発表を行うことにより理解が深まったという記述に加えて、「他人の発表を見てためになった」という意見もあり、第 8 位の「**多様な意見・視点**」(多様な意見を聞いて、意見交換ができて、ためになった: 192 件) と近いキーワードです。

10 位「**質問**」(質問しやすい、質問に答えてくれた: 155 件: 前回 11 位)、11 位「**詳しい**」(詳しく学べた: 138 件: 前回 10 位) は前回同様の位置でした。

2. 改善点 (改善できる点)

1 位は前回 2 位の「**レポート・課題**」(レポート・課題の出し方や評価方法を改善してほしい: 84 件)、2 位は前回 1 位の「**オンライン授業**」(オンライン授業に関わる要望各種: 82 件) でした。順位は入れ替わったとはいえ、出現率も前々回の 2020 年度秋学期、前回春学期とほぼ同じで変化はなく、あまり改善は進みませんでした。この二つのキーワードは 2020 年度春学期以来、今回で連続 4 回にわたり 1 位、2 位を占めています。改善の難しさを窺わせるデータですが、対策が望まれます。

3 位の「**プリント資料**」(プリント・資料が分かりにくい、配布方法を改善して欲しい: 63 件) は前回の 6 位から順位を上げてしまいました。4 位の「**グループワーク**」(グループワ

ークの回数・分け方・実施方法を改善して欲しい：60件：前回10位）、6位「**難しい**」（授業・資料等が難しすぎる：43件）もそれぞれ前回より比較的大きく順位を上げた項目です。出現率もそれぞれ2倍以上となっており、改めて改善対策が期待されます。

5位の「**時間**」（時間配分を改善して欲しい／時間を守ってほしい：50件）は前回の3位から順位を下げましたが、出現率はむしろ微増です。ただ、2020年度の秋学期に比べると改善状態を維持しています。

7位の「**テスト・試験**」（テストの実施方法・時間などに関する改善要望：42件）は、前回春学期に2020年度秋学期から大きく改善しましたが、今回は春学期に比較して約3倍の出現率を記録し、2020年度秋学期に対しても大きく上回りました。再度の改善が必要です。

8位の「**パワポ・スライド**」（パワーポイント・スライドが分かりにくい、見にくい／内容・配布方法を改善してほしい：33件：前回5位）、9位の「**説明・解説不足**」（説明・解説が不足、不十分：30件：前回4位）は順位を下げましたが、出現率に大きな変化はありません。前回7位の「**分かりにくい**」、14位「**動画・画像**」、15位「**実例・具体的**」はランク外となり、代わりに11位に「**通信・機器**」（通信・機器のトラブルがあった：21件）、13位に「**出席**」（出席の取り方を改善してほしい（成績への反映の仕方など）／出席情報が反映されない：17件）、15位に「**シラバス**」（シラバスに沿って授業をして欲しい／シラバスと授業内容が異なる：13件）が入りました。

改善が進めば「効果点」になる可能性もある、改善点にも効果点にもリストアップされるキーワードは以下の通りです。「効果点」に掲載された意見の中に具体的な改善行動のヒントを探ることができそうです。

- 「レポート・課題」（改善点1位/効果点5位）
- 「グループワーク」（改善点4位/効果点1位）
- 「説明・解説（不足）」（改善点9位/効果点6位）
- 「質問」（改善点10位/効果点10位）

なお、学部、回答人数帯、学年により、出現数・率に大きな違いがありますので、引き続きそれぞれの集計カテゴリ別の改善行動が重要となります。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

※1 キーワードと集計内容について

キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードに集約してカウントしています。各キーワードに含まれ

る「回答内容」については、「効果点」「改善点」それぞれの集計の最初のページ「頻出キーワード【全学】」の下段に掲載された一覧表を参照ください。

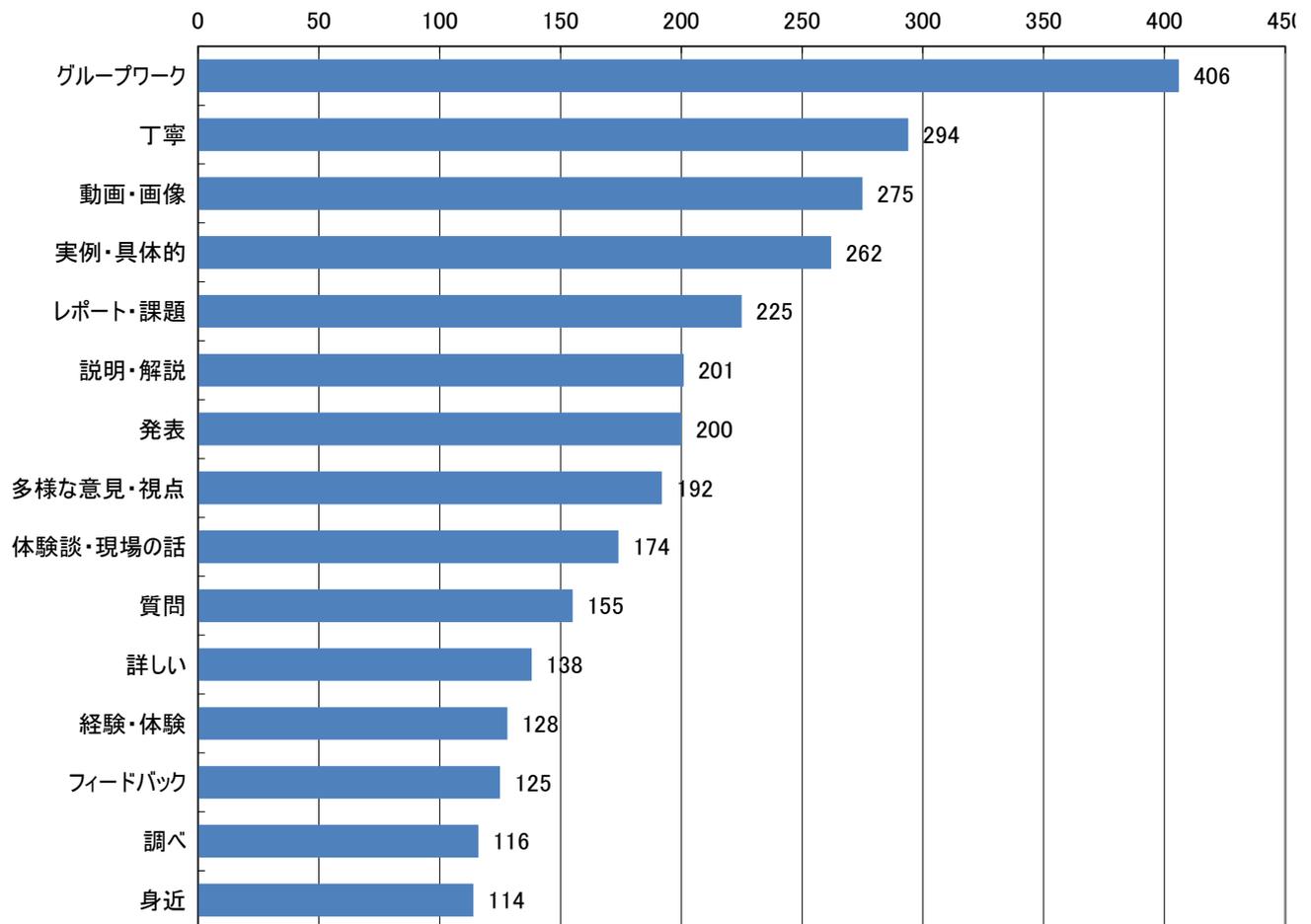
※2 出現率について

「出現率前回比較 全学」下段の説明を参照ください。

【効果点】

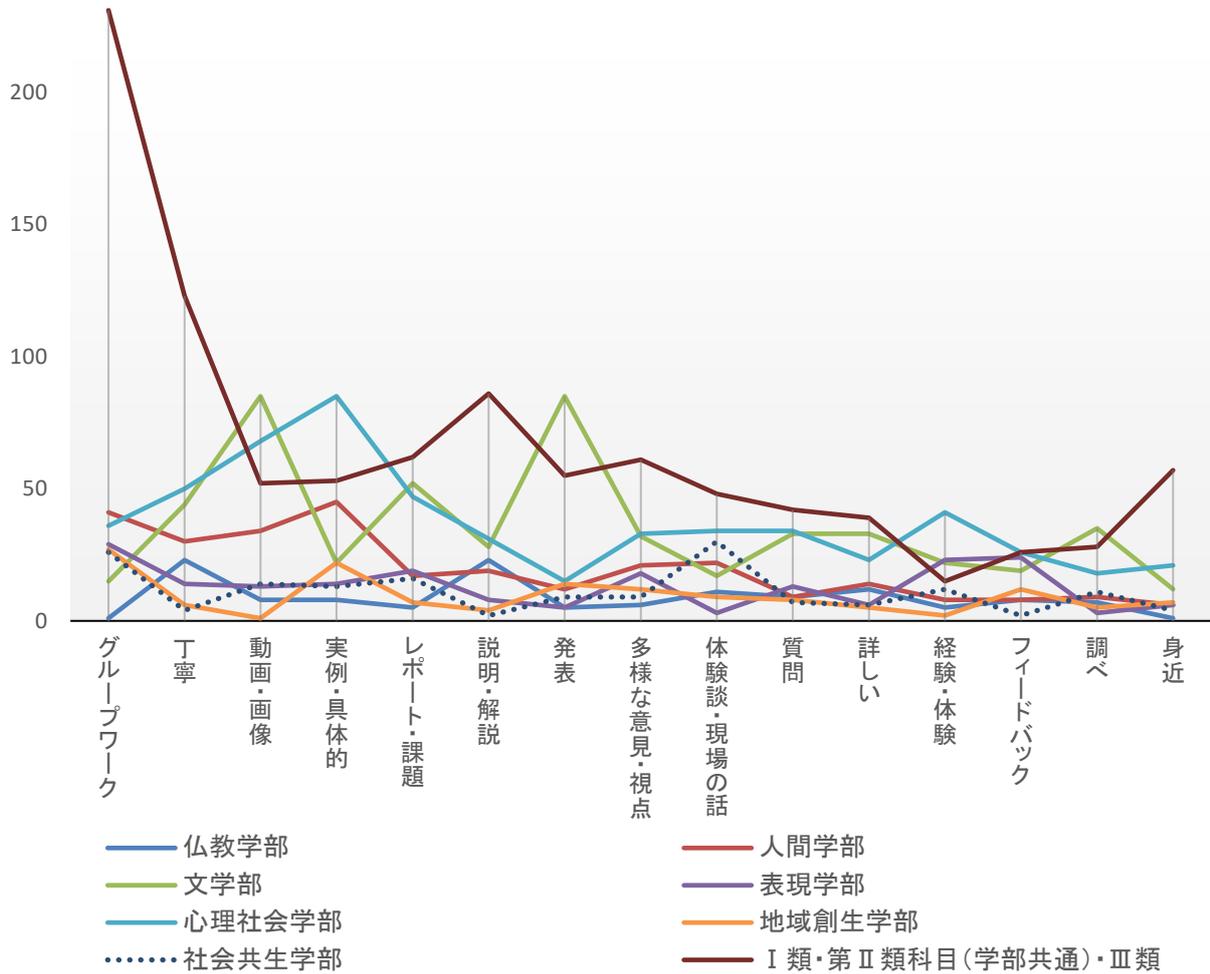
「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点

自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【全学】

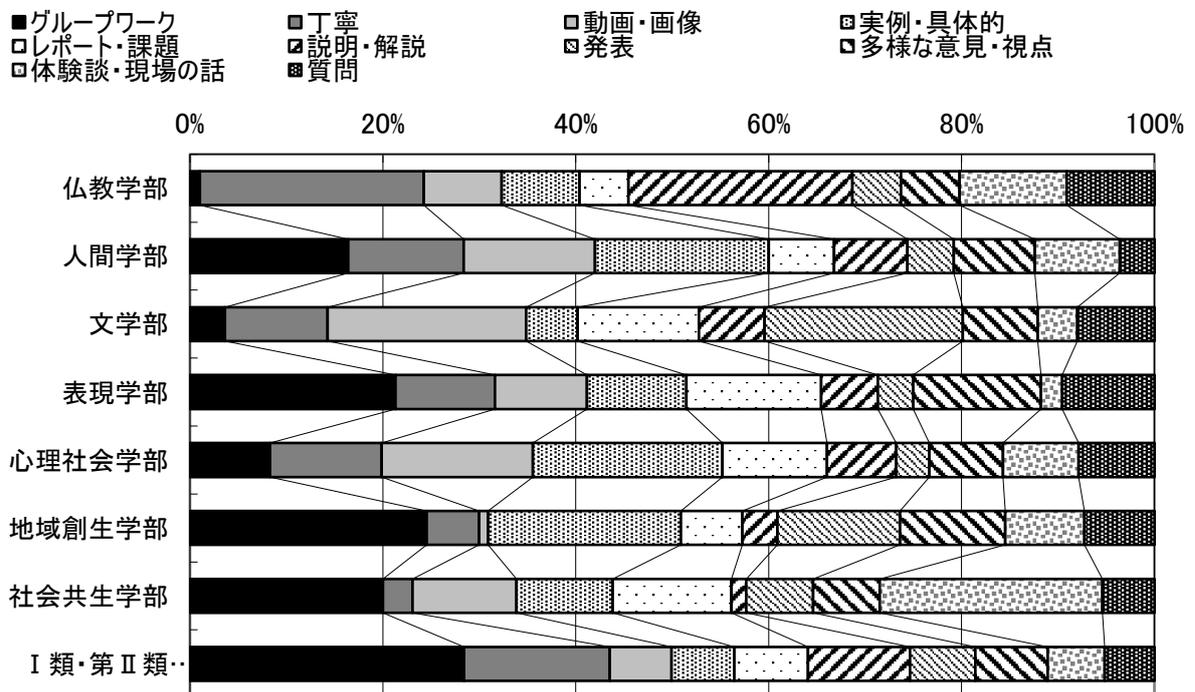


キーワード	主な内容	出現数
グループワーク	グループワークでの共同作業により学びが深まった／会話・意見交換により学び・理解が深まった／グループワークが学習意欲につながった	406
丁寧	丁寧な授業、解説、プリント、資料、教科書、テキスト、教材、パワーポイント、スライド、質問対応、添削、フィードバック、アドバイス、コメント	294
動画・画像	動画・画像で分かりやすい、理解が深まった／動画・画像による説明が分かりやすい	275
実例・具体的	実例・具体例で分かりやすい、理解が深まった／具体的で分かりやすかった／具体的に理解できた	262
レポート・課題	レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった／レポート・課題の出し方や評価方法がよかった ※「レポート・課題について具体的に説明」は「実例・具体的」に分類 ※「レポート・課題についてフィードバックしてもらえた」は「フィードバック」に分類	225
説明・解説	(授業について) 説明・解説が分かりやすい ※「丁寧な説明・解説」は「丁寧」に、「動画・画像による説明が分かりやすい」は「動画・画像」に、「実例による説明・具体的な説明が分かりやすい」は「実例・具体的」に分類	201
発表	発表を行って(発表を見て)、ためになった、身についた、理解が深まった ※「グループで発表できてよかった」は「グループワーク」に分類	200
多様な意見・視点	多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった／多様な視点を学べた ※「グループワークで意見を聞けてよかった」は「グループワーク」に分類	192
体験談・現場の話	現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった／先生の体験談・体験談を聞くことによって理解が深まった	174
質問	質問しやすい、答えてくれた ※「丁寧な質問対応」は「丁寧」に分類	155
詳しい	詳しく学べた／詳しく知ることができた／細かい内容を学べた	138
経験・体験	〇〇を経験・体験できてよかった、理解が深まった、学ぶ意欲が高まった	128
フィードバック	フィードバックしてもらえてよかった(アドバイス・コメント・返事・添削含む)	125
調べ	調べることによって理解が深まった	116
身近	身近なテーマで分かりやすい／身近に感じられた	114

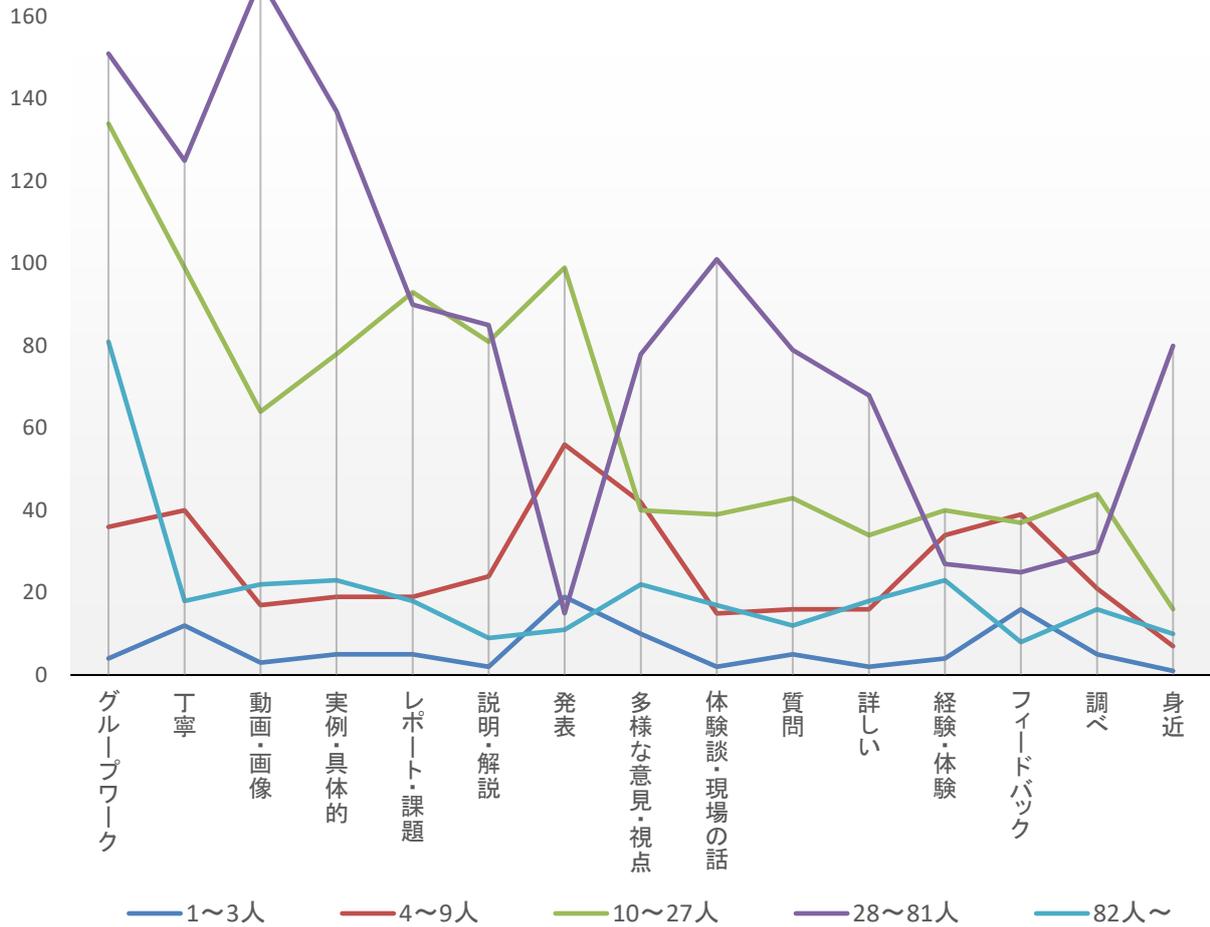
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【学部別】



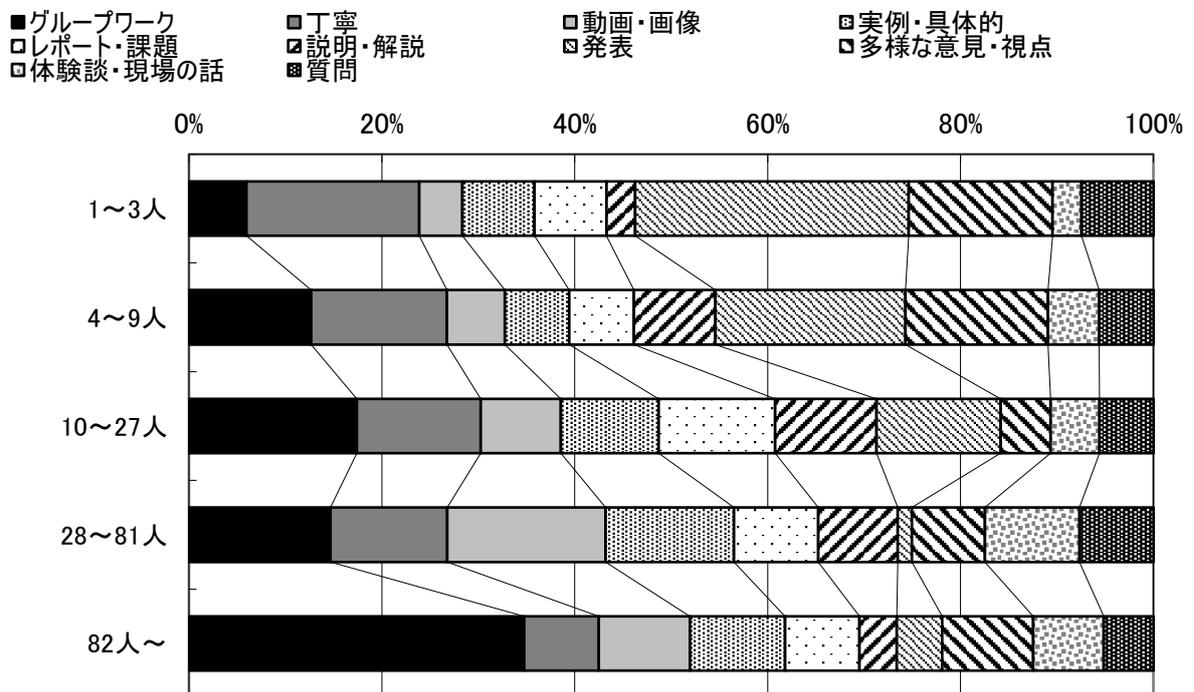
上位10項目の学部別割合



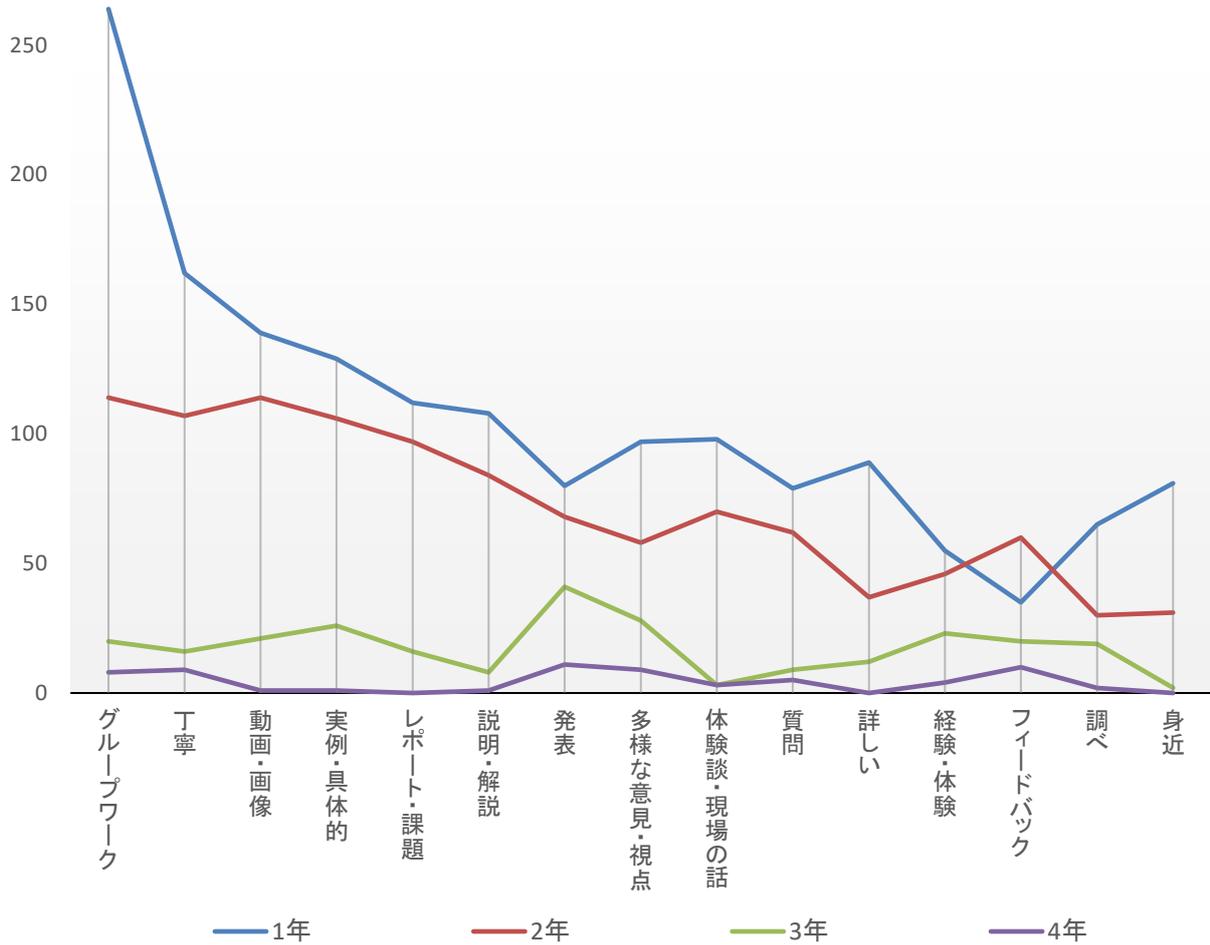
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【回答人数帯別】



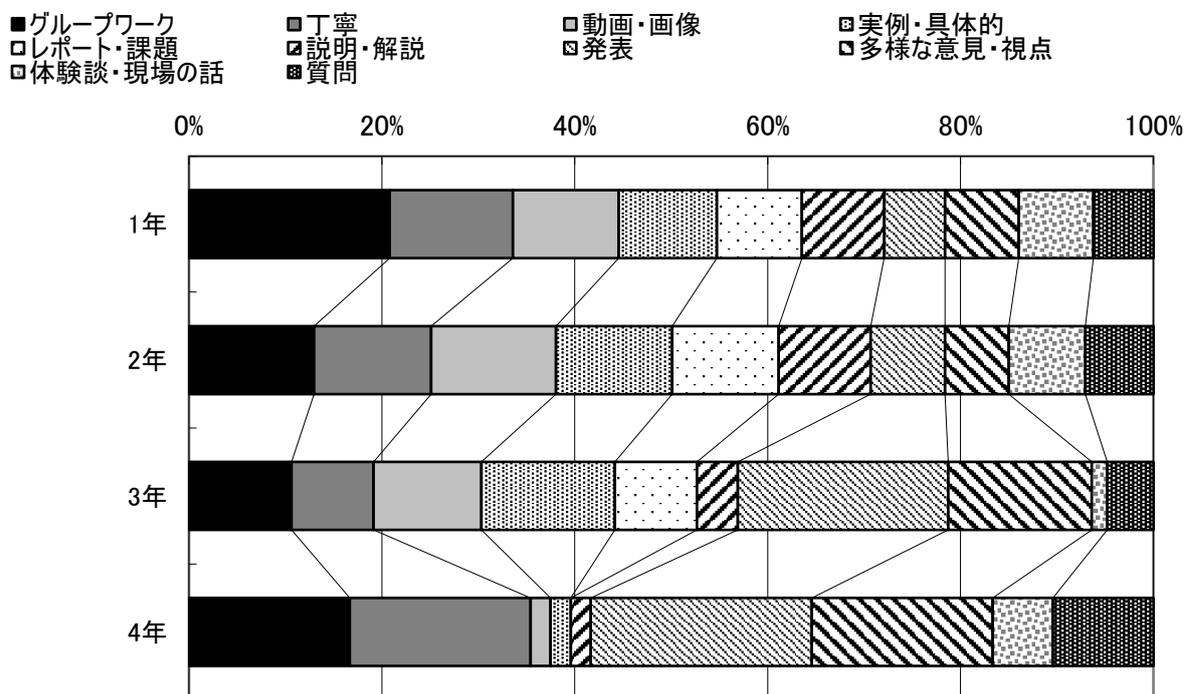
上位10項目の回答人数帯別割合



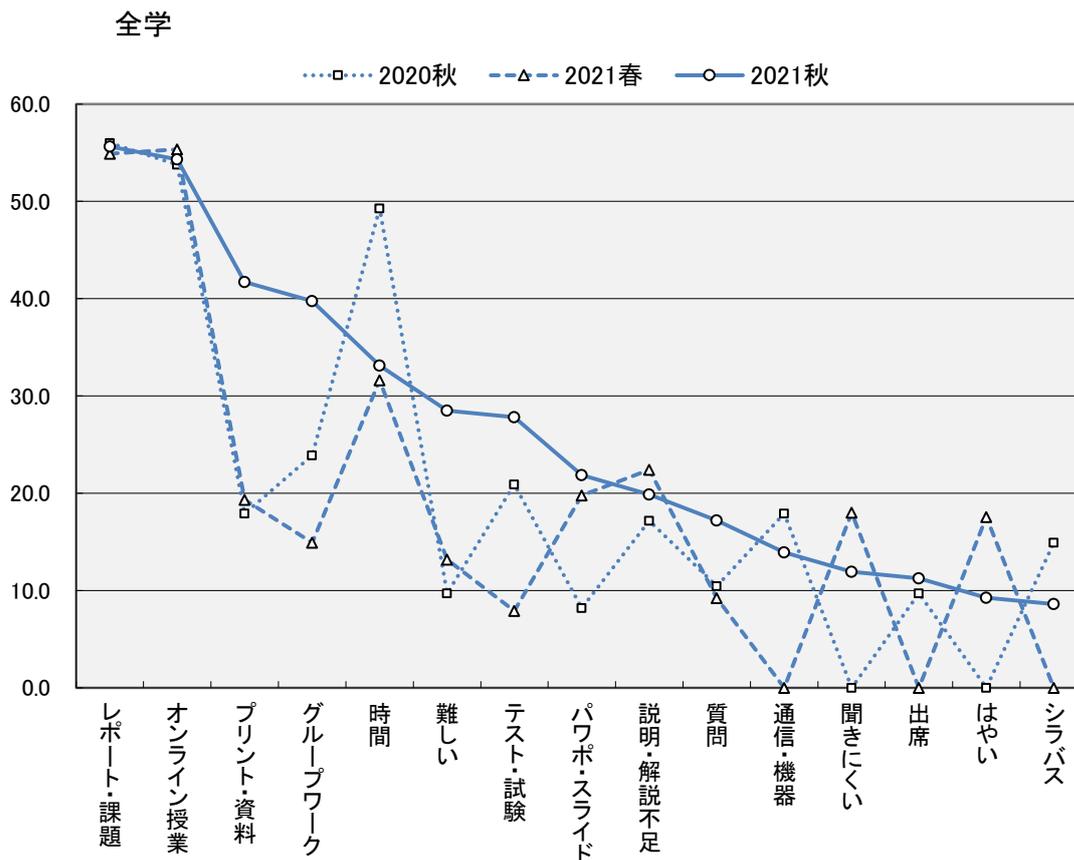
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】全学

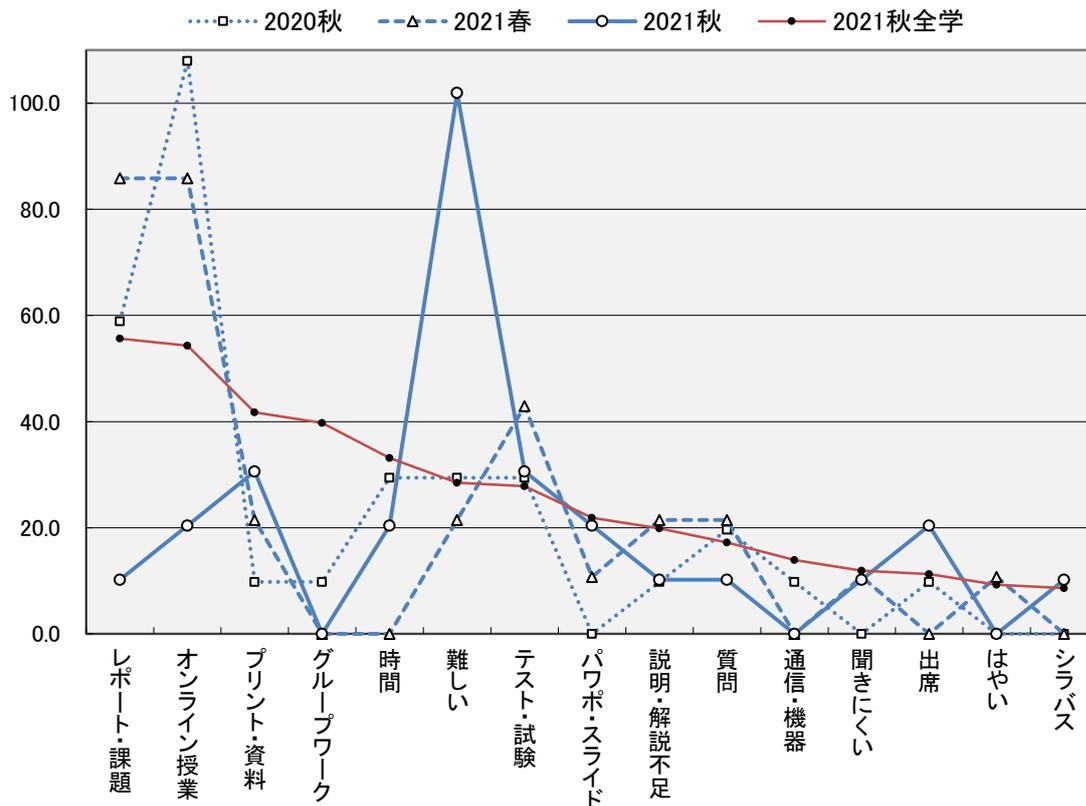


「出現率」について

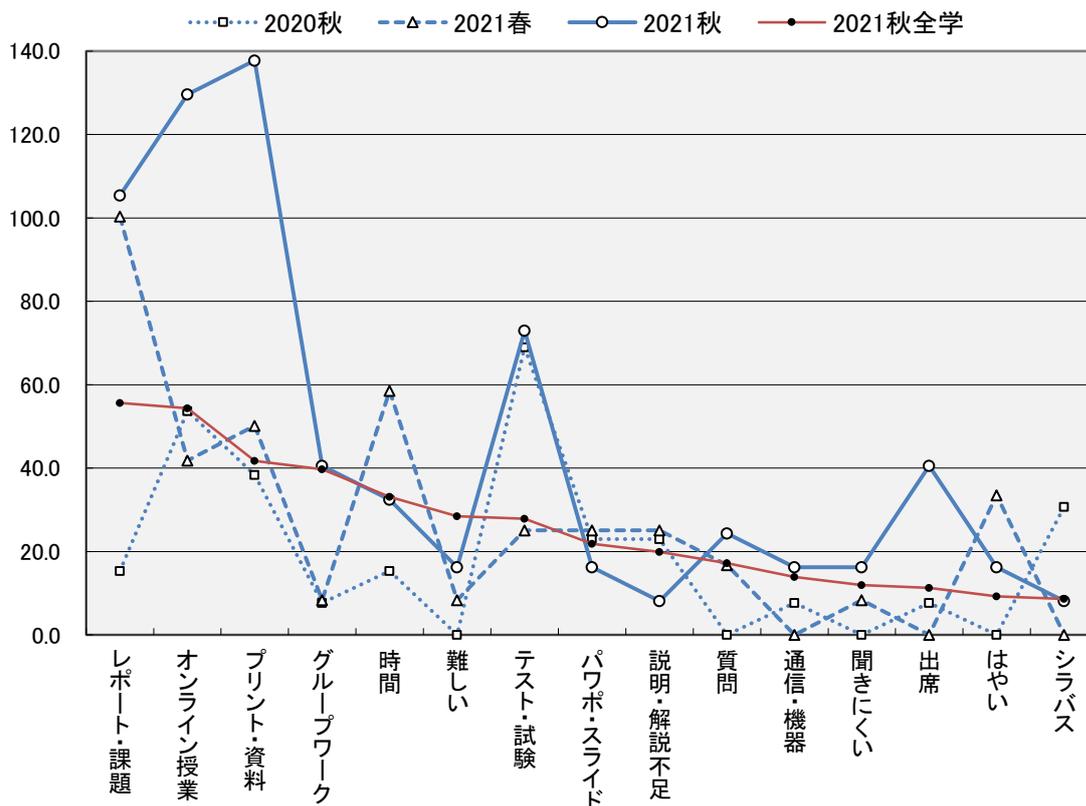
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
出現率は下記の式で計算されます。
出現率 = 出現数 / 回答者数 × 10⁴
(回答者数: 授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

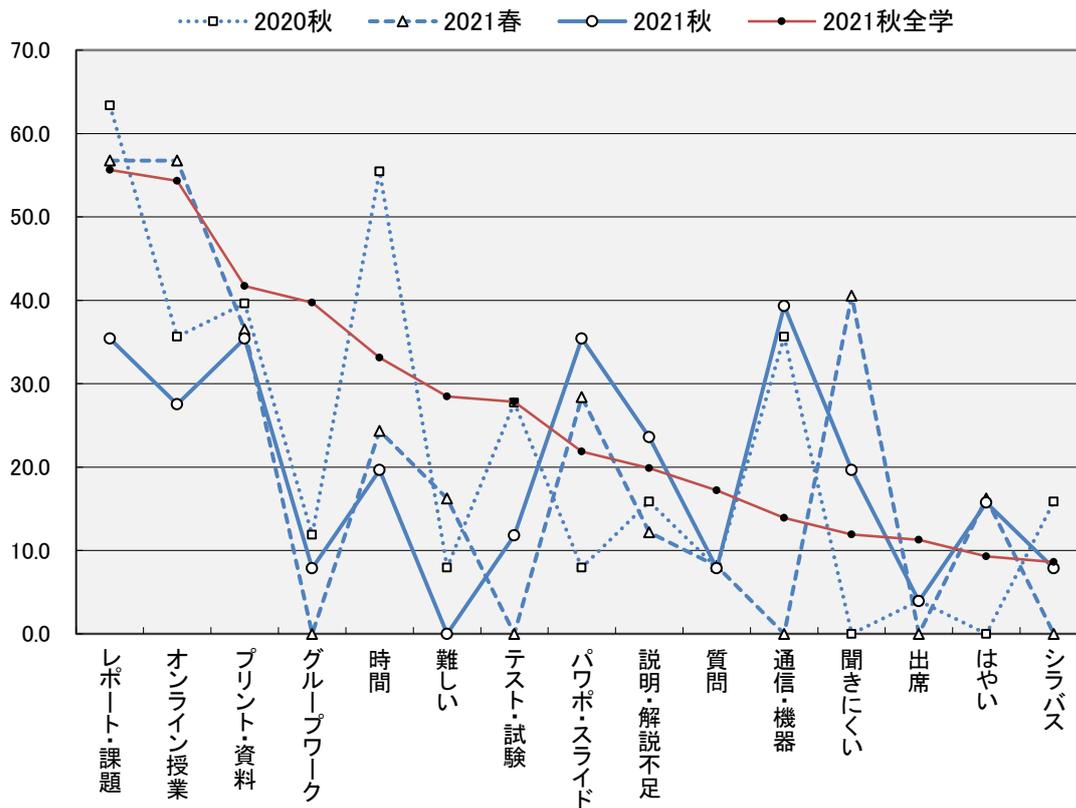


《人間学部》

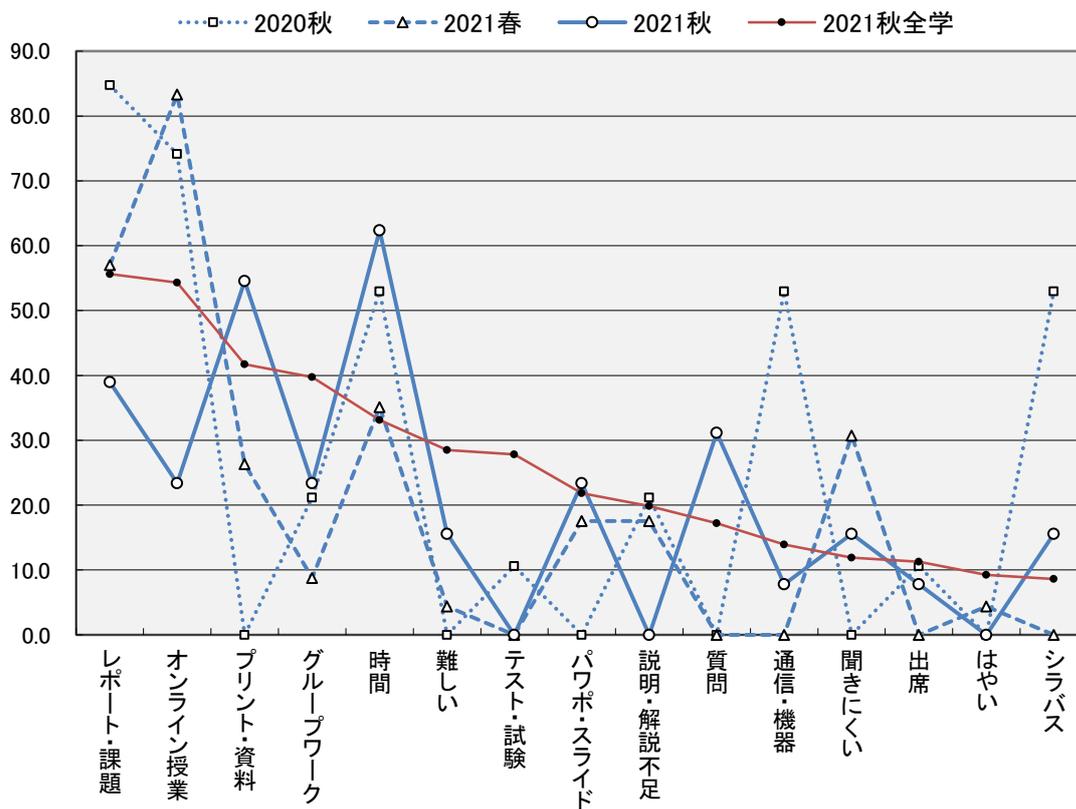


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

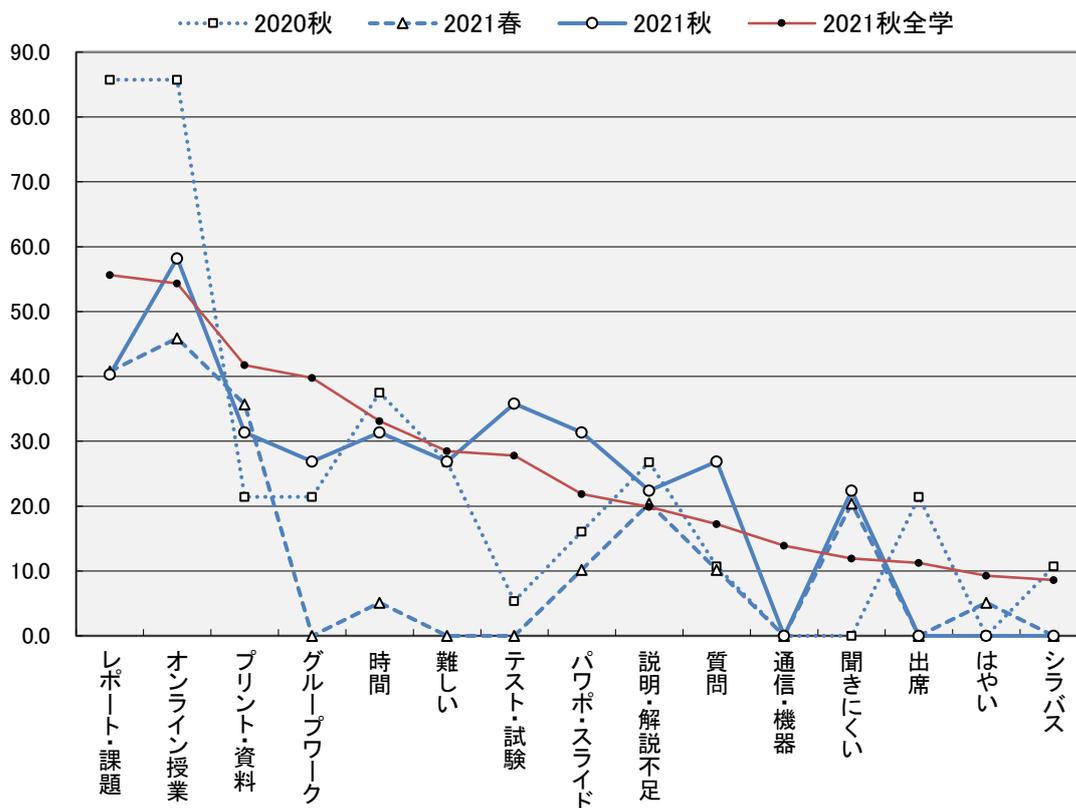


《表現学部》

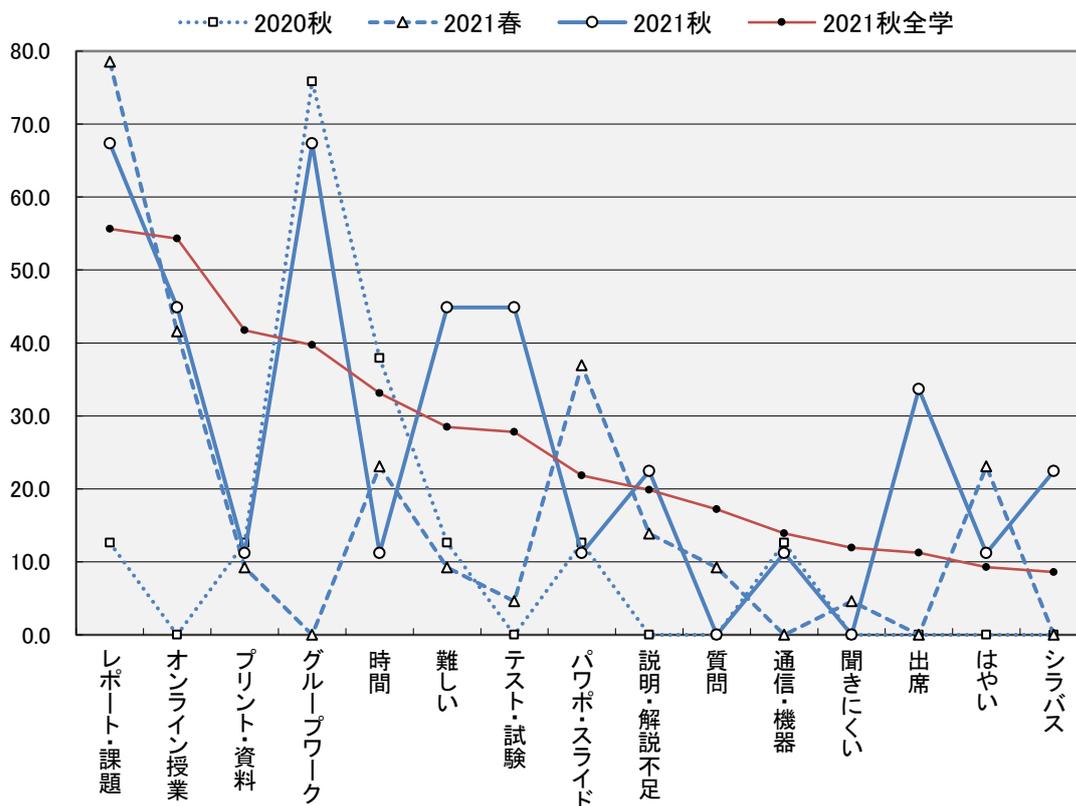


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》

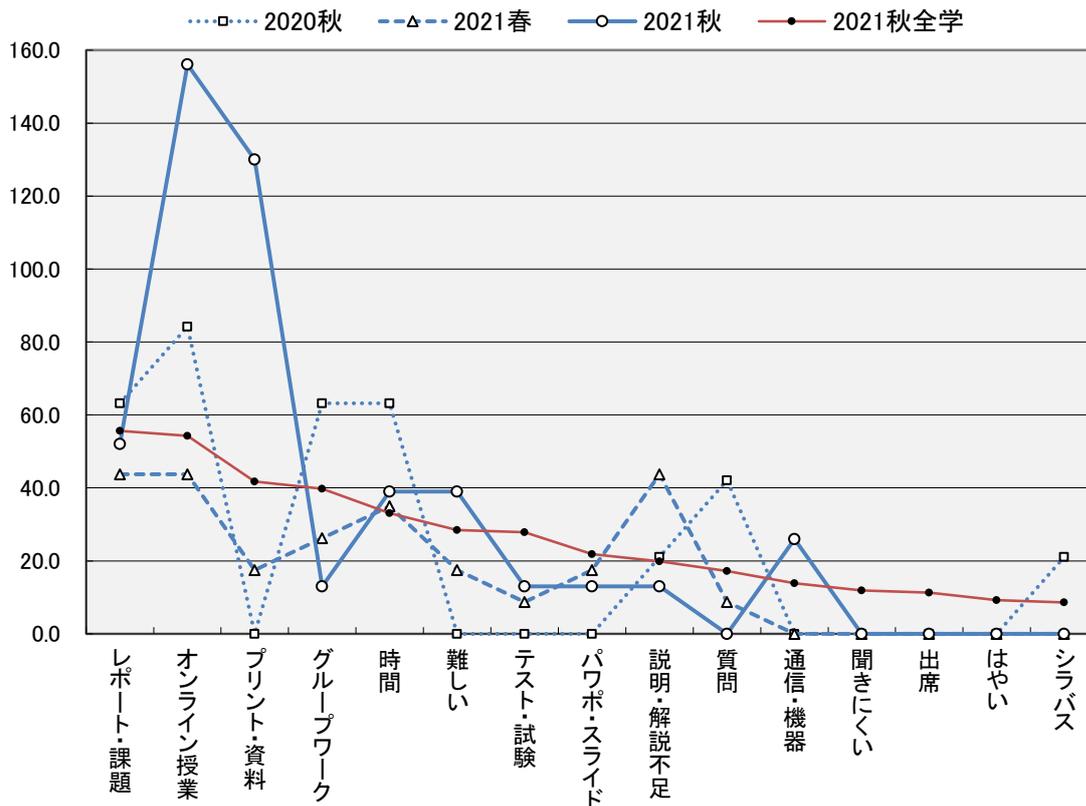


《地域創生学部》

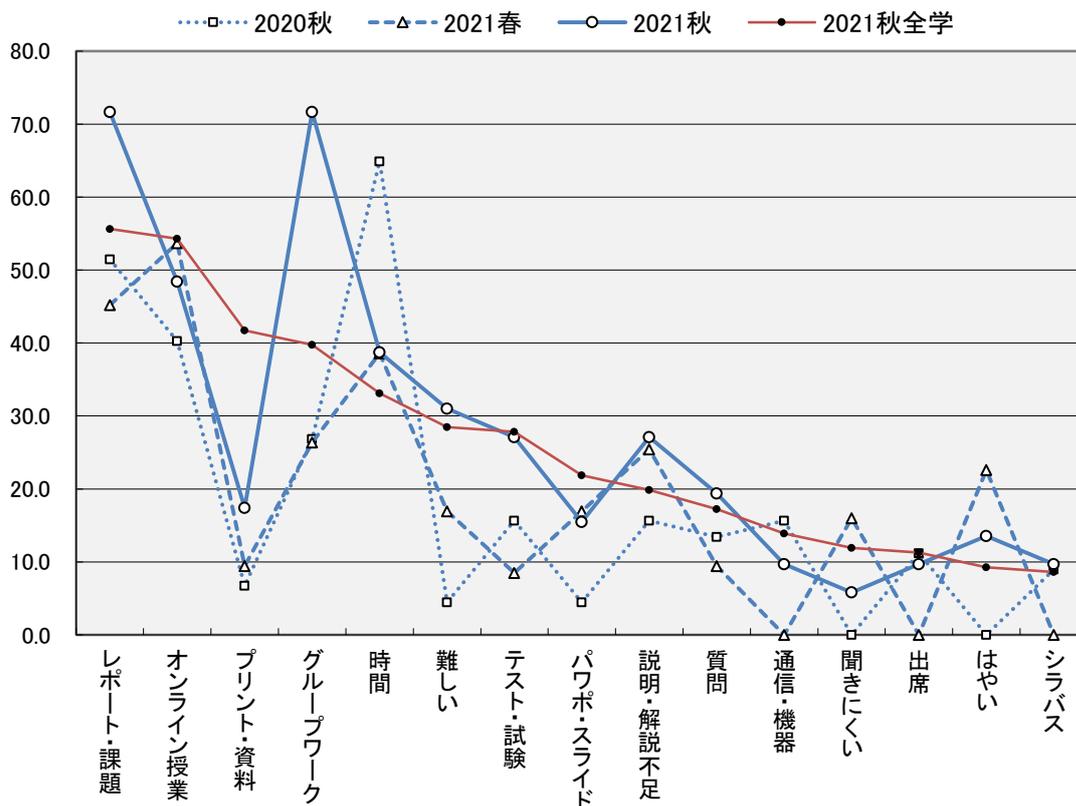


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《社会共生物学部》

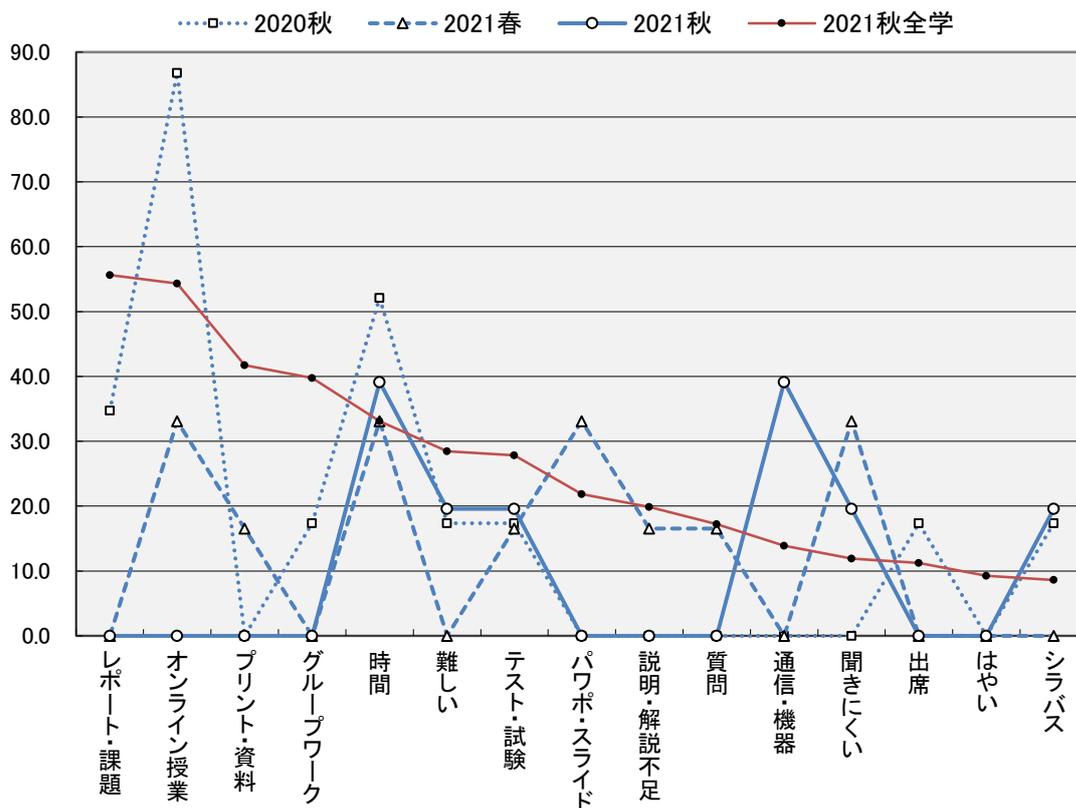


《I類・第II類科目(学部共通)・III類》

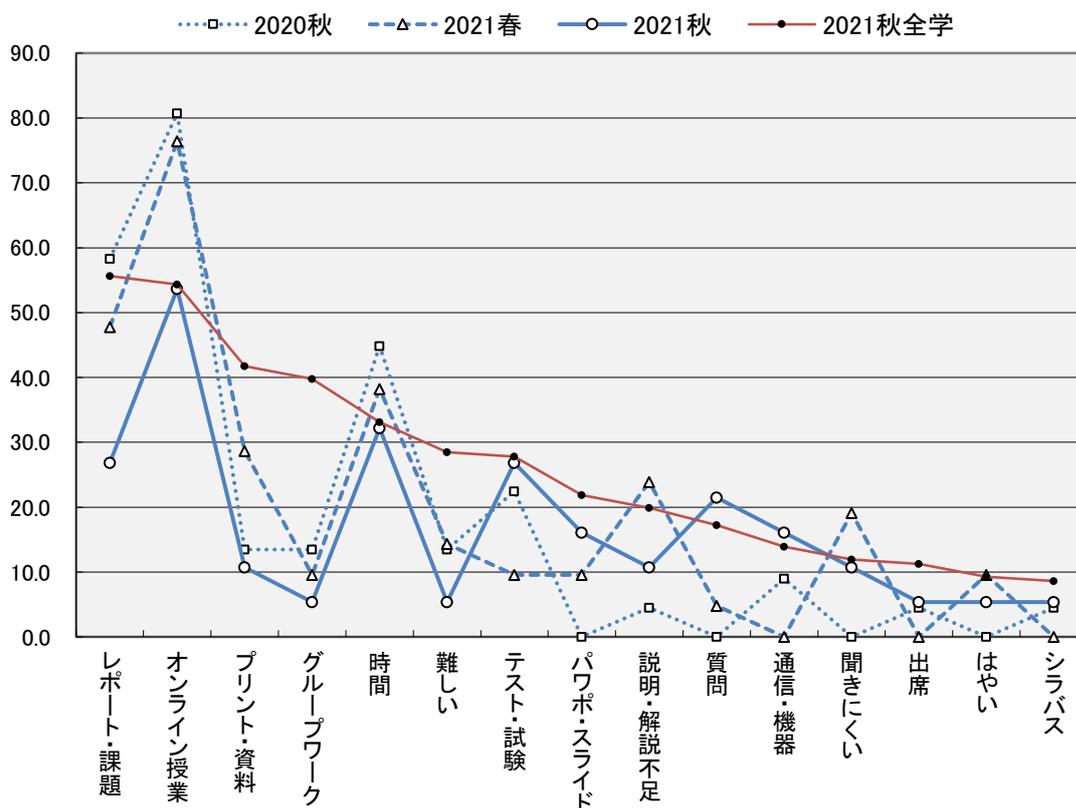


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《1～3人》

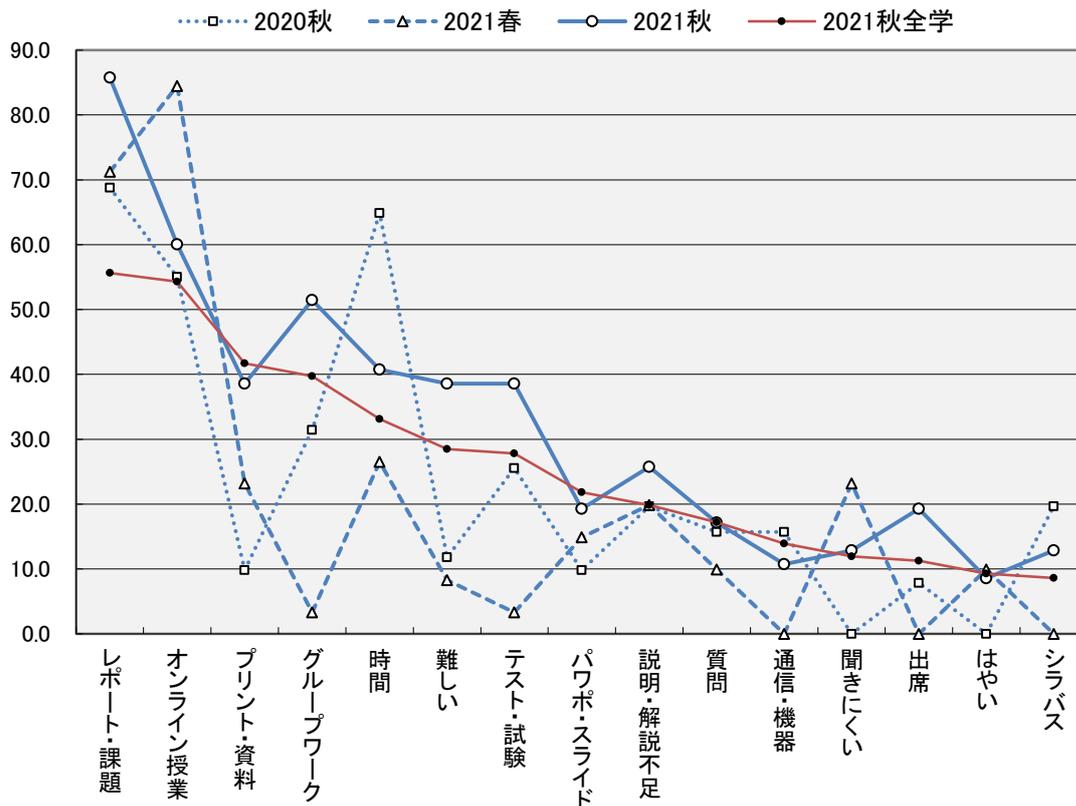


《4～9人》

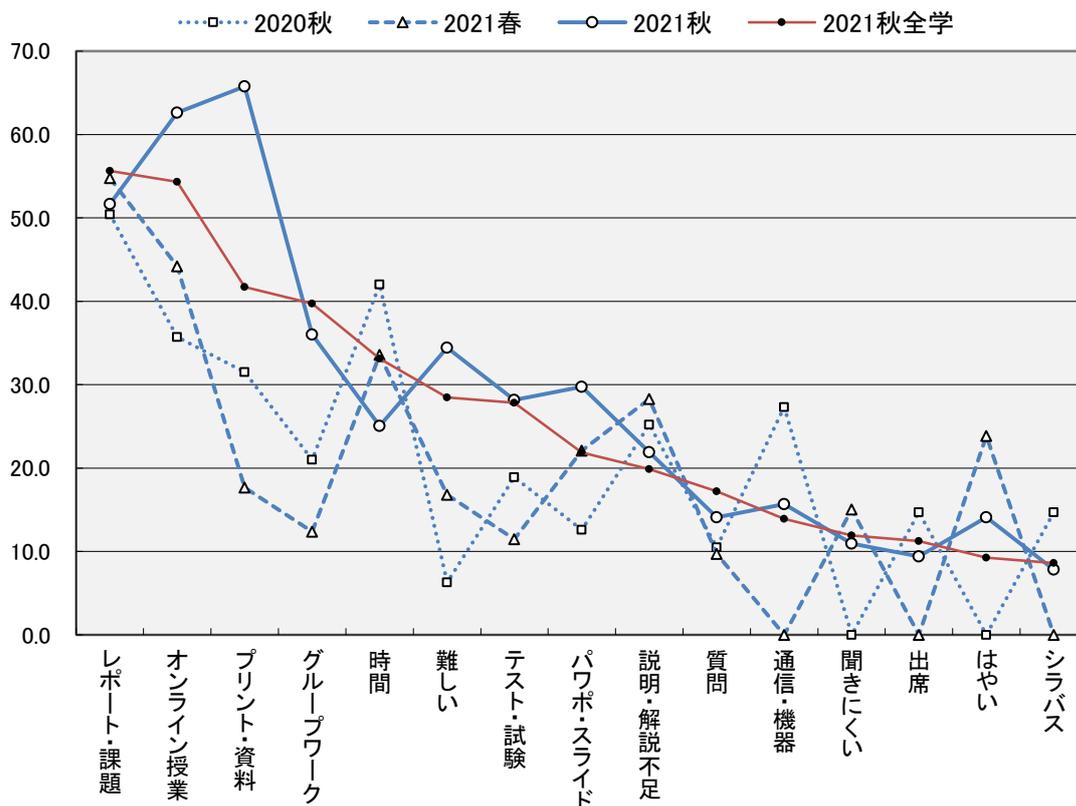


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

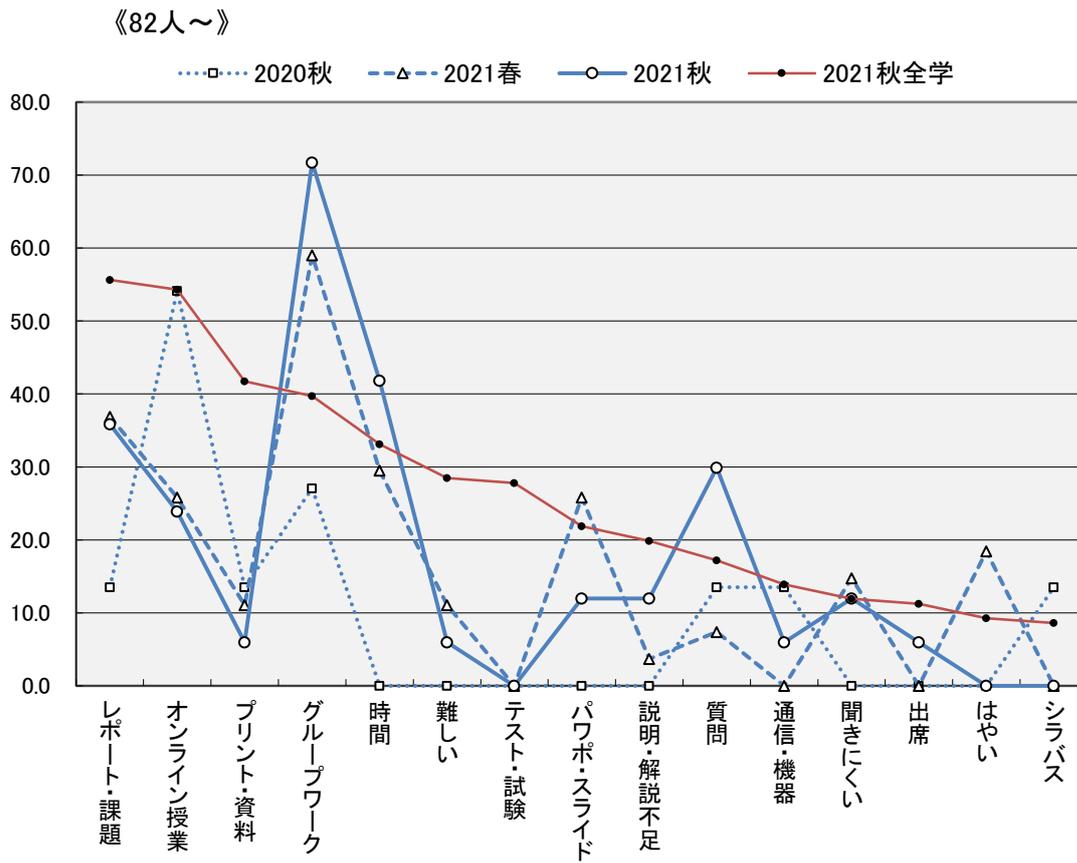
《10～27人》



《28～81人》

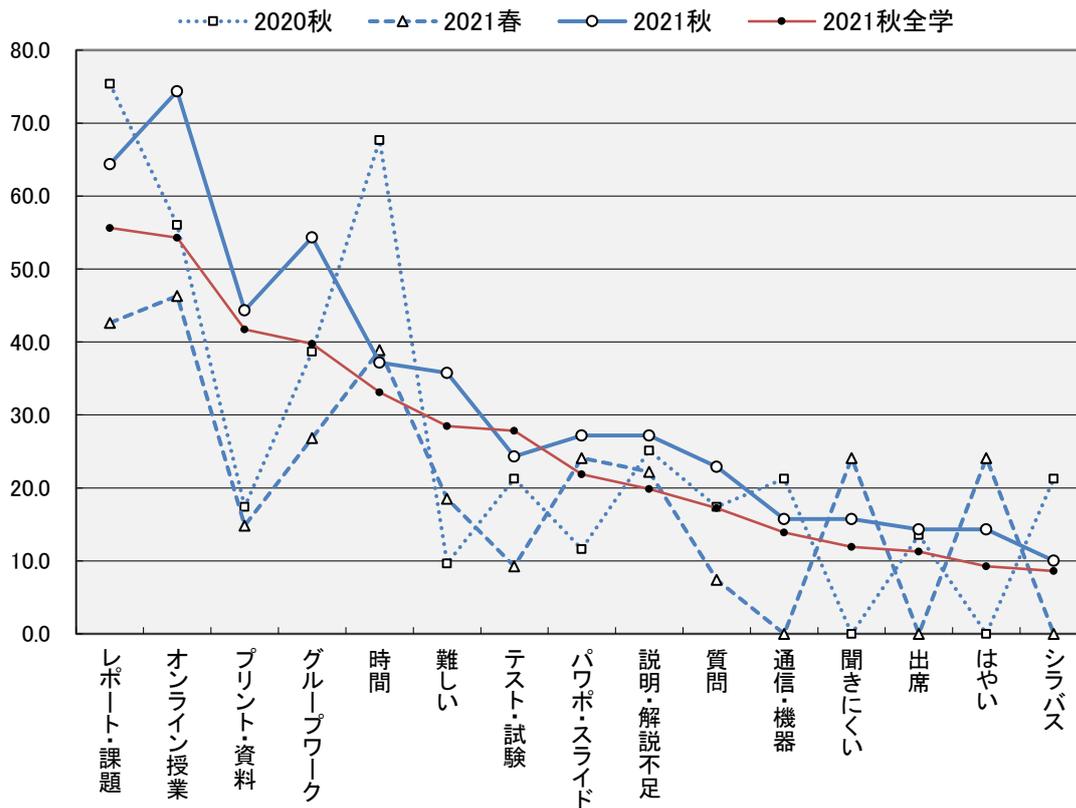


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

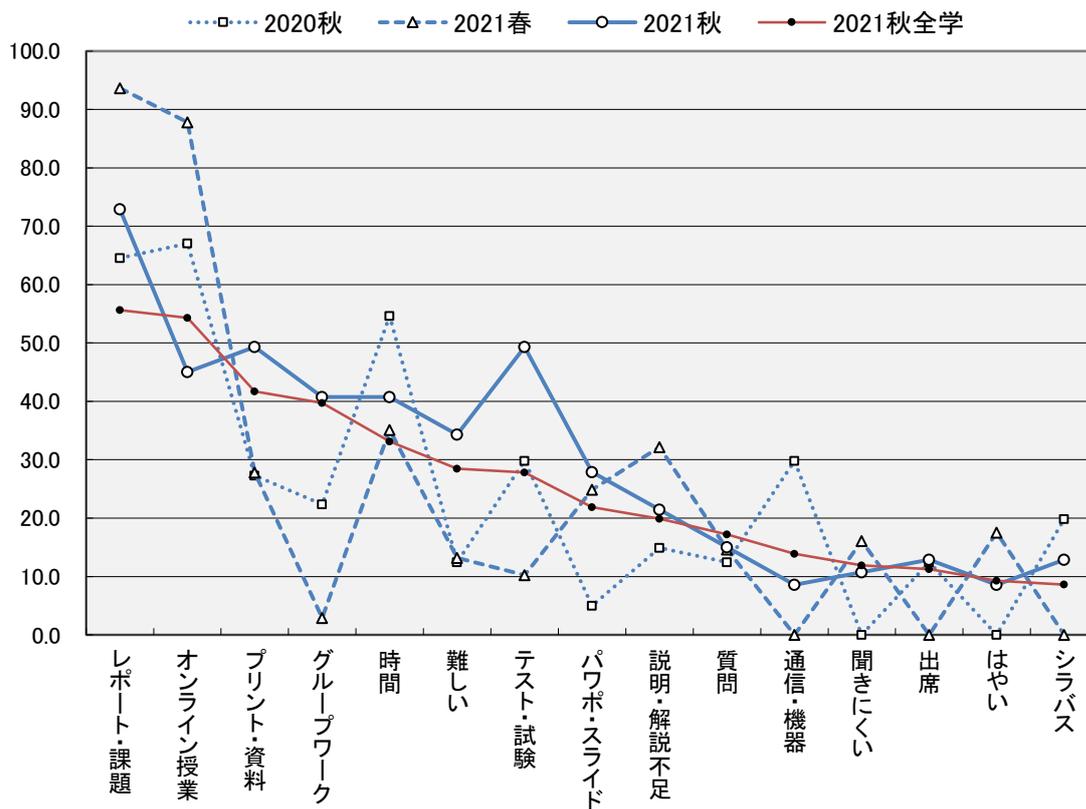


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】 学年別

《1年》

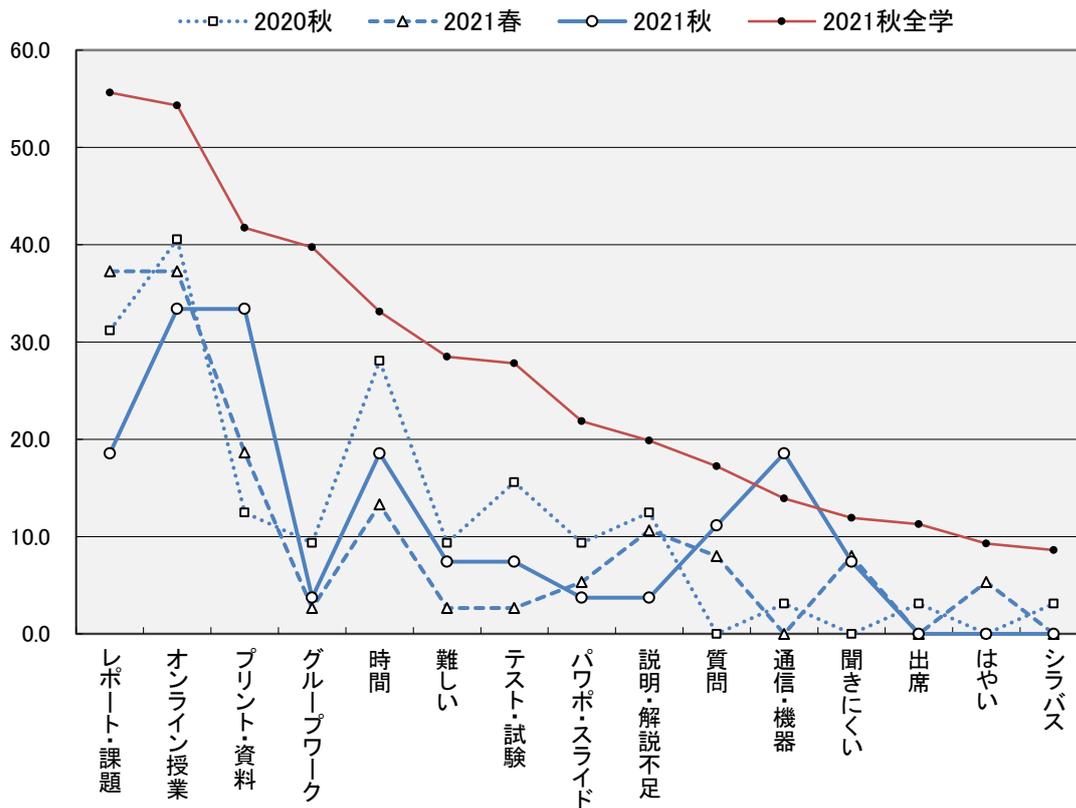


《2年》

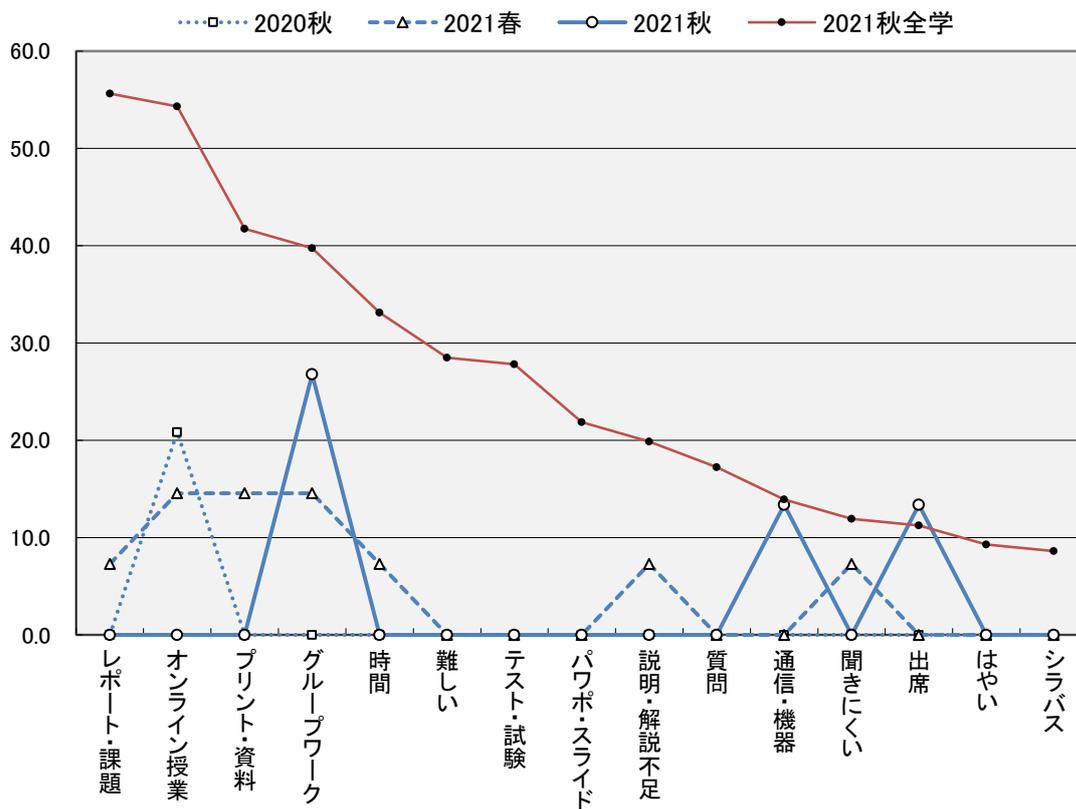


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



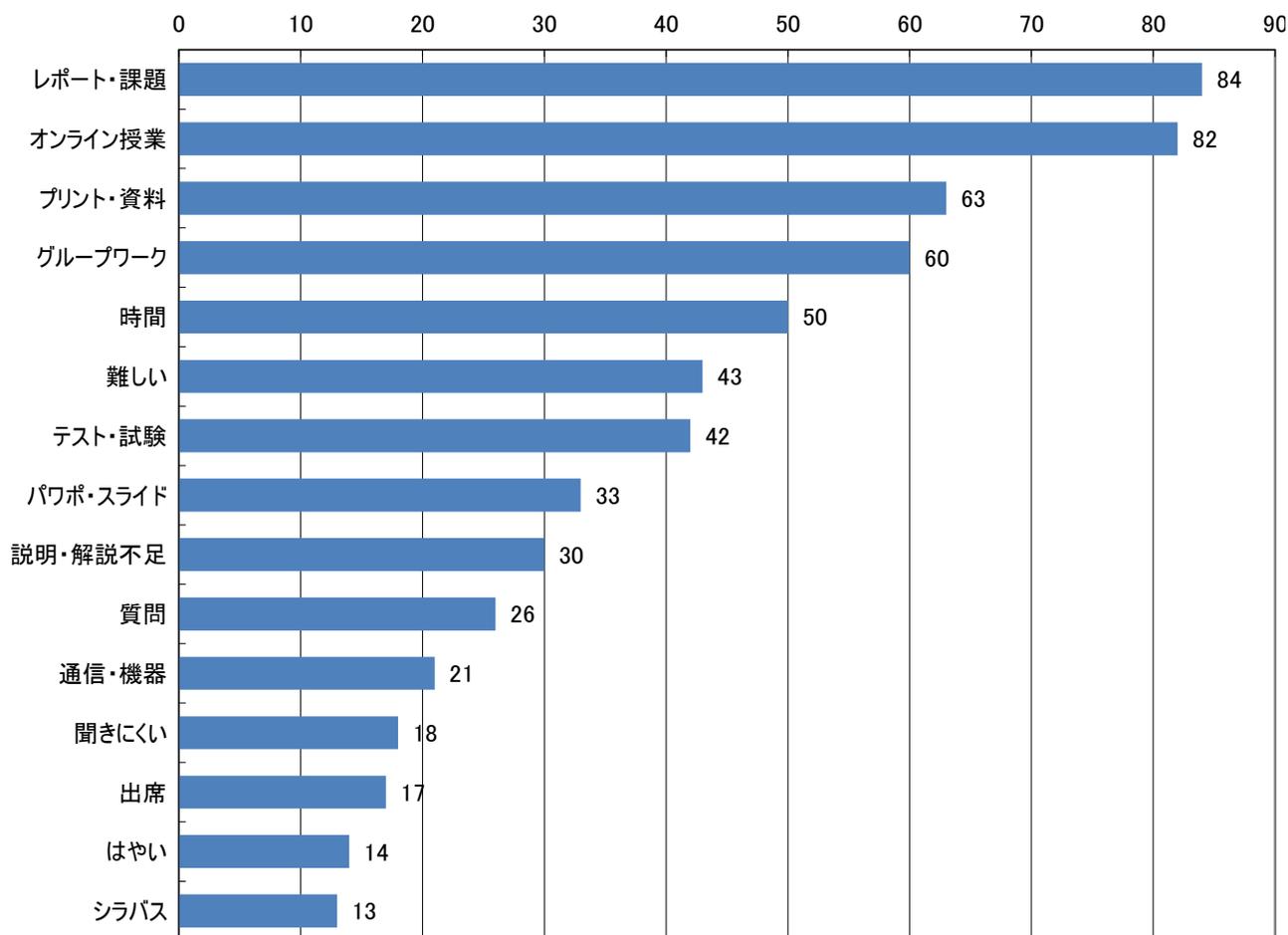
《4年》



【改善点】

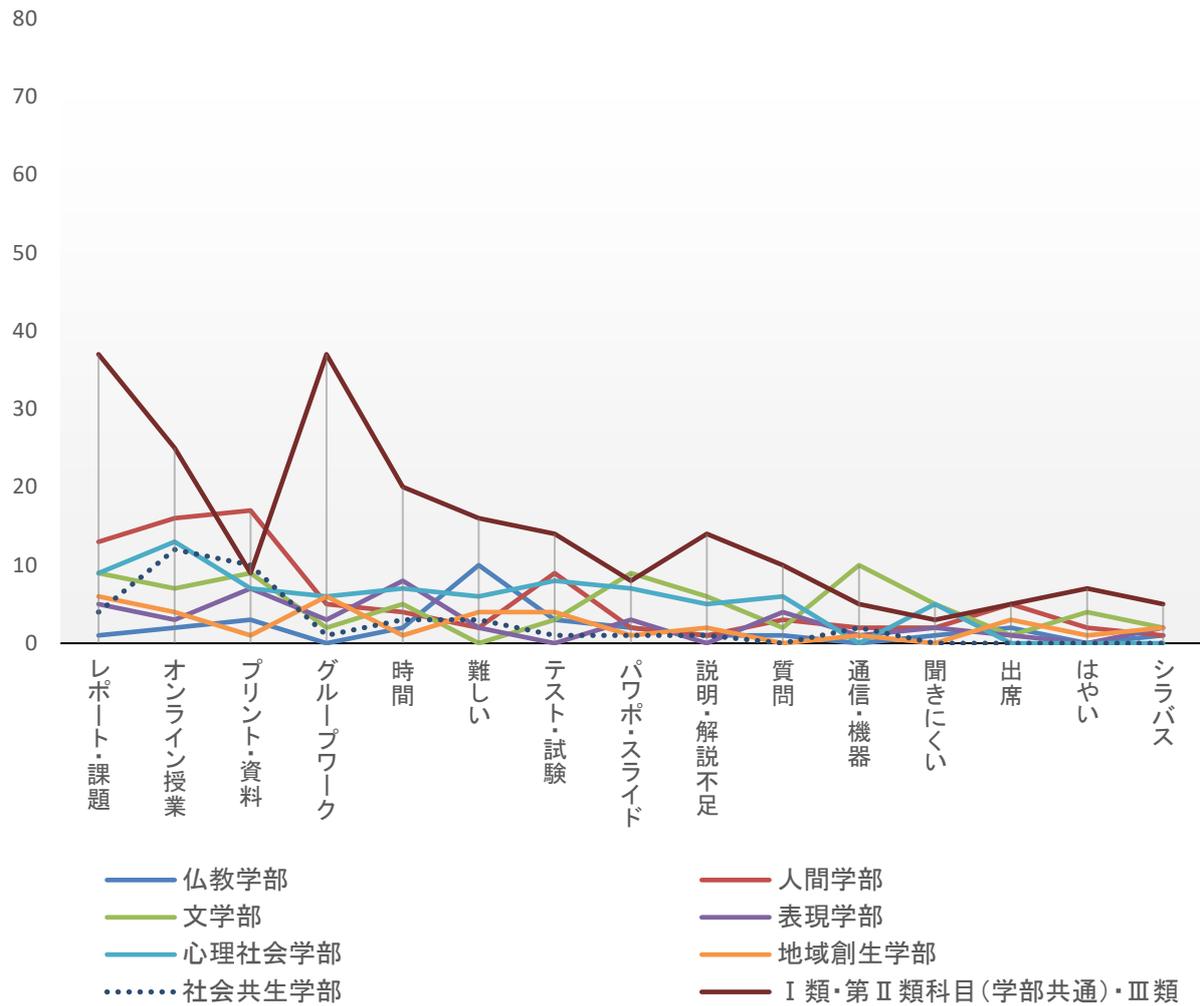
改善できる点

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【全学】

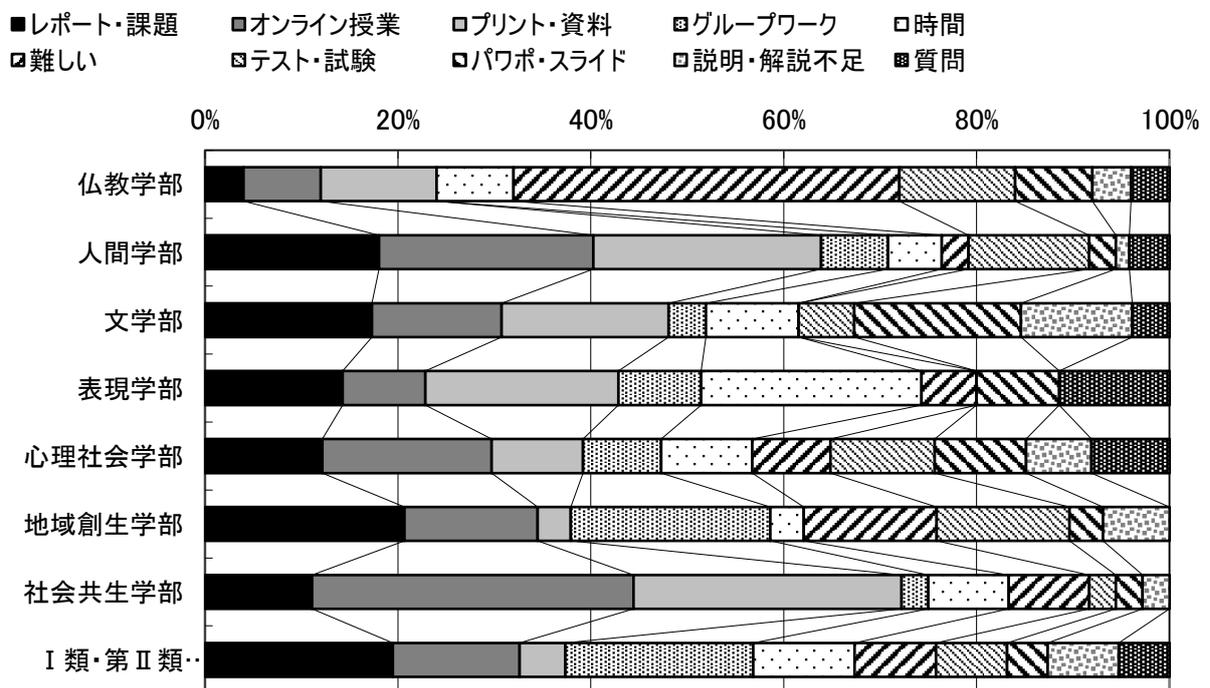


キーワード	主な内容	出現数
レポート・課題	レポート・課題の出し方や評価方法を改善してほしい／課題の答えが欲しい／課題が多い、難しい／レポート・課題の提出方法を説明して欲しい	84
オンライン授業	動画配信してほしい／動画配信期間が短かった／ほかの方法（ツール）がよかった／課題配信型ではなく、オンライン授業をしてほしい／オンライン授業の進め方がよくなかった／対面の授業がよかった／オンライン授業を行うにあたり先生の知識が不足していた	82
プリント・資料	プリント・資料が分かりにくい／プリント・資料の内容、配布方法を改善してほしい／プリント・資料を配布されるだけの授業で理解しづらかった	63
グループワーク	グループワークの回数、分け方、実施方法を改善してほしい	60
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない／授業時間以外の負担が大きい ※「テスト時間が短い、足りない」は「テスト・試験」に、「スライドを変える時間が短い」は「はやい」に分類	50
難しい	授業・教科書・資料等が難しすぎる	43
テスト・試験	テストの実施方法を改善してほしい／テストが難しい／テスト時間が短い、足りない	42
パワポ・スライド	パワーポイント・スライドが分かりにくい、見にくい／パワーポイント・スライドの内容、配布方法を改善してほしい ※「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類	33
説明・解説不足	（授業について）説明・解説が不足、不十分 ※「レポート・課題の提出方法を説明して欲しい」は、「レポート・課題」に分類	30
質問	質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない／質問に対しての回答に満足できない	26
通信・機器	（先生側／生徒側の）通信・機器のトラブルがあった	21
聞きにくい	声小さい、聞き取りづらい／声が大きすぎる／（声小さいので）マイクを使ってほしい／（うるさいので）マイクを使わないでほしい ※「通信環境の影響で聞きにくい」は「オンライン授業」に、「早口で聞きにくい」は「はやい」に分類	18
出席	出席の取り方を改善してほしい（成績への反映の仕方など）／出席情報が反映されない（反映が遅い）、出席確認に時間がかかる／（課題提出による）出席確認は不安／出欠管理をしっかりしてほしい	17
はやい	進行が早い、早口、画面切り替えが早いなどの理由で授業についていけない	14
シラバス	シラバスに沿って授業をして欲しい／シラバスと授業内容が異なる	13

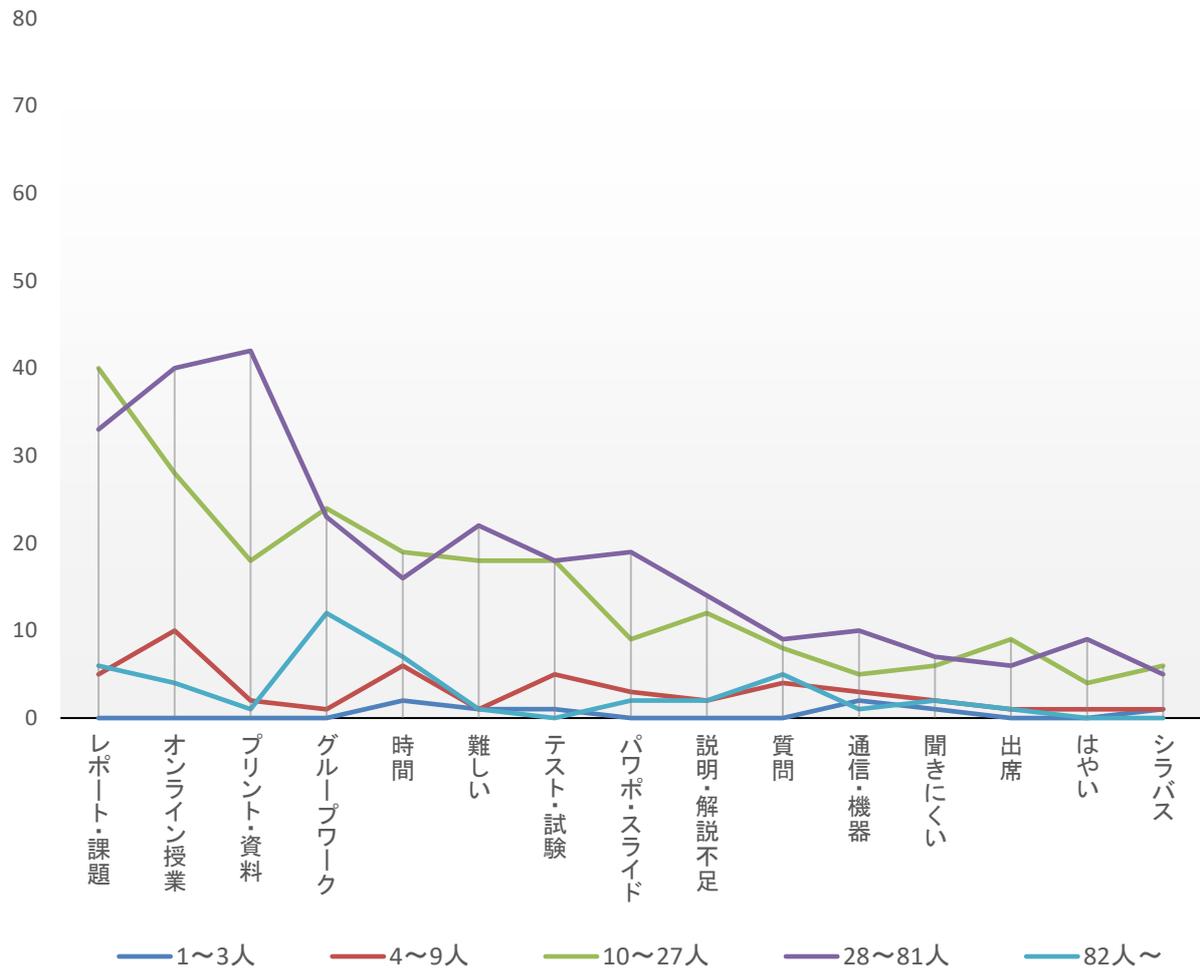
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【学部別】



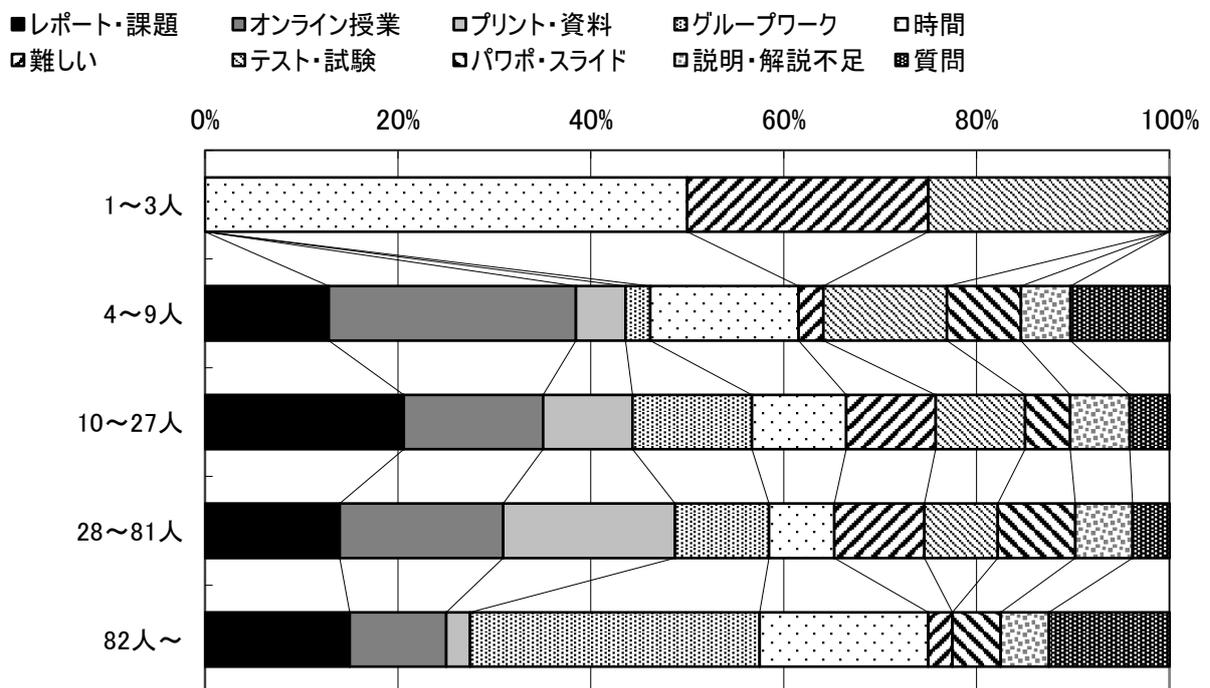
上位10項目の学部別割合



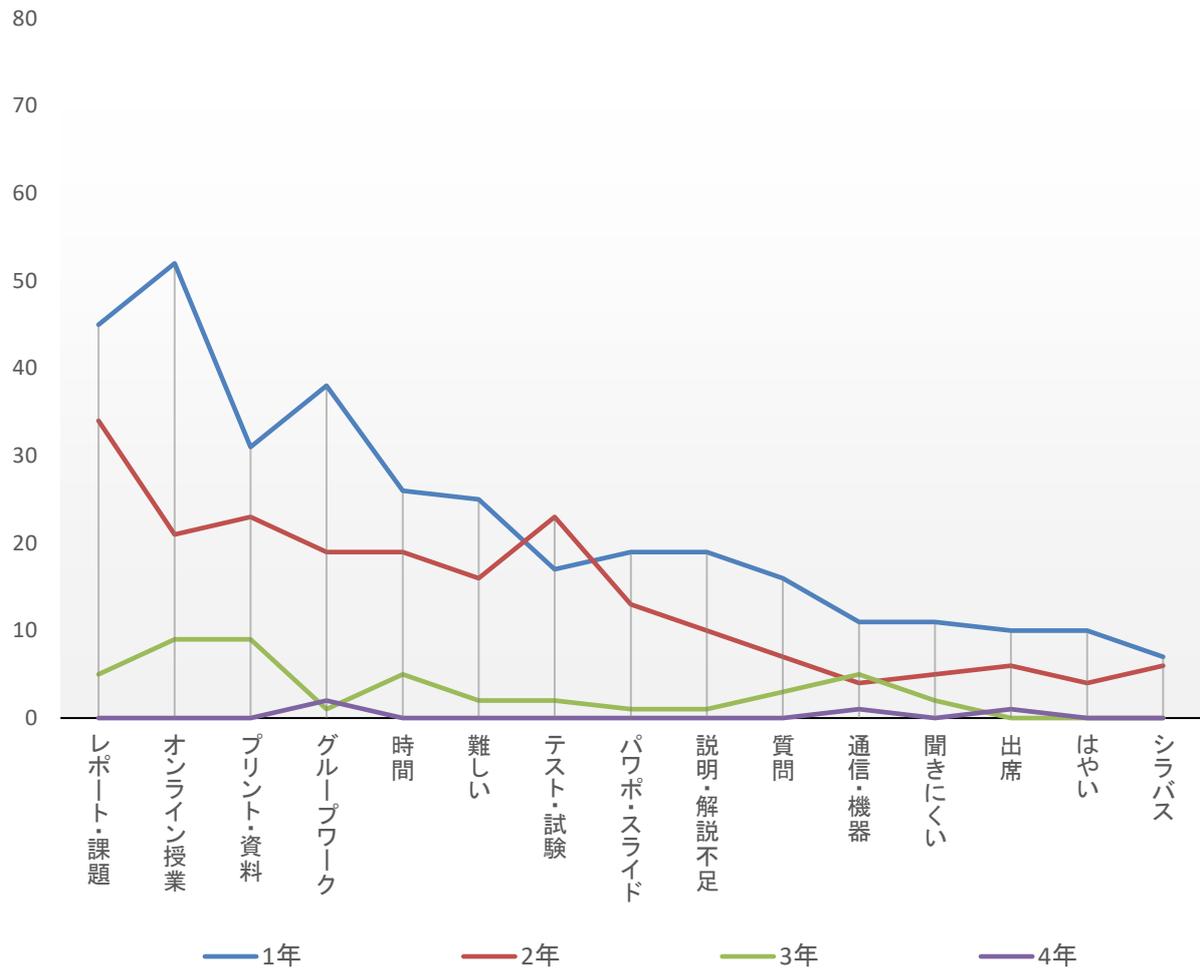
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【回答人数帯別】



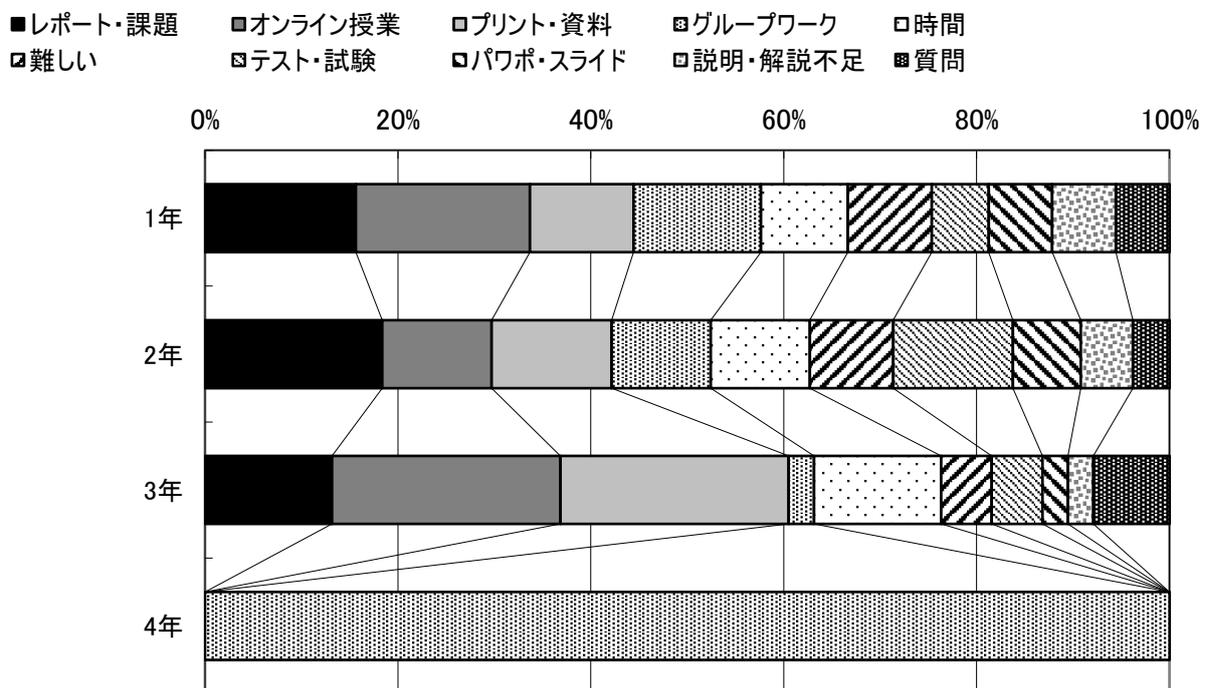
上位10項目の回答人数帯別割合



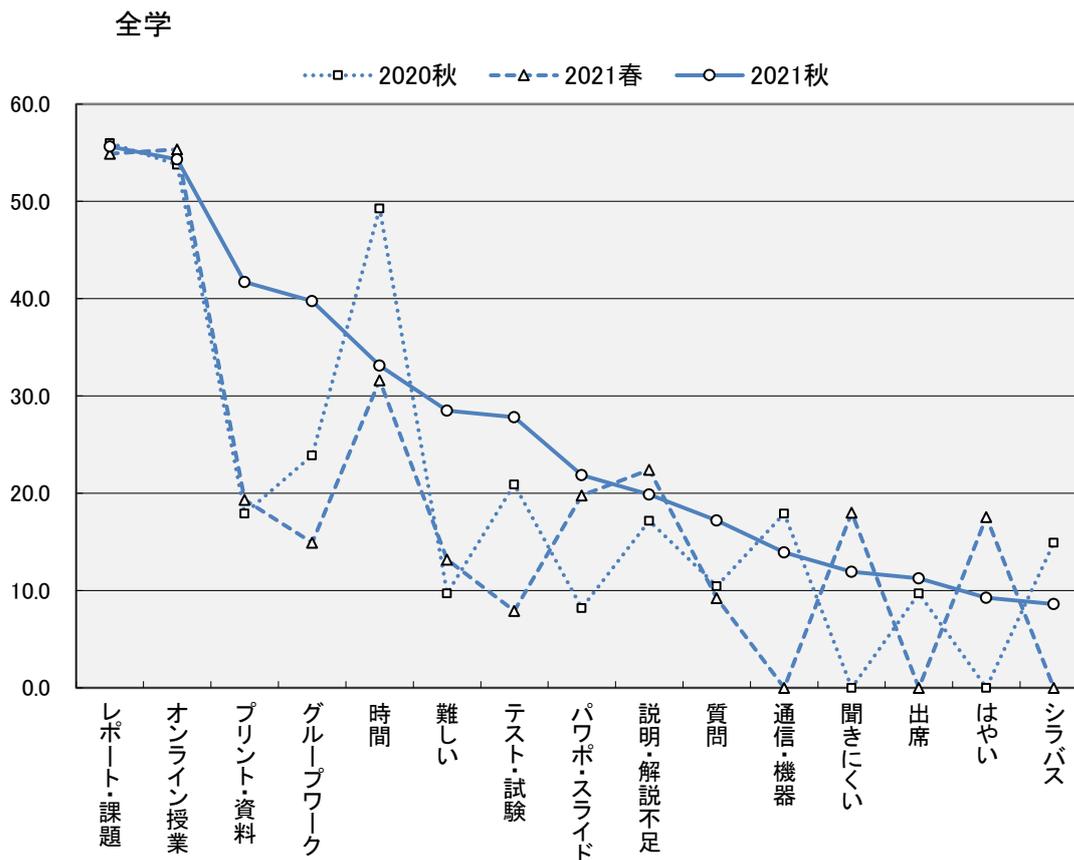
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】全学

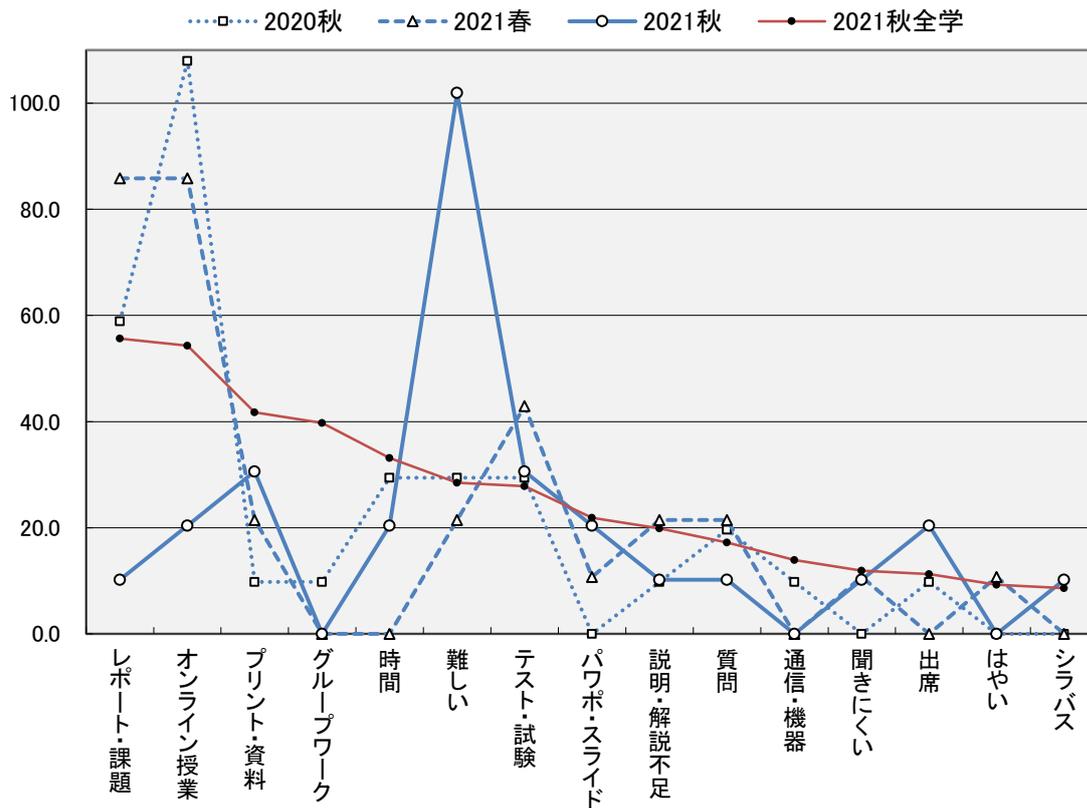


「出現率」について

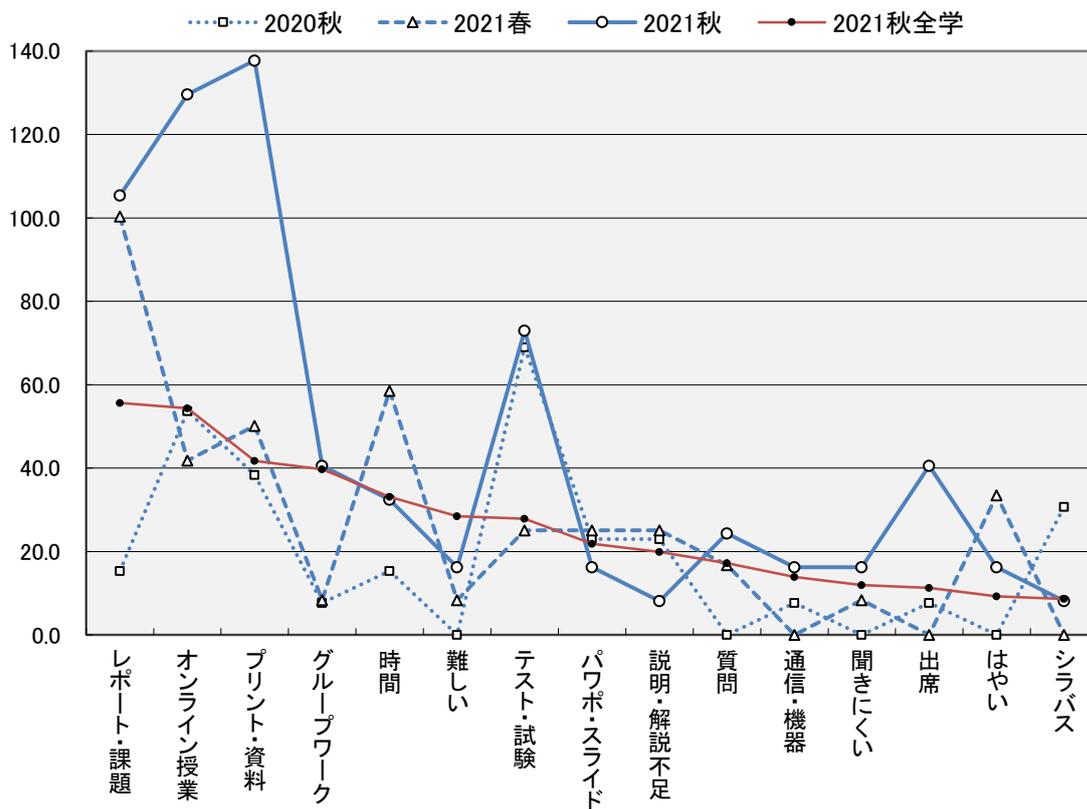
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
出現率は下記の式で計算されます。
出現率 = 出現数 / 回答者数 × 10⁴
(回答者数: 授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

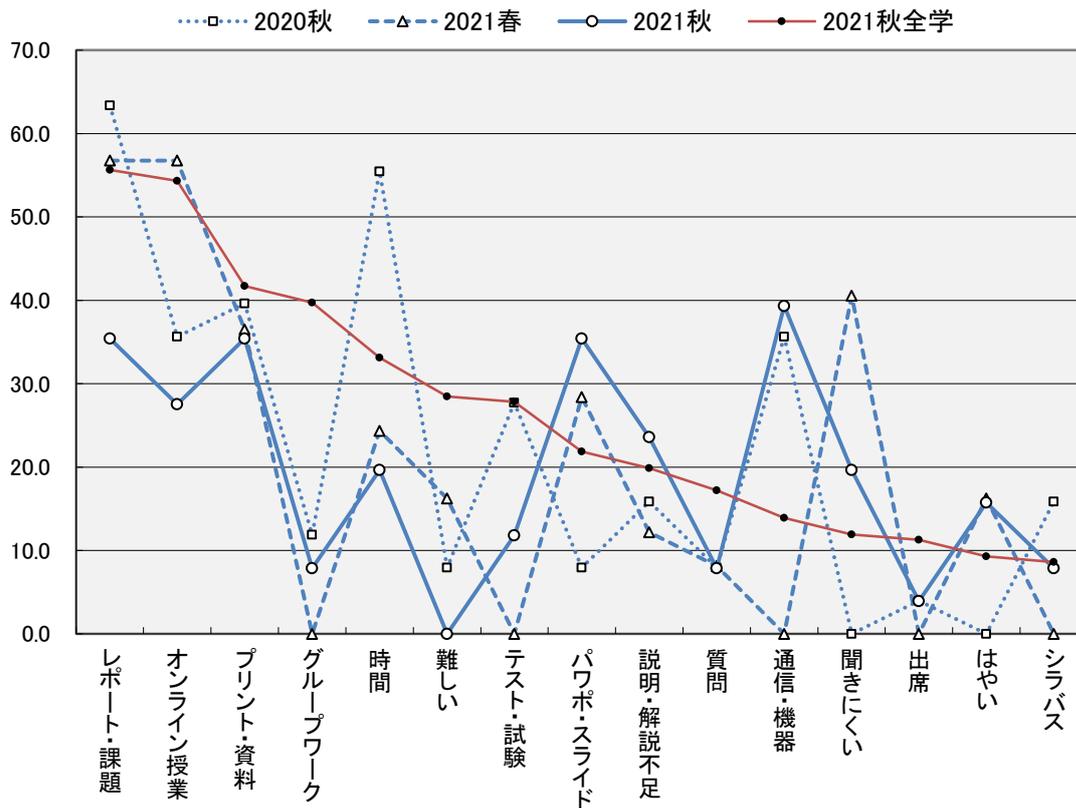


《人間学部》

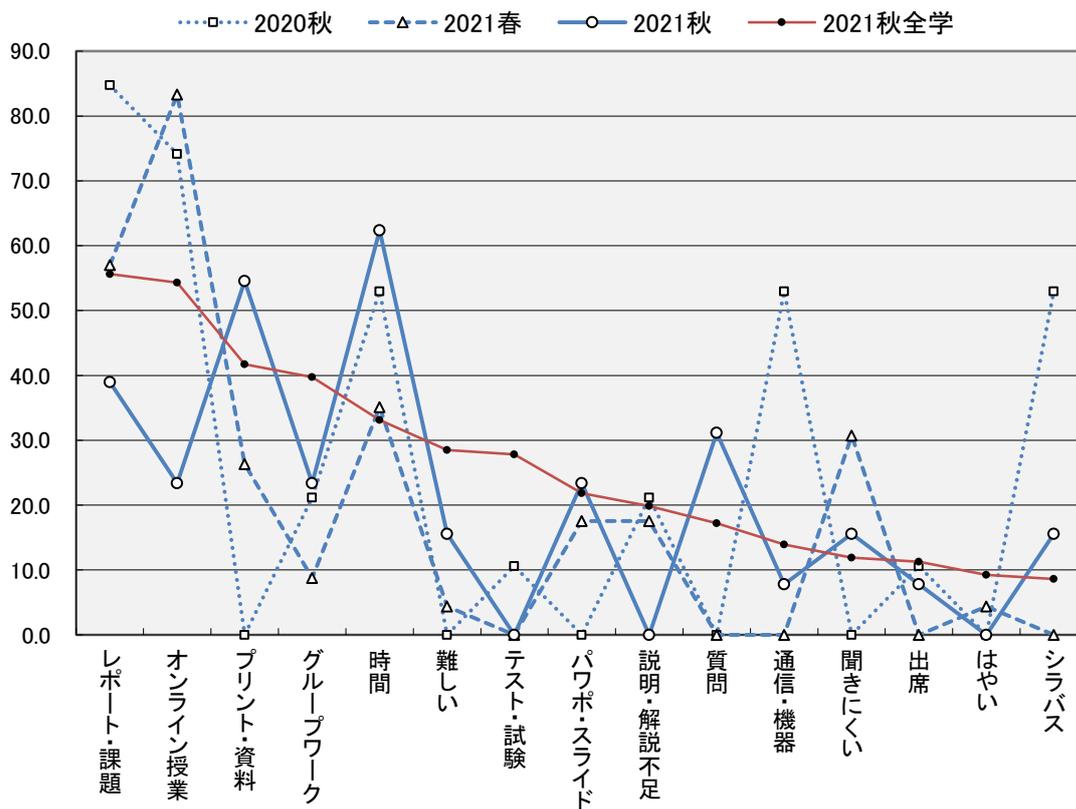


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

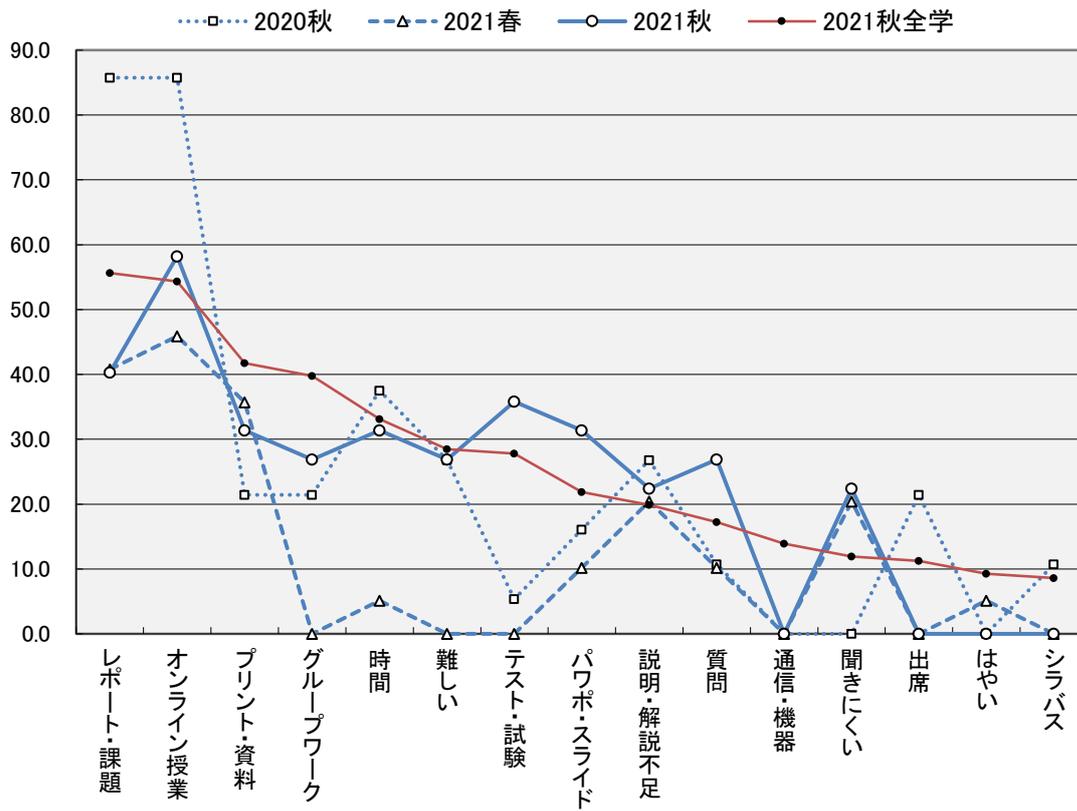


《表現学部》

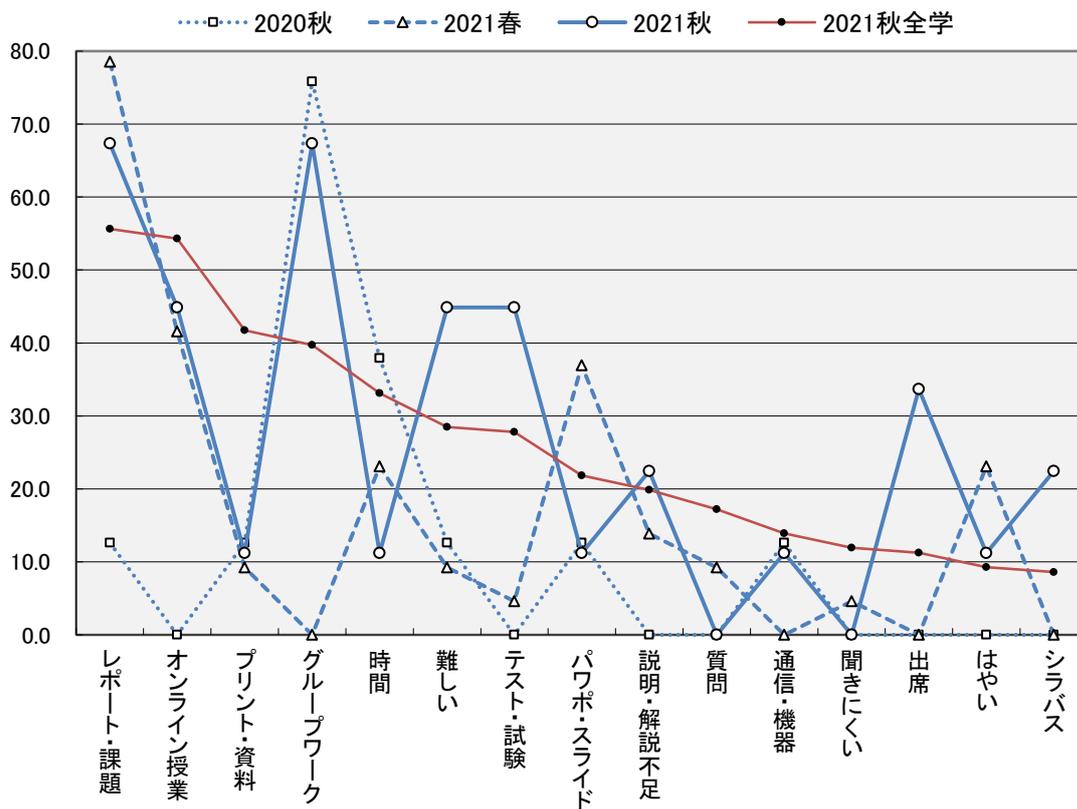


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》

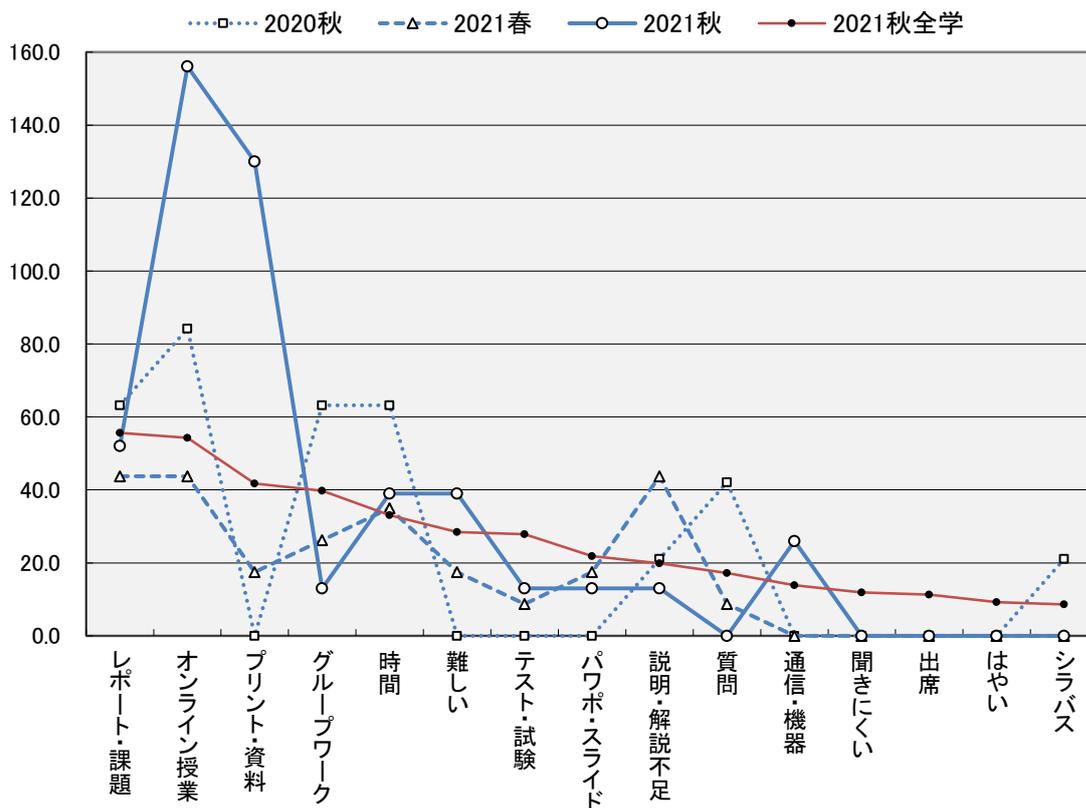


《地域創生学部》

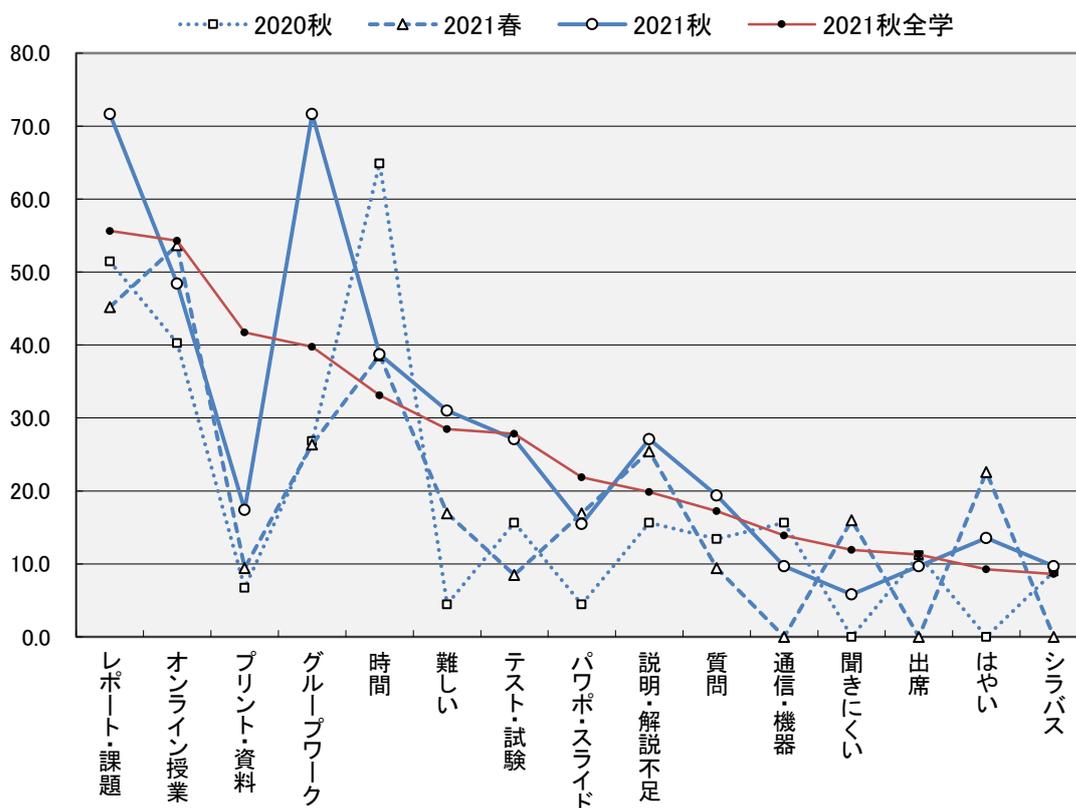


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《社会共生物学部》

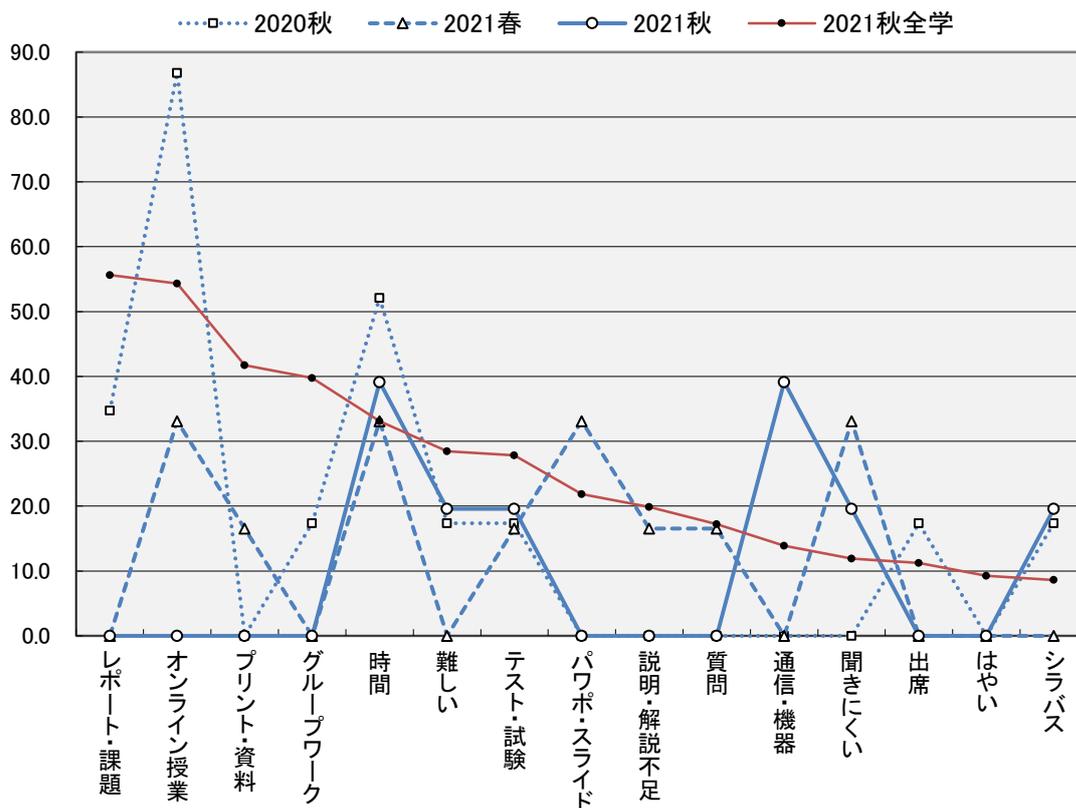


《I類・第II類科目(学部共通)・III類》

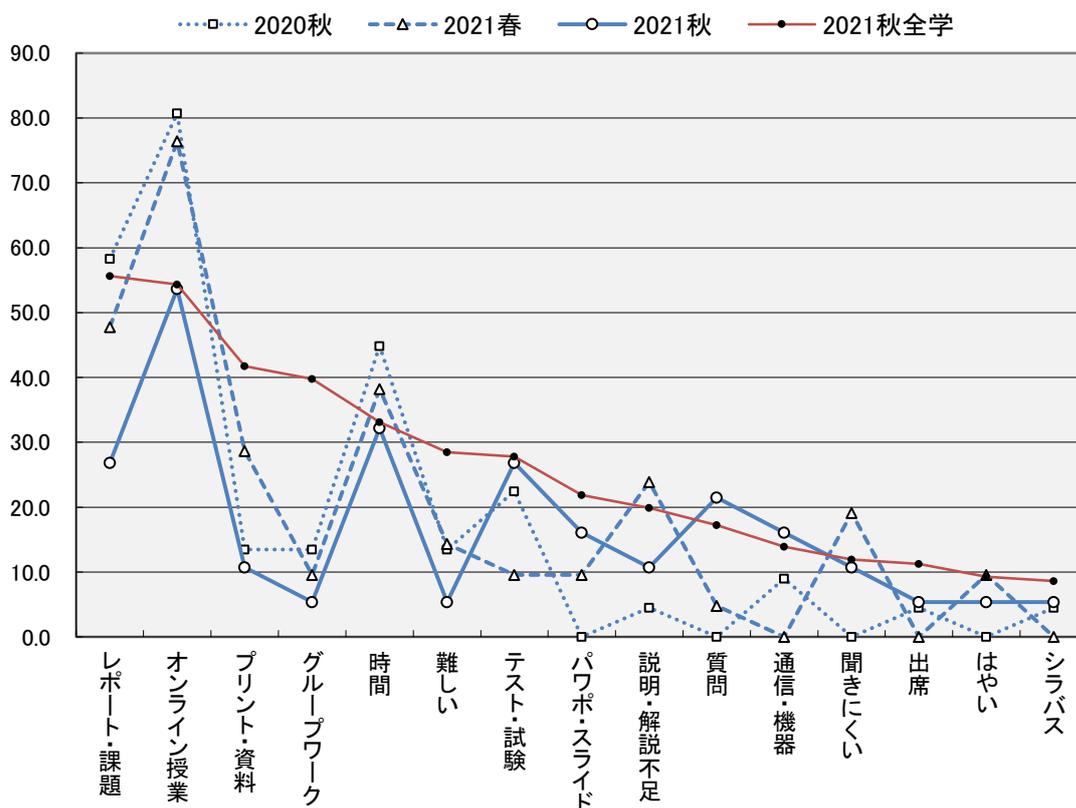


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

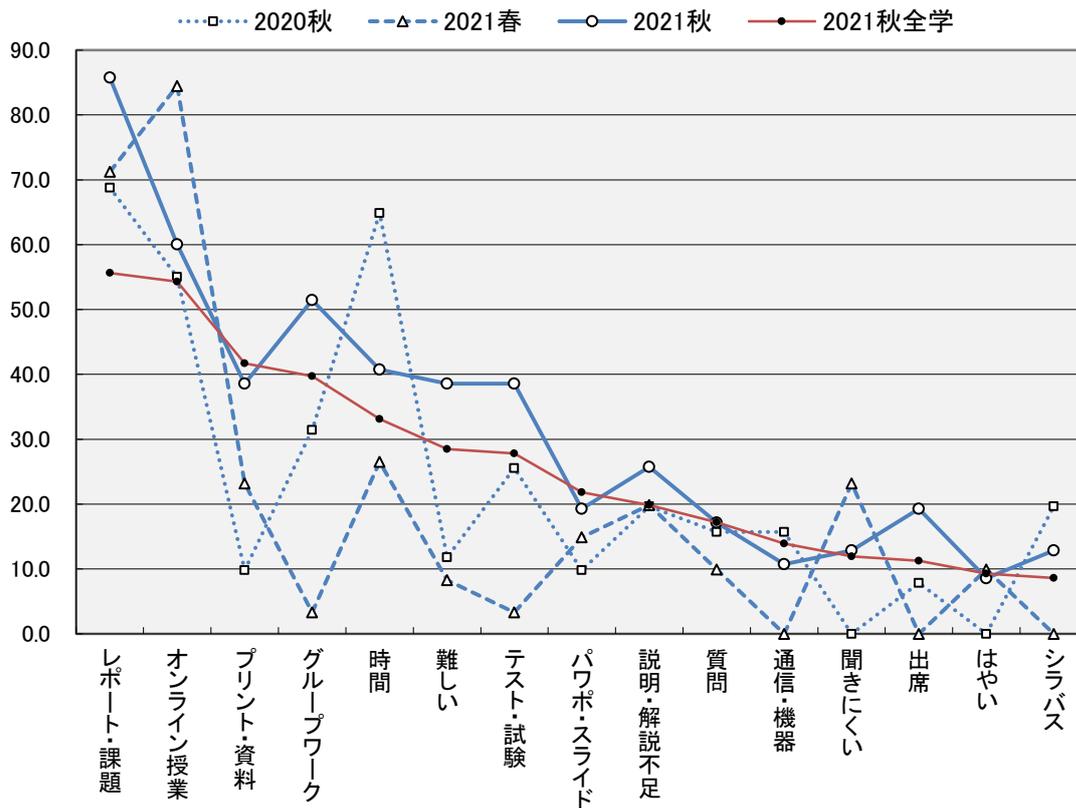


《4～9人》

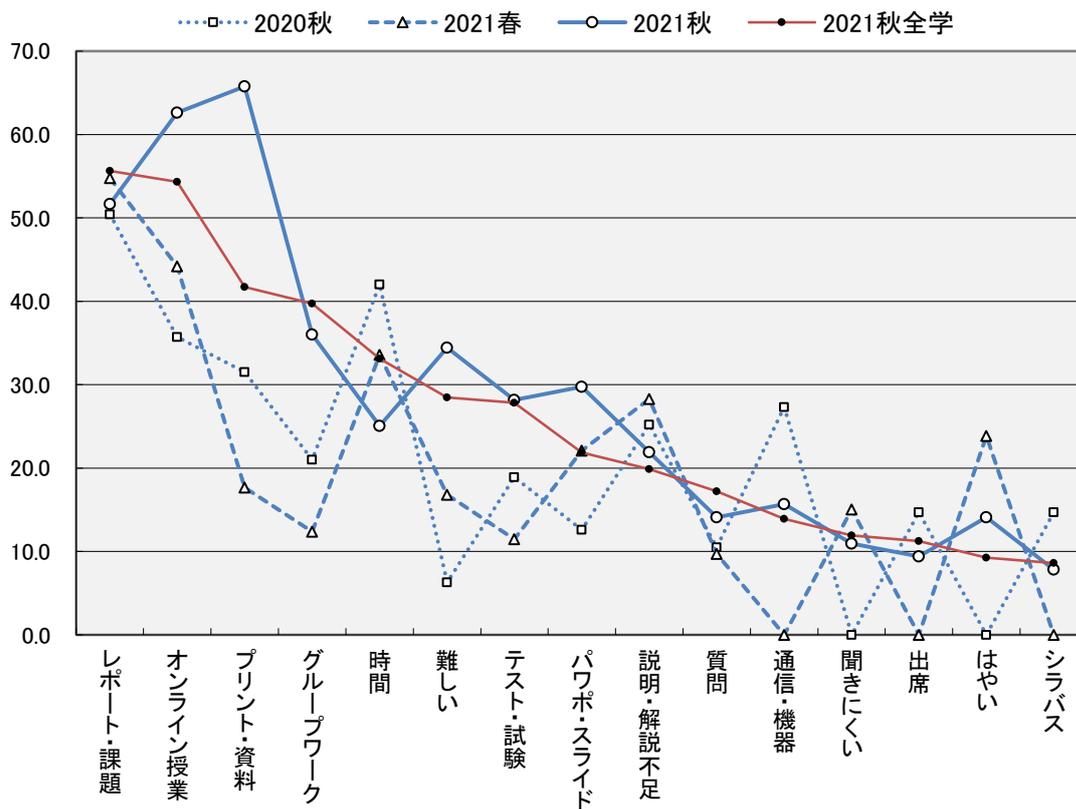


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】 回答人数帯別

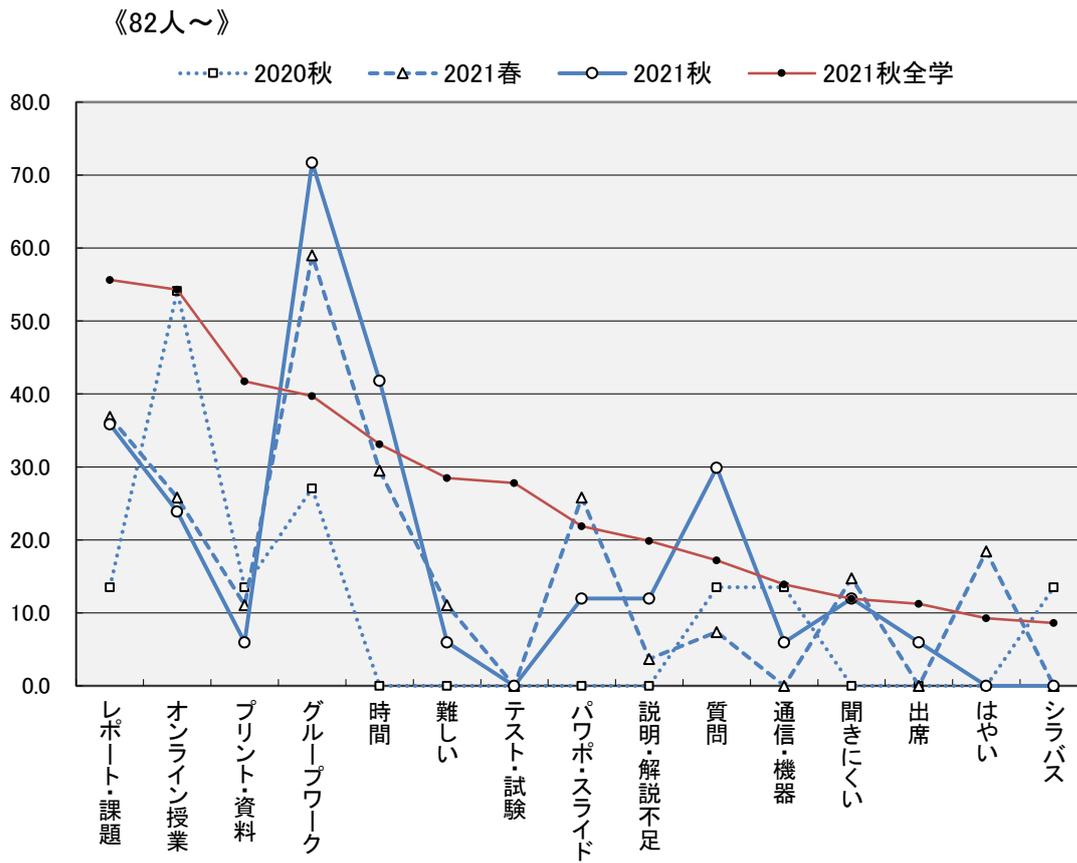
《10～27人》



《28～81人》

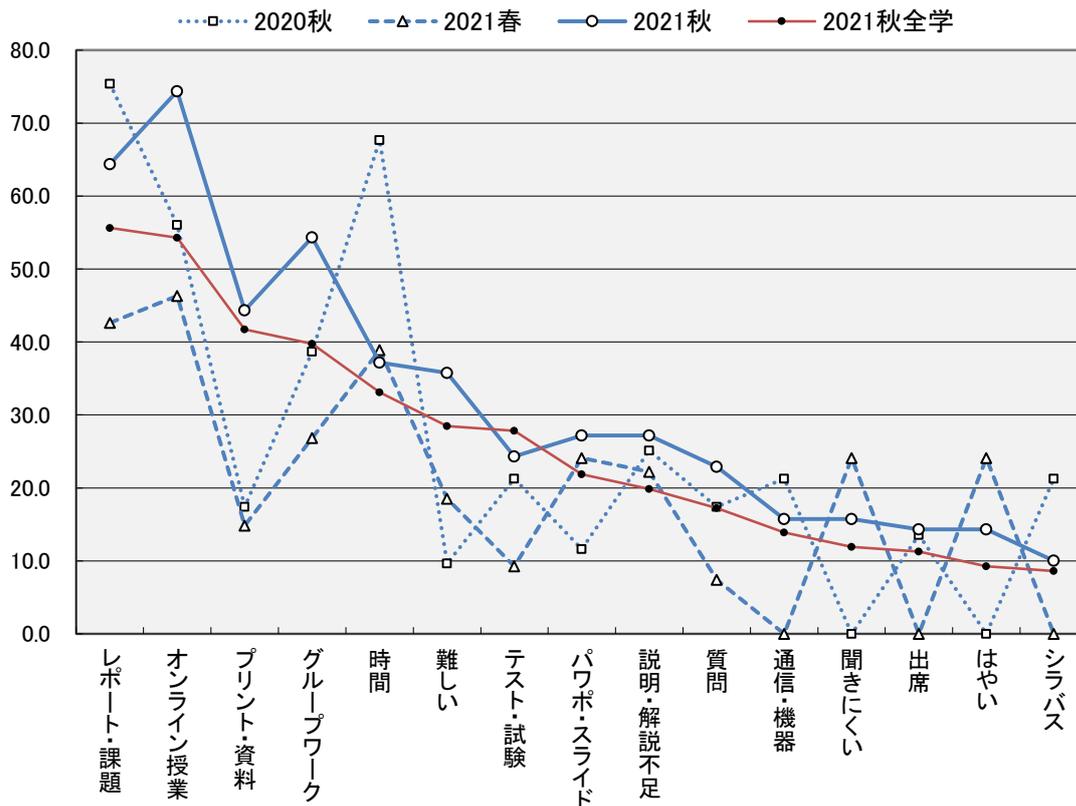


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

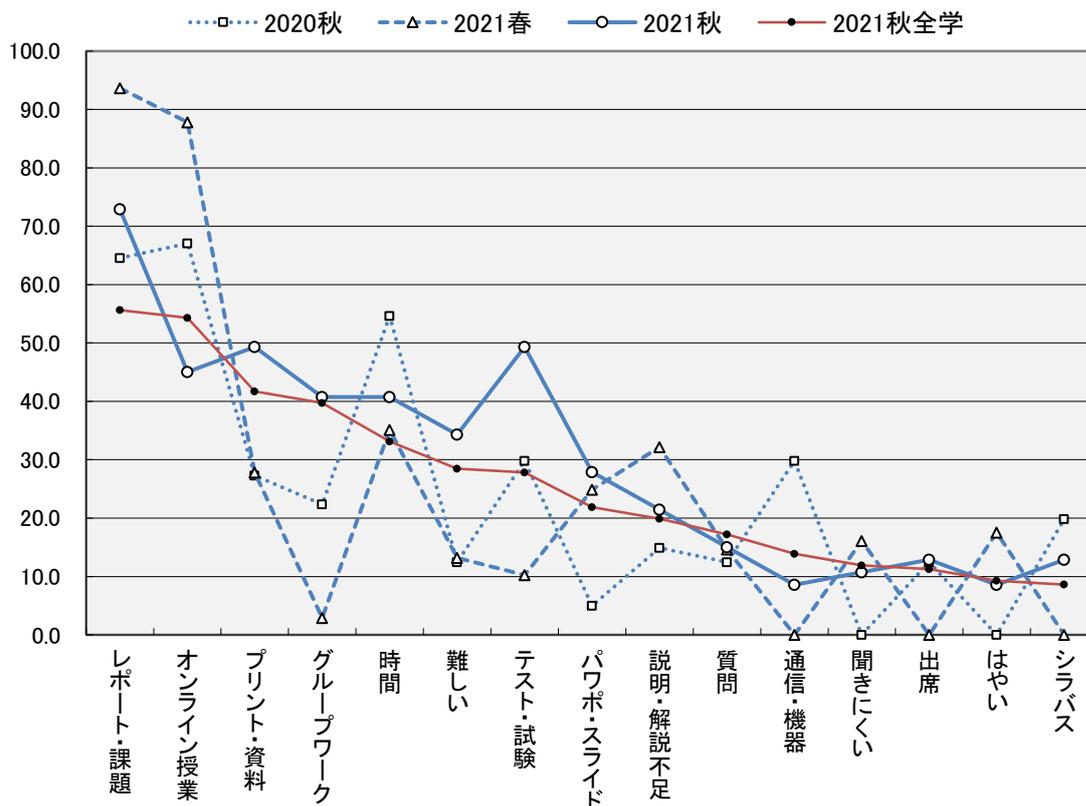


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】 学年別

《1年》

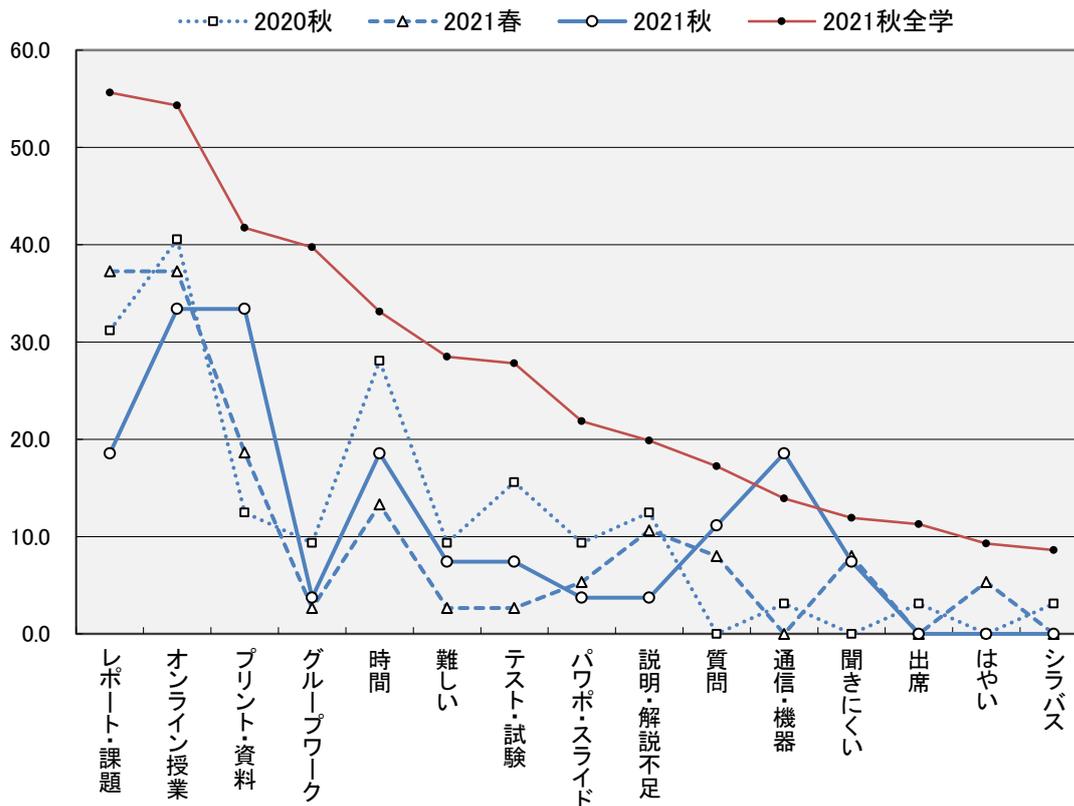


《2年》



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



《4年》

